2019 年度　博士学位論文

ルーラルツーリズムにおける農村女性の役割

－イタリア南チロルを事例として－

立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程

五艘　みどり

2019 年度　博士学位論文

ルーラルツーリズムにおける農村女性の役割

－イタリア南チロルを事例として－

指導教授　　杜　国慶

立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程

五艘　みどり

ルーラルツーリズムにおける農村女性の役割

—イタリア南チロルを事例として—

正誤表

内容に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

頁	行・図表番号	誤	正
138	20 行目	集落内に 8	集落内に 9
147	表 5-2 の 1 行目	定着性	埋め込み
186	17 行目	豊田三佳	豊田三佳先生

目 次

要　旨 8

第１章　序論 12

1 研究の背景と目的 12

1-1 研究の背景 12

1-2 研究の目的 15

1-3 研究の対象地域 15

2 先行研究 18

2-1 ルーラルツーリズム研究 18

2-2 農村とジェンダーの研究 28

2-3 南チロル農村に関する研究 32

3 研究の枠組み 33

3-1 研究の枠組み 33

3-2 研究の内容 41

3-3 本論の構成 42

4 概念の規定 43

4-1 南チロルおよび他の地名 43

4-2 農村 43

4-3 農村女性 44

第２章　南チロルのルーラルツーリズムと農村女性 45

1 南チロルの概要 45

2 南チロルの歴史と農業 50

2-1 南チロルの歴史 50

2-2 南チロルの農業 53

3 南チロルにおけるルーラルツーリズムの導入と発展 59

3-1 南チロルのツーリズム 59

3-2 ルーラルツーリズムの萌芽 61

3-3 ルーラルツーリズムの発展 63
3-4 ルーラルツーリズムの現状 69
4 南チロルの農村女性 71
4-1 1970 年代までの南チロルの農村女性 71
4-2 南チロル農村女性協会の設立と取組み 74

第 3 章　県内ネットワークにおける農村女性の役割の変化 76
1　調査の概要 76
1-1 アグリツーリズモ経営に関わる農村女性へのアンケート調査 76
1-2 アグリツーリズモ経営農家へのインタビュー調査 79
1-3 組織等へのインタビュー調査 83
2 農産物の生産と販売における新たな役割 84
2-1 農産物のメッセンジャーとしてのネットワーク 84
2-2 農産物加工品生産直売のネットワーク 87
3　地域資源の観光資源化における新たな役割 90
4　アグリツーリズモ運営者という新たな役割 93
4-1 アグリツーリズモ運営の教育ネットワーク 93
4-2 次世代への農村教育ネットワーク 96
4-3 アグリツーリズモ運営者間のネットワーク 98
4-4 海外ゲストとのネットワーク 101
5　経済と政治における存在感の向上 102

第 4 章　集落内ネットワークにおける農村女性の役割の変化 107
1 農家間および農家と非農家を結び付ける新たな役割 107
1-1 アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワーク 107
1-2 アグリツーリズモとレストランによる近隣住民ネットワーク 109
1-3 趣味のネットワーク 111
1-4 アグリツーリズモ運営者間および既存観光業者とのネットワーク 113
2 経営者としての存在感と家庭内の役割の変化 117

2-1 経営者としての存在感の高まり.....117
2-2　家族間の役割の変化.....124
2-3 夫婦間の業務分担の変化.....126
2-4 子ども世代への影響.....131
3　既存のネットワークへの関与の深化.....132
3-1 農業ネットワーク.....132
3-2 教会ネットワーク.....134
3-3 近隣住民ネットワーク.....135

第5章　南チロルのルーラルツーリズムにおける農村女性の役割.....138
1 ルーラルツーリズムを契機としたネットワークの拡大.....138
1-1 アグリツーリズモを運営する農村女性のネットワーク関与の傾向.....138
1-2 ネットワークの拡大における類型区分.....141
2 ネットワークの拡大と農村女性の役割の変化.....146
2-1　県内.....146
2-2 集落内.....152
3 ルーラルツーリズムの内生性、補完性、エンパワーメント.....156
4 ルーラルツーリズムの埋め込み、持続性.....160

第6章　結論.....162
1 統合型ルーラルツーリズム形成における農村女性の役割の変化.....162
2 統合型ルーラルツーリズム理論の問題点と再構築の方向性.....165

参考文献.....169
索　引.....183
謝　辞.....186

図一覧

図 1-1　イタリアの行政区画 16
図 2-1　南チロル全域とコムーネの分布 46
図 2-2　南チロルの人口推移（1869-2017 年） 48
図 2-3　南チロルのコムーネの人口規模別コムーネ数比率（1880-2011 年） 49
図 2-4　南チロルの農業事業体数の変化（1982-2010 年） 53
図 2-5　南チロルにおける年代別農業従事者数（2010 年） 54
図 2-6　南チロルの用途別農地割合（%）（2010 年） 56
図 2-7　南チロルにおけるリンゴとブドウの生産量指数の推移（1975-2015 年） 57
図 2-8　南チロルの国内外観光客数および増加率（1960-2016 年） 60
図 2-9　南チロルを訪れる外国人観光客の構成（2015 年） 60
図 2-10 南チロルのアグリツーリズモ数と宿泊者数の推移（1997-2015 年） 64
図 2-11 南チロルの 1 アグリツーリズモ当りの年間宿泊者数の推移（1997-2015 年） 64
図 2-12 南チロルにおけるルーラルツーリズムの発展段階 68
図 2-13 南チロルの来訪者宿泊先の構成（2017 年） 71
図 2-14 南チロル農村女性協会の活動展開 75
図 3-1　南チロルのアグリツーリズモ農家における主要農産物・農産物加工品の種類（2017 年） 87
図 3-2　地域別農村女性による観光向け体験プログラムの件数（2016 年） 91
図 3-3　年齢別に見るアグリツーリズモ開業後の社会関係の変化 99
図 3-4　回答割合に見るアグリツーリズモ開業によって起こった意識の変化 101
図 3-5　農村女性が運営に関わるアグリツーリズモの収入割合 103
図 3-6　地域別アグリツーリズモ経営農家の収入割合 104
図 3-7　年齢別アグリツーリズモ経営農家の収入割合 105

図 5-1　アグリツーリズモ運営のための教育による県内ネットワークの拡大 141
図 5-2　アグリツーリズモのレストランによる集落内ネットワークの拡大 144
図 5-3　ネットワークが示す内生性、エンパワーメント、補完性、埋め込み 157
図 6-1　南チロルの農村女性の活動に見る統合型ルーラルツーリズムの特徴 166

表一覧

表 1-1　Barcus による統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴 25
表 1-2　ルーラルツーリズムにおける農村女性に対する分析の視点 34
表 1-3　具体的な分析内容 40
表 2-1　南チロルにおける言語別人口構成の推移（2016 年） 49
表 2-2　南チロルの歴史略年表 51
表 2-3　南チロルの果樹、野菜等の生産量（2016 年） 57
表 3-1　アグリツーリズモ経営の調査項目 78
表 3-2　サン・ジェネジオのアグリツーリズモの概要（2016 年） 81
表 3-3　サン・ジェネジオのアグリツーリズモ農家の農業状況（2017 年） 82
表 3-4　インタビュー対象組織 83
表 3-5　Haslach 家政・栄養専門学校のアグリツーリズモ基本講習の例 94
表 3-6　アグリツーリズモ経営に関わる農村女性における開業後の社会関係の変化 98
表 4-1　アグリツーリズモの開業主張者と実質的経営者の人数割合（2017 年） 114
表 4-2　アグリツーリズモ経営における業務担当の割合（2017 年） 115
表 4-3　アグリツーリズモ開業後の家事・育児における支援状況（2017 年） 125
表 4-4　アグリツーリズモ⑬における開業前後の日課の変化（夏季） 128
表 4-5　アグリツーリズモ⑫における開業後の日課（夏季） 130
表 5-1　サン・ジェネジオ村の農村女性とネットワークの関わり 139
表 5-2　ネットワークにおける農村女性の役割とそれらが示す内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み 147

写真一覧

写真 2-1　南チロルのブドウ畑 55
写真 2-2　南チロルのリンゴ畑 55
写真 2-3　フットパスを示す看板 70
写真 3-1　ルーター・ハンが発行する農産物加工品のパンフレット 89
写真 3-2　アグリツーリズモで農産物加工品の説明をする女性 89
写真 3-3　南チロル農村女性協会による「私達の手から」パンフレット 91
写真 4-1　アグリツーリズモ①の様子 118
写真 4-2　アグリツーリズモ⑦の様子 120
写真 4-3　アグリツーリズモ⑨の様子 121
写真 4-4　アグリツーリズモ⑫の様子 122

要　旨

農産物価格の低下と農村人口の都市流出による農村部の衰退は、先進国共通の問題である。その打開策としてルーラルツーリズムが注目されるが、地域住民への社会的、経済的効果の還元は疑問視されており、望ましい導入方法が議論されている（Lane，1994；Oppermann，1996；Page & Getz，1997）。一方、農村の維持には女性の定着が不可欠であり、農村女性の社会進出も進むなか（Huges，1997；Oldrup，1999；Pini，2003；秋津ほか，2007）、ルーラルツーリズムへの女性の関わり方もより注目されて良い段階に来ている。そこで本研究は、イタリアの南チロルの農村女性に注目し、彼女達がルーラルツーリズムにおいてどのような役割を得て発展に貢献したのかを、統合型ルーラルツーリズムの視点を用いて明確にすること目的としている。統合型ルーラルツーリズム（Integrated Rural Tourism）は、Saxena et al.（2007）や Cawley & Gillmor（2008）が提唱した新たなルーラルツーリズムの概念で、これまでの内発的観光開発の考え方に農村住民の主体的な外部との連携を加えた概念である。Barcus（2013）は統合型ルーラルツーリズムの特徴をネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み、持続性としたが、本研究ではこの 7 つの特徴を分析の視点に応用する。本研究の意義は、ルーラルツーリズム発展における農村女性の役割を分析対象にするという新規性、統合型ルーラルツーリズムの考え方に一石を投じるという理論的批判の 2 点にある。なお、本研究の内容は、南チロルでアグリツーリズモ運営に関わる農村女性へ向けたアンケート調査、県内集落のサン・ジェネジオ村のアグリツーリズモ農家と南チロルの農村組織等へのインタビュー調査としている。本研究の構成は、第 1 章を序論とし、第 2 章は南チロルのルーラルツーリズムと農村女性について整理し、第 3 章では県内、第 4 章は集落内のネットワークにおける農村女性の役割の変化について分析する。第 5 章は南チロルのルーラルツーリズムにおける農村女性が果たした役割について分析を行い、第 6 章を結論としている。

南チロルは複数の国に統治された歴史から高い自治意識を持つ。主要言語はドイツ語で、農村部はドイツ語系文化が強く残る。南チロルは 1972 年にイタリア自

治県となってから約 20 年かけて自治を確立し、その過程で主産業の農業を強化した。同時に農業の担い手である農村女性が兼業せず自宅で起業する方法が模索されるようになり、1981 年に南チロル農村女性協会が設立され、早期に農村女性の社会的地位向上が図られた。南チロルの農村女性はルーラルツーリズムの導入にも貢献した。1960 年代の南チロルでは農業収入の低下から農村人口が都市へ流入したが、南チロルの伝統とアイデンティティを継承する農村住民の都市流入が政治的に問題視されるようになり、南チロル農民連合とカトリック教会が協力してオーストリアの「農村で休暇を（Urlaub auf dem Bauernhof）」を紹介して農家民宿の流れを生んだが（Tommasini，2013b）、この時に広報役となったのが南チロルの農村女性だった。こうしてオーストリアの影響を受け始まった農家民宿だが、1985 年にイタリアの国法第 730 号法（通称アグリツーリズモ法）が制定されると、県は農家民宿をアグリツーリズモと改めて制度設計を進めた。そして南チロルのアグリツーリズモは、農家のみが経営を行う 6 部屋または 10 ベッドまでの宿泊施設で、食事は 80%以上の地域産品を出し、観光労働日数が農業労働日数を超過せず、開業時には基本講習を 85 時間受講するといった規定が設けられた。1999 年には南チロル農民連合傘下にルーラルツーリズム推進組織のルーター・ハン（Roter Hahn）が設立され（Südtiroler Bauernbund，2018）、農家のアグリツーリズモ開業を支援したこともあり、アグリツーリズモ数は 2,798 軒、宿泊者数は 374,093 人（2015 年）と急増した（五艘，2016a）。

県内では、ルーラルツーリズム登場以前に、狂牛病問題などを背景に農村女性が農産物の安全性に関する情報提供を行う農産物メッセンジャーのネットワークが存在し、農村女性が社会で主体的に活動する基盤が形成されつつあった。ルーラルツーリズム登場後には農村女性は、農産物生産販売ネットワークを形成して自家用の農産物加工品をゲストに土産品として販売する役割を担い、地域資源の観光資源化によるネットワークを形成して農家らしい体験プログラムをゲストに提供し、次世代教育ネットワークを形成して担い手に家族を巻き込みながら県内小学生に農場教育を行い、アグリツーリズモ講習を契機にアグリツーリズモ運営者ネットワークを形成した。また一部のアグリツーリズモ農家は海外ゲストのネットワークを形成し国際交流に視野を拡大させた。さらに農村女性はルーラルツーリズムで活躍する

ことで県内における既存の経済ネットワークにおける存在感を向上させた。

集落内では、アグリツーリズモで提供する食事の材料調達を契機とした、アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワークが形成され農産物の販路拡大に貢献し、また、アグリツーリズモとレストランのネットワークも形成され地域住民の集う場を創出した。さらに、アグリツーリズモ運営者同士のネットワークは県内と同様に集落内にも形成され、運営者の友人の獲得や啓発の機会を得た。このネットワークから派生して、アグリツーリズモ運営者同士による趣味のネットワークが形成された。このようにアグリツーリズモ運営に関わる農村女性は、新規にネットワークを形成すると同時に、既存のネットワークへ組み込まれ、農業や既存観光業者のネットワークと繋がり社会参画を強めたり、育児などにおける近隣住民との互助ネットワークを強めたりした。アグリツーリズモ運営を積極的に行う農村女性の家庭内では、女性における経営者としての存在感が増し、同時に家族間の役割分担が変化した。

農村女性とネットワークの関わりにおいては、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性は多くの場合において経済ネットワークにおける存在感を高めており、なかでも複数のネットワークに所属する農村女性ほど積極的にアグリツーリズモを運営していることを示した。また農村女性によるアグリツーリズモ運営が農業の活性化に貢献し、同時に農村女性の社会参画を促したことを示した。農村女性のネットワークの拡大においては、アグリツーリズモ運営に関して学びを重視する女性は県内ネットワークに、アグリツーリズモとレストランを重視する女性は集落内のネットワークに拡大が見られるという 2 つの類型を示した。さらにネットワークの広がりにおいて農村女性が果たした役割は、統合型ルーラルツーリズムの特徴である内生性、エンパワーメント、補完性、埋め込みを示したが、県内においては農業的ネットワークに内生性が、観光業的ネットワークにエンパワーメントが強く示され、集落内で 2000 年以降に形成されたネットワークは補完性を示すことを明らかにした。

結論として、ルーラルツーリズムにおける農村女性の重要性と、農村女性を扱う場合における統合型ルーラルツーリズムの理論のあり方という 2 点を指摘した。南チロルの農村女性はルーラルツーリズムへの関わりを通して多様なネットワ

ークを形成し、新たな役割を担うが、その過程で既存の価値観を変化させ次世代にも影響を与えた。そして農村女性のルーラルツーリズムへの関与は、ルーラルツーリズムの発展に貢献したのみでなく、農業の活性化にも貢献した。こうした農村女性の活躍の背景には南チロルの高い自治意識と、地域への強い誇りが社会・文化的背景として存在した。Barcus（2013）の統合型ルーラルツーリズの 7 つの特徴は、ネットワーク以外の特徴を並列に扱うが、本研究のように農村女性を分析対象とした場合には、内生性とエンパワーメントが深く関係することが明らかになり、また埋め込みと持続性は 5 つの特徴が述べられてこそ示される特徴であることを指摘することができる。本研究ではルーラルツーリズムにおける農村女性の役割を分析することで、ルーラルツーリズムにおける農村女性の重要性を明らかにしたのみでなく、統合型ルーラルツーリズムにおいて農村女性を分析する場合の理論的再構築の方向性を示したという点で、意義のある研究となったと考えている。

第１章　序論

本章では、研究の背景と目的、研究の方法と内容を明示したのち、先行研究の整理を行った上で本研究の意義を示す。先行研究では研究の中心的概念である統合型ルーラルツーリズムの概念を整理した上で、近年の農村女性研究の課題を照らし合わせながら、研究の枠組みを提示する。また、研究対象の選定理由を明らかにするとともに、研究上で使用する概念の規定も行う。

1 研究の背景と目的

1-1研究の背景

第二次世界大戦後、日本のみならず多くの先進国では工業化で農村人口が都市へ流入し、農村が衰退した。先進国農業において農産物は国際的に激しい競争下に置かれ、農業の採算性は低下し、農村は農業のみでは維持できないという考えが共通認識された。こうしたなか、農業を補完する新たな地域産業として観光が注目されることとなり、多くの国や地域でルーラルツーリズムが導入されるようになった（市川，2017；大江，2003；祖田，2000；溝尾，2003；OECD，1995）。しかしながらルーラルツーリズムが導入され地域に定着しても、それらの経済的・社会的効果が十分に住民に還元されているのかという問題が浮上し、農村を持続的に維持・発展させる望ましいルーラルツーリズムのあり方が議論されるようになった（Blamwell & Lane，2000・2014；Briedenhann & Wickens，2004；Chung，2010；Fleischer，2000・2005；Garrod et al.，2006；Gartner，2004；Go et al.，2013；Goulding et al.，2014；Hall et al.，2003；Hall，2004；Haven-Tang & Jones，2012；Joppe et al.，2013；Komppula，2014；Lane，1994；Oppermann，1996；Lane et al.，2013；Lo et al.，2014；Macdonald & Jolliffe，2003；Maleki et al.，2014；Mcareavey & Medonagh，2011；Miller，2001・2005；Okazaki，2008；Page & Getz，1997；Park & Yoon，2011；Saarien，2007；Udov & Perpar，2007；UNWTO，2014；Wilson et al.，2001；Wearing & Mcdonald，2010）。こうしたなか、ルーラルツーリズムにお

ける経済的・社会的効果を地域住民に優先的に還元させるには、地域住民が主導的に地域内外のコミュニティや組織と連携して内発的観光開発を進めることが必要である（Donner et al.，2016）と言われるようになったものの、具体的な運用の難しさが指摘された（Sharpley, 2002；Sharpley & Vass, 2006；Sharpley & Jepson, 2011）。実際、農村部の既存コミュニティや組織は保守的な側面を持ち、保守性の強さから地域住民の活動を制限することもあった（Saxena et al.，2007）。また農村部にはルーラルツーリズムをビジネスとして展開していくための技術が不足しており（石川・山村，2012）、内発的観光開発の促進が円滑に進まない現状もあった。

このような背景を受けて、近年ヨーロッパのルーラルツーリズム研究において、統合型ルーラルツーリズム（Integrated Rural Tourism）という新たな考え方が広がった。統合型ルーラルツーリズムは、これまでの農村部における内発的観光開発の考え方をより発展させたものと考えられ、空間地理学の研究者達によって提唱された。統合型ルーラルツーリズムは、ルーラルルツーリズムにおける地域の担い手（Local Actors）が関わるネットワークに注目し、そのネットワークが経済的、社会的、文化的、自然的、人的な資源を結び付けている連鎖や構造に焦点を当てている（Saxena & Ilbery，2008）。また統合型ルーラルツーリズムは、地域住民が関わるネットワークが多様な資源を結びつけることで、地域社会に複数の利益をもたらすとしている（Clark & Chabrel，2007）。そして、ネットワークに注目することで、これまでの内発的観光開発より、具体的で実用的なルーラルツーリズムの理論となっている。こうしたことから本研究では統合型ルーラルツーリズムを、現段階で最も発展的で現実的な理論であると考え、研究の枠組みの基盤に据えている。

農村の人口流出が著しい地域においては、女性の定着を重視した政策の展開が必要であるという意見が見られる（増田，2014）。地域の人口を増やすためには、出産して子孫を残すことのできる年代の女性を増やすことが必要であるという考え方であり、農村で暮らす女性がいかに地域に魅力を感じるかが問われてきている。また、先進国における女性の社会進出は世界的な流れであり、こうした風潮は農村にも表れてきている。女性が社会に出て家計に貢献する兼業は、現代では経済的な家計に貢献するのみではなく、農村女性が農業の多機能化の流れに乗って農産物の消費者への直接販売など新たな分野で活躍することで、自己実現や生活満足度を高めてい

るという報告もある（Forbord et al.，2012；Wilbur，2014）。こうしたなか、ルーラルツーリズムにおける農村女性の活動に触れる研究もされるようになってきている（秋津ほか，2007；渡辺，2009）。ルーラルツーリズムは、その活動が女性の地域定着の契機になるとも考えられ、また農業を支える新たな産業にもなる。これらが同時進行することで、農村の経済と人口の安定が図られるのであれば、農村の持続的な維持と発展に繋がる。こうした観点から、ルーラルツーリズムの導入や推進においては、女性の定着と連動したあり方が模索されて良い段階であると言える。

本研究では、研究対象地をイタリアの南チロルとしている。南チロルはイタリアでもルーラルツーリズムが著しく発展する地域だが、一方で農村女性の社会的地位向上に約 40 年の歴史を持ち、農村女性がルーラルツーリズムに深く関わっていると考えられる。農村女性の社会的地位向上に歴史を持つ理由は、次のようである。まず南チロルは第一次世界大戦から第二次世界大戦終戦にかけてオーストリア、ドイツ、イタリアと統治が変わり、第二次世界大戦以降にイタリアの一部となったものの、独立機運が高まり紛争地域となったため、イタリアが 1972 年に南チロルを自治県とした。その後、南チロルは約 20 年かけて自治を確立し、その自治権確立の一つの手段として産業を強化した。こうしたなかで、主産業である農業が強化され、同時にその担い手である農村女性の地位向上も図られた。結果として、南チロルは農村女性の社会進出がイタリアで最も進んでいる地域となり、その証拠に南チロルの農村女性組織はイタリア最大規模の人数を誇ることとなった。

また、南チロルのルーラルツーリズムの導入には、農村女性が当初から関わっていた。イタリアのルーラルツーリズムは、アグリツーリズモと呼ばれる農家が経営する宿泊施設を中心に展開されており、その起源はイタリア中部のトスカーナ州にある（五艘，2016b；島津，2013；陣内，2010；松永・徳田，2007）。一方、南チロルのルーラルツーリズムはオーストリアの農家民宿の流れを受けて 1970 年代に始まった。そして、当時ルーラルツーリズムの導入における情報発信役となったのは、南チロルの農村女性であったと言われている（Tommasini，2013b）。こうしたことから南チロルでは、農村女性の地位向上や活動支援に長い歴史を持っているばかりでなく、ルーラルツーリズムの導入においても、農村女性が当初段階から関与している地域なのである。

以上のような背景から、本研究では、統合型ルーラルツーリズムの理論を基盤に据えた上で、イタリア南チロルを事例とし、農村女性が形成するネットワークに注目しながら、論を展開することとする。

1-2 研究の目的

本研究は、ルーラルツーリズムで著しい発展を遂げているイタリア南チロルを事例として、ルーラルツーリズムの発展における農村女性の役割を、統合型ルーラルツーリズムの視点を応用して明らかにすることを目的とする。具体的には、南チロルにおいてルーラルツーリズムの主要な担い手と考えられる農村女性が、どのようなネットワークを形成し、あるいは組み込まれ、そこでどのような役割を得てルーラルツーリズムの発展に貢献したのかを、統合型ルーラルツーリズムの視点を用いて明確にする。

本研究は、ルーラルツーリズム発展における農村女性の貢献について、南チロルを対象にするというテーマの新規性から、観光研究における意義があると考えている。また、統合型ルーラルツーリズムの考え方に一石を投じるものである。統合型ルーラルツーリズムの理論を使用した研究では、ネットワークに注目するという具体性はあるものの、対象とするネットワークの構成員の幅の広さから、ルーラルツーリズムの統合性が何によって帰結するのかやや不明瞭な研究が少なくない。本研究はネットワークの構成員として農村女性を浮き出たせることで、こうした問題を解決しようと考えている。

1-3 研究の対象地域

本研究で対象とする地域は南チロルとする。南チロルを研究対象地域に選定した理由は、ルーラルツーリズムが盛んなイタリアにおいて、アグリツーリズモと呼ばれる農家が経営する宿泊施設の著しい増加により、ルーラルツーリズムが発展していること、さらに、農業の担い手としての農村女性の社会的地位向上における取組みに長い歴史を持つということの 2 点が挙げられる。なお、これらの経緯については、第 2 章で詳しく述べることとする。

南チロルは、イタリアの正式な名称はボルツァーノ自治県である。県人口は 524,256 人、基礎自治体のコムーネ[1]が 118 の自治県[2]である（2016 年現在、Autonome Provinz Bozen Südtirol 2017）。イタリアの行政区域は、州（Resione）、県（Provincia）、コムーネ（Comune）という階層になっている。コムーネは日本では市区町村にあたるが、市区町村のような規模別の区分けは存在しない。イタリアには 20 の州があるが、それらは 15 の普通州と 5 の自治州に分かれている（図 1-1）。

図 1-1 イタリアの行政区画

（Can Stock Photo Inc. （2019）より著者作成）

---

[1] コムーネは日本の行政区域の市区町村に当たる、最小単位の自治体である。規模による区分けは無いが、歴史的重要性が認められた場合や一定の人口規模（10 万人以上）の場合は区を名乗ることが可能となる。イタリアの全ての地域は州・県・コムーネという階層に分かれている。中世のイタリア北部・中部の都市共同体を起源とするが制度的な継続性は無い。

[2] イタリアには自治州と自治県が存在し、一定分野における独自の立法権があり、地域で徴収される国税から高い割合の配分を受けることができる。南チロル（ボルツァーノ自治県）ではこの配分率は 9 割とされ、高い自治権が確立していると言える。

ボルツァーノ自治県が属するトレンティーノ=アルト・アディジェ州は、トレント自治県とボルツァーノ自治県の 2 つの自治県のみから成立している。その州議会は県別に組織され運営されている。自治州や自治県には一定分野において独自の立法権があり、地域で徴収される国税から高い割合の配分を受けることができる。ボルツァーノ自治県ではこの配分率は 9 割とされ、高い自治権が確立していると言える。

ボルツァーノ自治県は、第一次世界大戦以前までオーストリア領のチロル州に属した歴史から、ドイツ語系住民が多く住む。2011 年現在、南チロルの使用言語はドイツ語 62.3%、イタリア語 23.4%、ラディン語 4.1%となっている（Autonome Provinz Bozen Südtirol, 2017）。また、ドイツ語系住民の多さから、標識、看板、地図はドイツ語とイタリア語の併記となっている。ボルツァーノという地名はイタリア領になってからの新しいもので、イタリア割譲後から現在に至るまで、県内住民においてはこの地域を南チロル（ドイツ語でアルト・アディジェ[Alto Adige]）と呼ぶのが一般的である。こうした経緯から、本研究ではボルツァーノ自治県を南チロルと称することにしている。

南チロルはイタリア最北端に位置し、オーストリア、スイスと国境をなす。オーストリアとの狭間に位置するブレンネル峠を南下しヴェローナへ続く道は、古くからオーストリアより更に遠方の者を受け入れる主要街道として存在し、1857 年に鉄道が開通してからは人の往来が増加し、南チロルは地域間移動の中継点としての経済活動が盛んであった。産業構成は第 1 次産業 12.3%、第 2 次産業 24.8%、第 3 次産業 62.9%である。第 1 次産業は 1950 年代には 40%を超えていたが、現在にかけて減少傾向にあり、その代わりに観光を主とする第 3 次産業が拡大してきた（Tommasini, 2013b）。南チロルは全面積の 85%が海抜 1,000m を超え、多くが山間部である。山間部の多い南チロルの農業は雨量や土壌に違いはあるものの、農地が山間部に多く日本と地理的類似がある。また西ヨーロッパの農業大国であるフランスやドイツでは大規模農業が展開される一方、イタリアは家族農業が主体であり、農業形態においても日本と共通点がある。こうしたことから本研究の成果は、日本の農村に対し、ルーラルツーリズムの導入や推進における示唆を与えると考えられる。

なお、南チロル内での詳細な調査対象地をサン・ジェネジオ村とした。サン・ジェネジオ村は 2016 年現在、人口 3,046 人（Autonome Provinz Bozen Südtirol 2017）の村で、南チロルの農村では典型的な人口規模といえる。また、南チロルのルーラルツーリズムの発展は、既存の観光地では無く宿泊施設の少ない農村部で発展してきた経緯があり、サン・ジェネジオ村では観光産業がルーラルツーリズム開花以前に根付いていなかったことから、調査対象地に選定した。

2 先行研究

2-1 ルーラルツーリズム研究

2-1-1 ルーラルツーリズムの定義

本研究におけるルーラルツーリズムの定義を明確にするため、これまでのルーラルツーリズムの考え方の変遷をまとめ、その上で本研究のルーラルツーリズムの定義を示す。

ルーラルツーリズムの概念はヨーロッパで生まれた。工業生産の拡大による都市内部の環境悪化に伴い、休暇においては自然環境の良い農山漁村で過ごすという形態が生まれた。道路整備が進み農村へのアクセスが向上する 1960 年代以降には、低料金で滞在できる農家民宿への注目が集まり、徐々にルーラルツーリズムが広がった。しかしながら、ルーラルツーリズムへの研究者による注目は、1990 年代以降に特に増えている。これは EU の農業政策が大きく影響していると言える。

EU の前身である EEC（欧州経済協力体）は 1962 年に CAP 政策[3]を導入し、農産物の市場統合と自由化を行った。CAP 政策の導入で農業生産の効率化と農業者の所得向上が図られたが、後に市場の過剰生産物と農業者への所得補償の繰り返しという悪循環が問題視された。そこで EU では 1992 年にデカップリング政策[4]を導

---

[3] CAP 政策とは EU の共通農業政策（Common Agricultural Policy）を指し、EU 加盟国で共通に講じられている農業政策である。1950 年代当時、欧州各国で講じられていた農業政策において保護主義的性格が強かったことから、共通市場の設立、生産の増強を図るためには域内での調整が必要であるとの考え方から 1962 年に導入された。1992 年、1999 年、2003 年、2008 年、2013 年に見直しが行われている（農林水産省ホームページ，2019 年 1 月時点）。

[4] デカップリング政策（Decoupling）は 1992 年の CAP 政策見直しに伴い導入され、農業者の所得保障における支払い方式をそれまでの市場支持から直接支払い（品目ごとに決められた

入し、農業への所得補償を減らす代わりに、農法の転換支援に補助金を出すことを決定し、これには農業者の観光参入も補助の対象となった。デカップリング政策に付随して、EU は 1988 年に環境保全のための農地転換を促進するセットアサイド[5]を導入したが、これは自然環境が保たれた農村を維持することに繋がり、その後の観光客には魅力的なアクティビティの場の提供へ繋がることとなった。

1992 年に EU は、政策の方向性を転換し、農村において過疎や辺境であるなどの構造的問題を抱える地域を振興するため、農村住民が主体的に農村振興を行うための LEADER 事業[6]を導入し、財政支援を行った。これにより農家民宿を初めルーラルツーリズムの形態や担い手が多様になっていった。こうした背景を受けて、1990 年代以降、研究者におけるルーラルツーリズムへの関心が高まり、議論の精度が高まった。

この時期、ルーラルツーリズムの要件について、Lane（1994）が以下の 5 つの要件を提示している。

① ルーラルツーリズムは農村地域に立地する。

② 自然環境や伝統社会を尊重するといった観点に立つ農村的機能を持つ。

③ 経営においては、農村的規模（小規模）である。

④ 地域的にコントロールされ、地域の繁栄のために行われるような地域立脚性を持つ。

⑤ 地域の環境、経済、歴史、立地条件など総合した多様な性質を持つ。

Lane（1994）の要件に対して、ルーラルツーリズムの範囲は農村地域のみならず農村的環境（farmscape）を拡大解釈し、原生的地域（wilderness）を含むとする議論（Page & Getz，1997）や、都市観光以外をルーラルツーリズムと原生地ツ

支払い単価をもとに、作付面積等に応じて支払う方式）に変更した。2003 年に再度見直しがされ、過去の支払い実績に基づいて額を決めるという、品目によらない単一直接支払方式となった（農林水産省ホームページ，2019 年 1 月時点）。

[5] セットアサイド（Set-aside）は農業補償を受ける要件の一つで、生産過剰を抑えるため休耕を奨励し、農地を環境保全の名目で保全することが推奨された（農林中央金庫，2005）。

[6] LEADER 事業とは農村住民が主体となって実施する農村活性化事業に対して、EU が財政支援を行うものである。支援の対象者は、農家だけでなく非農家も含み、対象となる事業内容も、農家民宿、農業特産物の生産、中小企業振興、農村在住の女性や若者への就業促進事業など、多岐にわたる（西川，2005）。

ーリズムに分け、ルーラルツーリズムは農家が運営するものと、それ以外の 2 種に分けて考えるべきとする議論（Oppermann，1996）など、ルーラルツーリズムで扱う範囲についての議論が複数見られている。しかしながら、範囲を除くところでは、ルーラルツーリズムの要件は類似する内容が挙げられていると言える。

この時期、日本でもルーラルツーリズムに関する議論が高まっていたため付記しておく。日本ではルーラルツーリズムに該当する概念はグリーンツーリズムである。1994 年に「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」（通称「グリーンツーリズム法」）が整備され、そのなかでグリーンツーリズムを「主として農作業の体験とその他農業（林業または漁業）に対する理解を深めるための活動」と定義した。優れた自然環境を持つ農村に滞在することを起源とするヨーロッパのルーラルツーリズムに対して、都市住民や学生による農業の体験と交流を通した農村と農業の理解に重点が置かれており、ルーラルツーリズムとグリーンツーリズムの概念は異なるものであることが指摘できる。

ルーラルツーリズムに類似する概念としてアグリツーリズムがあるが，これは農業者や農業関係者などによって運営される観光活動であり，ルーラルツーリズムに内包される概念とされている（前田，1998；香川，2007；Lane，1994)。アグリツーリズムの中心となる観光活動は農産物直売所への訪問や農産物の直接購入、あるいは農業体験などで「農村の環境と産物に関連しながら生産活動と直接に結びつく」（菊地，2008）形態の観光と言える。さらに農業者が運営する宿泊施設に滞在し，農村の生活や文化の体験をする形態を，ファームツーリズムという。ファームツーリズムは「農家や農場と直接関わるツーリズム」を意味する（菊地，2008)。ヨーロッパでは，農山村地域の過疎化や離農，農産品価格問題などから，農業の多角化が模索されており，農家の副業としての農家民宿が中心となって発達した（香川，2007)。主にイギリス，アメリカ，カナダ，オーストラリア，ニュージーランドなどではファームステイという呼称が一般的であり，フランス，ドイツ，イタリアでも母国語で同義の呼称があるなど，概念としては欧米諸国に広がっている。つまりルーラルツーリズムは農村という領域で行われる観光活動のすべてを含む概念である上に，農業者や農業関係者により農業体験などを中心とし運営されるアグリツーリズムや，農業者が運営する宿泊施設中心に展開されるファームステイなども内包す

る広い概念であると言える。

こうしたルーラルツーリズムに関する多様な議論を踏まえて、本研究ではルーラルツーリズムの定義をより広義に捉え、「農村で行われる観光活動のすべてを含む概念」（五艘，2017）と定める。

2-1-2 統合型ルーラルツーリズム

本研究においては統合型ルーラルツーリズムの視点に立ち分析の枠組みを構築している。そこで冒頭に、統合型ルーラルツーリズム理論が登場した背景や、その研究の蓄積について述べておく。

ツーリズムにおける統合性の主張は 1992 年に「環境と開発に関する国際連合会議」で提唱された「持続可能な開発」の考え方の広まりを背景に、1997 年に「『ツーリズムと環境に関するアジア・太平洋閣僚会議』（1997 年）にておいて、持続可能な発展の観点からとりあげられた」（大橋，2010）。この統合性について Butler（1999）が所論を展開し、大橋（2010）がそれを総括しているので紹介しておく。

> ツーリズムについて現時点で最も重要な観点はグローバル化と持続的発展であり、両者の調和的統合的実現が必須の要請である。そのためには、それぞれの地域で調和的統合的発展が志向されなくてはならない。グローバル化については、これに対応できないようなことがあっても、それは不運とすまされることができるものであろうが、地域の事情や特色と合致していない（統合されていない）形でツーリズムの発展を図ることは、当該地域に破壊をもたらすものとなるかもしれない。地域住民のツーリズムの関与についていえば、住民の関心があるからといってツーリズム事業が必ず成功するという保証はないが、反対に住民の関与がない場合には必ずやツーリズム事業は不成功に終わるであろう。

Butler（1999）の指摘するツーリズムの統合性で重要な観点は、住民の関与なくしてツーリズムの成功はないという点であり、住民が置き去りにされる観光開発は一時的な経済的成功をもたらしても将来的には地域の破壊をもたらすことが強調さ

れた点である。Butler は住民がツーリズムに関与することで、外部事業者のみが享受する傾向にあった社会的・経済的効果を住民も享受でき、またその規模などもコントロールできる点を統合性とした。この統合性の持つ意味合いは、その後の研究蓄積を経て、より深い内容に発展していった。

1990 年代に EU の農業政策の影響を受けてルーラルツーリズムが発展し、また政策面においてもルーラルツーリズムが農村振興の契機として認識されるようになると、研究者においてルーラルツーリズムにおける統合性に関する議論がされるようになった（Joppe et al.，2013；Jenkins et al.，2016）。先進国におけるルーラルツーリズムの導入においては地域住民が中心となって内発的に進められるのが望ましいという考え方が主流となったが、一方で、内発性が強い場合には外部との連携が進みにくく、地域外への情報発信が円滑に進まないなどツーリズムが事業として成立しないという現実もあった。

こうしたなか 2000 年から 2004 年にかけて、EU の支援で SPRITE（Supporting Postgraduate Research with Internships in industry and Training Excellence、ヨーロッパの遅れている地域における農村地域における統合型ツーリズムの支援と促進）という研究プログラムが行われ、統合型ルーラルツーリズム（Integrated Rural Tourism）および統合性の要件などに関する概念定義や議論が深まることとなった。Saxena & Ilbery（2008）は SPRITE プログラムに当初関わった研究者だが、彼らによると統合型ルーラルツーリズムは「地域の経済的、社会的、文化的、自然的および人的資源と明確に結びついているツーリズム」と定義される。そして統合型ルーラルツーリズムは「社会的、文化的、経済的、環境的な資源の間に強力なネットワーク接続を生み出すので、他の形態の観光よりも持続可能な観光をもたらす」と主張し、統合型ツーリズムの目的を「観光と地域資源、活動、商品およびコミュニティとのつながりを改善することについての実用的な考え方を切り開くこと」とした。Saxena & Ilbery は統合について、「関係者間の多様なネットワーク的結合であり、そのネットワークはもともと特定の社会文化的文脈の間で形成され、内生的であり、地域資源や社会的資源に適した規模で行われ、地域資源の補完的な利用を取り入れ、そして個人とコミュニティの両方をエンパワーメントすべきである」と述べている。

また Saxena & Ilbery（2008）と同時期に Cawley & Gillmor（2008）もまた統合型

ルーラルツーリズムを定義している。Cawley & Gillmor（2008）は、統合型ルーラルツーリズムは「地域の利害関係者を中心とした、物理的、経済的、社会的、文化的資源に基づくボトムアップアプローチ」であり、それには「部門間の連携」と「利害関係者間の協働作業」が必要であると指摘する。そして統合型ルーラルツーリズムの特徴は以下のように説明できると述べた。

① 多次元の持続可能性を促進する精神

② 地域住民のエンパワーメント

③ 内在的所有と資源利用

④ 他の経済部門との補完性

⑤ 適切な規模での開発

⑥ 利害関係者間のネットワーキング

⑦ ローカルシステムへの埋め込み

Saxena & Ilbery（2008）と Cawley & Gillmor（2008）はいずれも、統合型ルーラルツーリズムにおけるネットワークの重要性を挙げているが、Cawley & Gillmor においてはネットワークに加えて協働機能が含まれると述べた点に差異があった。こうした統合型ルーラルツーリズムの定義を踏まえて大橋（2010）は、ネットワークのあり方への指摘を行っている。大橋によると、統合性の定義に含められたネットワークや協働機能というのは独立事業体の集まりであるため、ルーラルツーリズムでは統合にしても緩い性格のものが一般的とされているが、結び付きの緩さゆえにルーラルツーリズムがうまく機能しなかった事例も報告されており、その統合の度合における難しさがあるというものである。このようにして統合型ルーラルツーリズムについては、定義や性質における議論がなされ理念的な存在感が増して行った。

統合型ルーラルツーリズムが具体的な地域の活動を対象とした研究に現れるのは、2010 年以降である。日本では敷田・八反田（2013）によって「統合型農村観光」として、北海道のワインツーリズムの事例研究が報告されたが、統合のあり方に関する詳細な記述は少なく、統合型ルーラルツーリズムの事例研究としては不足するものであった。

Barcus（2013）は統合型ルーラルツーリズムに関するこれまでの議論を踏まえて、統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴を明確化し、それを用いてアメリカのベイ

フィールドのルーラルツーリズムを分析した。Barcus は、統合型ルーラルツーリズムについて、サステーナブルツーリズムに類する考え方としてその多くの要素を取り入れているが、「ネットワークとリンケージを強調する点で、サステーナブルツーリズムより運用における実用性が高い」と指摘し、アメリカのベイフィールドを事例として統合型ルーラルツーリズムの特徴を説明しており、その内容は次の通りである。

ベイフィールドはウィスコンシン州北部スペリオル湖湖岸に位置する人口約 15,000 人の郡であり、人口減少が著しく高齢化が進む。人口は 2000 年からの 10 年間で 20.2%減少し、高齢者（60 歳以上）の割合は全体の 36.6%を占める（Barcus, 2013）。最寄りの大都市圏のシカゴから陸路で 8 時間という立地から製造業が発展せず、かつては漁業と林業が主産業であったが、これらの産業が 1960 年代に衰退したため観光産業を振興した。きっかけは 1970 年にアパストル諸島の湖岸一帯が国立公園に指定されたことで、当初はキャンプやカヤックなどのアウトドア体験を求める観光客を集め、2009 年には国立公園で年間約 20 万人を集客した。観光振興においては当初地元から反対意見も多かったため、計画においてはコミュニティ参加を積極的に行ってきた。2001 年にベイフールド総合計画が制定され、この時に湖岸の景観と周辺の農村性の保護が含まれることとなり、ルーラルツーリズムが拡大した。Barcus は、ベイフィールド総合計画の原動力の背景には「コミュニティの完全な維持」があったと指摘している。

Barcus の明示した統合型ルーラルツーリズムにおける 7 つの特徴とは、ネットワーク（Network）、規模（Scale）、内生性（Endogeneity）、持続性（Sustainability）、埋め込み（Embeddedness）、補完性（Complementarity）、エンパワーメント（Empowerment）であり、内容は表 1-1 の通りである。

表 1-1 Barcus による統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴

ネットワーク（Networks）	地域のネットワーク、関係、パートナーシップが歴史的に階層化され、アクターに場所の感覚や地域内連携の機会を与える。
規模（Scale）	地域の構造に対して適切な規模で実施されるものである。経済的、社会的、文化的側面および地域資源の規模や範囲において、観光活動の量と影響は適切であるべきである。
内生性（Endogeneity）	地域の枠組みで開発を進めるものである。地域内の発展を促すものであり、地域のより広範な経済・政治環境に目を向けるとともに、地域の人材、能力、価値に焦点を当てる。
持続性（Sustainability）	統合型ルーラルツーリズムは持続可能な発展の概念に密接に関連し、持続可能な観光開発と重なる考え方である。正確な定義を厳密にすることなく、問題の焦点を議論するための有用な概念といえる。
埋め込み（Embeddedness）	ネットワークは地域に埋め込まれている。その活動は場所に関連するが、特に社会・文化的背景により関係が形成されている。埋め込まれたた社会・文化的背景とアイデンティティが、ネットワークや関係を形成する。
補完性（Complementarity）	観光は伝統的な農業と並行して行われるため補完的であり、また農業を置き換える場合には代替的である。補完性はパートナーシップと相乗効果を導くようになる。
エンパワーメント（Empowerment）	エンパワーメントは（地域の）資源や活動に対する地域の統制の現れである。観光に関わる地域活動者の価値観と誇りを考慮する。

（Barcus （2013）より著者作成）

Barcus は表 1-1 の統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴から、アメリカのベイフィールドのルーラルツーリズムの発展過程を次のように分析している。

ネットワーク（Network）は、Saxena & Ilbery（2008）や Cawley & Gillmor（2008）と同様、Barcus においても最も重視されている。Barcus は、ベイフィールドには複数のソーシャルネットワークの層が存在し、多様な方法で重複することを説明している。例として農産物に関連するネットワークは、飲食業や祭事という観光の中心的活動と結び付くのみでなく、生産者の利益や地域住民への食料供給にも結び付く。またネットワークは「ノード内の中心的なものと、遠方に根差したものがある」とし、多くは非公式な形態であるとも述べる。そしてコミュニティ間のネットワークのみでなく個人間のネットワーク、例えばルーラルツーリズムを介して生まれる若年層と高齢層の相乗効果などについても触れている。

規模（Scale）については、ベイフィールドのルーラルツーリズムが地元の小さな事業者により行われており、事業の 75%は移住者が所有することを説明している。事実として、ベイフィールドの農村部では新住民を常に募集している。そして（長年の住民と）事業者間の調整をベイフィールド地域生産者協同組合（Bayfield Regional Food Producers Cooperative）のようなネットワークが担うとしている。リンゴのような農産物の販売においても、郡内の小売店や教育機関など公的機関への最適な流通に機能するネットワークが存在し、郡外への流通や農産品の宣伝の取組みも担うとしている。

内生性（Endogeneity）については、ベイフィールドのルーラルツーリズムが地域の枠組みのなかで運営されていることが強調されている。スペリオル湖畔でのアウトドアもリンゴ農園での滞在も地域固有の資源を活用したものである。またウィスコンシン州の「持続可能な都市」に向けた「トラベル・グリーン・プログラム」（環境保全型の資源利用に関するプログラム）に選定されていることや、（しばしば土産品として買い求められる）伝統的工芸品が地域に残るのみではなく、芸術家の組合の活動の存在も、内生性と説明している。

持続性（Sustainability）はあくまで概念として、地域の活動、組織、賞の存在により説明できるとしている。地域の活動や組織というのは、これまでに観光を促進する様々な段階において、計画策定などにおいてコミュニティ参加を積極的に求

めてきた点を指している。また農産物のブランド化もフェスティバル開催などを通し地域住民が主体的に行っており、こうした継続的な取組みも持続性の一例と述べている。

埋め込み（Embeddedness）は、ツーリズムの主要要素となる文化などの地域資源が社会文化的文脈のなかに埋め込まれていることを説明する。ベイフィールドにおいては、音楽家を始めとする多彩な芸術家がパフォーマンスする際、「ベイフィールドの経験」と称して地域固有の感覚を強化するような取組みがなされていることを説明している。

補完性（Complementarity）は、ベイフィールドの観光が多様な側面で補完的であると説明している。レクリエーション活動はカヤックやセーリングなどアパストル諸島の洋上で開催される。多くの事業者はリンゴやベリー類のような地域の農産物に焦点を当て、収穫期の秋には「アップル・フェスタ」のようなイベントが開催され、冬の閑散期ドにはドッグレースや芸術関係のイベントが開催される。

エンパワーメント（Empowerment）は、「ローカル・アクターの価値と価値を考慮した包括的かつ参加型の意思決定」と Jenkins & Oliver（2001）の定義を引用し、ベイフィールドにおいては行政と商工会議所、住民、ボランティア活動において説明できるとしている。行政と商工会議所が行う情報開示とオープンな姿勢は地域社会の精神の醸成の背景となり、この背景のもと住民が主体的に活動を行っていること、なかでも広範なネットワークを持つボランティア達は重要な存在であることなどを説明している。

以上のように、Barcus は統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴を用いてベイフィールドを説明したが、最後に 7 つの特徴で含まれないもので重要な要素として、「リーダーシップ」と「ボランティア活動」を挙げている。ベイフィールドの場合は、複数のリーダーが地域に存在すること、そのリーダー達のもとで多くのボランティアが活動していることが、ベイフィールドのルーラルツーリズムの成功要因になっているためである。Barcus は総じて、7 つの特徴のうちネットワークの存在を重視しており、一方で持続性については概念的なものとして述べている。そして規模、内生性、埋め込み、補完性は統合型ルーラルツーリズムを具現化するた

めの重要な要素であり、最終的な活動の成果にエンパワーメントが位置付けられると考えられる。

Barcus（2013）の研究は統合型ルーラルツーリズムの特徴を明確化し、それをルーラルツーリズム発展の説明に試みた点で評価できる一方、統合型ルーラルツーリズムが成し遂げられた中心的な理由の説明が不明確になっているという欠点がある。この理由は対象とするネットワークの行為者が多岐に亘るにも関わらず、その行為者ごとに統合型ルーラルツーリズムの特徴を当てはめて説明していないためである。同様のことは Saxena & Ilbery（2008）が行った研究でも指摘できる。行為者ごとに統合型ルーラルツーリズムの特徴を当てはめて説明するという作業は膨大な時間と労力を割くことが想定され現実的ではないが、行為者を特定して周辺の行為者との関わりを見ながら統合型ルーラルツーリズムの特徴を説明して行けば、この問題は回避できると考えられる。そこで本研究は、行為者を南チロルの農村女性と特定することで、統合型ルーラルツーリズムの特徴をより明確に説明できるようにする。

本研究は統合型ルーラルツーリズムの概念を研究の基礎に置き、Saxena et al.（2007）、Colway & Gillmor（2007）から Barcus（2013）に至ってなされた統合型ルーラルツーリズムの特徴を活用して分析を試みることとする。本研究の対象は南チロルの農村女性を中心とするため、統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴を農村女性の分析にどのように活用するか、その特徴の再構築を行う必要がある。そのため、これまでの農村ジェンダー研究との関連を見ていく必要がある。また南チロルの社会・文化的背景に関する研究も一定量見られることから、これらの研究との兼ね合いも含めて枠組みを構築することとする。

2-2 農村とジェンダーの研究

2-2-1 農村ジェンダー研究

農村女性やジェンダーを扱う研究は、欧米研究者によって農村社会学分野において 1970 年代後半から開始された（秋津ほか，2007）。ヨーロッパ農村社会学会誌 *Sociologia Ruralis*（1961 年創刊）では 1978 年に農村女性の特集を初めて行ったが、ジェンダーという言葉が初めて現れるのは 1988 年であり、1990 年前後と 2000 年

前後に 2 回の農村ジェンダー研究のブームがあったとされる。秋津らは 1990 年前後のブームは、女性の性別、役割、分業に研究の焦点が当てられ、農村におけるジェンダー視点の導入期であり、2000 年前後のブームはジェンダー研究が深まり、男性性やセクシャリティ、ジェンダーのアイデンティティ、フェミニズム的研究方法論など、多様なアプローチがとられるようになったと言う。なお、日本の農村ジェンダー研究は 1990 年代以降見られるようになり（大友・堤, 2012；神谷ほか, 1990；神谷・中澤，2005；澤野・田畑，2009)、近年では農村女性のエンパワーメントに注目した研究が顕著である（靏，2003；原・大内，2012；原・西山，2015)。

こうしたなかで 2000 年前後には農村女性の特殊性を浮き彫りにする研究が現れた。家族で農業を行いながら女性が農外の仕事に従事するのは先進国農村で多く見られる現象であるが、Hughes（1997）はこうした農外就業する女性の多様性を強調し、Oldrup（1999）は農外就業する女性のアイデンティティの研究を行った。また都市女性と比較して農村女性を古い規範のなかに捕らわれた「犠牲者」である一方、農外就業や農村における新たなサービスの構築における農村の「救世主」とする二面性を論じる研究も広がった（Grace & Lennie，1998)。

方法論の議論として、Pini（2003）がフェミニスト研究の立場から女性を扱う場合の研究の 5 原則を挙げており、秋津ほか（2007）が次の通りにまとめている。

① 社会的に構築されるジェンダーに注目すること

② 女性の（日常的な）経験を評価し、顕在化させること

③ 研究における主体と客体、あるいは調査者と被調査者の分裂を回避すること

④ 女性のエンパワーメントを強調すること

⑤ 政治面での変化や解放への行動への機会を与えること

本研究では南チロルの農村女性を扱う上で、農村ジェンダー研究を意識することが重要である。そこで Pini（2003）の農村女性研究の 5 原則は意識的に扱いたい。そこで、先に述べた統合型ルーラルツーリズムの特徴と合わせて、研究の枠組みの構築に参考としたい。

2-2-2 イタリアの農村とジェンダー

宇田川（1989，2015）は、ローマ郊外のロッカを拠点とし、イタリアの家族観やジェンダーについての研究を Banfield（1958）の「無道徳家族主義」の再検証という形で行っている。Banfield は「イタリアの社会全体が『無道徳』なゆえに家族の利害だけを追求している」と指摘するが、これがイタリアの独特な家族観（宇田川，1997・1999）に起因することを述べている。宇田川は日本では家を同じくするという「枠組」の人間が家族とみなされるのに対して、イタリアでは教会のミサのある日曜日に昼食を共にするような「関係」の人間が家族と見なされ、これには時に血縁関係のないものまで含まれるという。これにはイタリア中部の農業が折半小作制度（メッツァドリア）のもとで発展し、小作人が農地との関わりを強くした（堺，1988；鈴木，2010；セレーニ，1958；竹内，1965；ファビアーニ，1985）ことが、家族の連帯を強くした一因とも考えられる。またこの中で、女性の生活にも触れ、イタリアの小さな町において広場は男性の空間、路地は女性の空間であり、女性は家事を終えた午後の時間の多くを路地でのおしゃべりや友人との団らんに費やすが、時に路地では調味料の貸し借りや子供の預かりなどの助け合いが行われていることを指摘した。イタリアでは男性の「名誉」が重視され、家族である女性は男性の「名誉」を高める原因にも傷つける原因にもなるため、男性は女性を守らねばならないという考えから、女性の生活圏が「家内的」になりがちで、その傾向が現代にも残っていると述べている。

大友ほか（大友，2016；大友・中道，2016）は、南チロルの女性農業者教育をキャリア形成の視点から分析している。南チロルにおける農業分野の専門学校 8 校のうち 6 校が農村家政専門課程を持ち、うち 2 校は農業・家政専門学校で、農村家政に力点があることを指摘する。1913 年には農業学校で農家の娘や主婦を対象にした家政講座が始まっており、イタリアで農村家政専門の農業学校があるのは南チロルのみであり、農村女性の教育に対する意識の高さを指摘している。また、農村女性に対する継続職業教育として、南チロル農民連合が管轄する専門学校と、南チロル農村女性協会が専門学校と連携し講座を開講していることも指摘した。

南チロル農村女性協会は 1981 年に設立され、農村女性が兼業で域外に出ることなく家庭内で職業を持てることを目指し、社会生活と職業生活における女性の地位

向上を目的とした活動を行なっている（仁平，2014）。同協会は 2017 年に南チロルの農村女性の実態調査を国内シンクタンクの Eurec Research と共同で実施している。同協会では適宜会員である農村女性への調査を実施しているが、近年は生活における満足度など意識についての聞き取り調査を実施している。2017 年の調査からは、農村女性が農村男性と結婚した理由に関して問い、豊かな自然環境および地域への愛着を回答に挙げたことを示すなど、これまでに表立って現れなかった農村女性の意識が徐々に明らかにされつつある。

2-2-3 ルーラルツーリズムとジェンダー

イタリアを対象とするルーラルツーリズム研究は豊富な蓄積があるが（Asciuto et al.，2012；Betta et al.，2012；Brida et al.，2011；Cielvo，2013；Contini et al.，2012；Dorobantu & Nistoreanu，2012；Garau，2015；Lagravinese，2013；Manca & Pozzolo，2017；Ohe，2000；Patterson et al.，2012；Scaglione et al.，2017；Scuttari & Mendola, 2013・2016；Wilbur et al., 2014）、ジェンダー研究は都市部に偏り（Iezzi, 2014）、ルーラルツーリズムにおけるジェンダーを焦点化した研究は少ない（Nilson, 2002；Goso，2018）。イタリアは EU の農業政策の影響を受けるため、類似環境の研究として、EU に加盟する先進国の研究が先行研究として重要である。Cánoves et al.（2004）は、スペインのルーラルツーリズムの農村への効果の研究において、その効果に農村女性への影響を挙げている。イタリア同様に EU 農政の影響を受けたスペインは、EU の LEADER 事業[7]を活用してルーラルツーリズムを導入した。Cánoves et al.は、結果としてルーラルツーリズムが根付いた農村では、女性の経済的地位を向上させたことをインタビュー調査から明らかにした。観光を導入した農家において、北部 6 州のうち半数の州で女性経営者割合が約 50%であり、農村女性のルーラルツーリズムにおける経営的立場の重要性が高まっていることを指摘した。スペイン各地でルーラルツーリズムが発展するのは 1990 年代前半であり、州が農家民宿の法制化を進めて開始されたが、この法制化は最も早くてカタロニア州の 1983 年とされている。イタリアにおいてアグリツーリズモの法制化がされる時期は似通っているが、Cánoves et al.の調査はスペインのルーラルツーリズムのまさに成

[7] LEADER 事業については、p19 の脚注 6 を参照されたい。

長期であり、長期的にルーラルツーリズムを実施した結果は反映できない時期だったと言えよう。

2-3 南チロル農村に関する研究

2-3-1 社会・文化的背景とアイデンティティ

Tommasini（2013a）は、南チロルのルーラルツーリズムが農業収入を補う経済手段以上に、農村の伝統的文化の継承や、さらには住民のアイデンティティを構築することに、強い影響を与えていることを指摘する。むしろ、伝統的文化やアイデンティティはルーラルツーリズムを通して維持されてきたとも説明する。南チロルは第二次世界大戦時、イタリアに統治されドイツ系からイタリア系への同化政策が強行され、これに不満を持つ場合はオーストリアかドイツへ移住する選択を迫られた。しかしながら、農民の多くは土地から離れては仕事ができないため、南チロルを離れることができずに留まった。したがって現在の南チロルの農村住民の多くは、歴史的にも長く住み続けるドイツ語系住民であり、一方市街地には同化政策以降に移住してきたイタリア系住民が中心となっている。大戦後に南チロルで独立機運が高まり、小さな孤立した農村でいわばマイノリティとして過ごした彼らの地域アイデンティティは、さらに強くなっていった。また Tommasini（2013a）は 1960 年代後半に、従来は観光産業に懐疑的な立場のカトリック教会が、農村に観光を導入することに前向きであったことを指摘する。また、ルーラルツーリズムの導入に際しては 2 人の農村女性が地域の会合で肯定的な意見をしたことが、広がりのきっかけであったことも述べている。

2-3-2 農村組織

Forbord et al.（2012）は、南チロルのルーラルツーリズムにおける推進組織の経営や構造のあり方、推進に伴う規制や品質管理などについて、オーストリアやノルウェイとの比較事例研究から明らかにしている。Forbord et al.（2012）によれば、南チロル農民連合は、農村住民に生活に必要なあらゆる内容について支援を行うが、最大の組織は農業部門であり、そのなかにルーラルツーリズムの推進組織が存在する。南チロル農民連合の運営は州法の下で厳格になされ、ルーラルツーリズム推進

組織は広報、宣伝、マーケティングを中心とすることが他地域との比較から明らかにされている。また、Pechlaner et al.（2012）は、南チロル農民連合の活動の結果、南チロルにおいて観光が極めて重要な産業となっており、農業の収入減少を補完するのに欠かせない存在であることを指摘する。Forbord et al.（2012）の研究からは、南チロルの農村観光の推進は農村組織である南チロル農民連合の存在が極めて大きかったことが理解できるが、連合の組合員の人員構成や活動詳細にまでは触れられておらず、あくまで組織の分析が中心となっている。南チロル農民連合は 1916 年に設立されて以降、南チロルの政治活動とも密接に関わっており、第二次世界大戦後の独立運動を主導した南チロル人民党とは深いつながりがあった。南チロルが自治権を獲得した後も関係が持続していることが指摘されている（山川・鈴木, 2010）。

2-3-3 生活互助組織としてのコーポラティブ

Borzaga et al.（2010）はイタリアの協同組合であるコーポラティブについての研究から、その発祥が第一次世界大戦で激戦地となった南チロルであった経緯から、南チロルではコーポラティブがいまだに農産物の流通組織として重要な位置を占めることを指摘している。また DeMeyer（2013）の調査報告書においても南チロルにおけるリンゴ農業にコーポラティブの存在が不可欠であることが示されている。実際、南チロルでは牛乳などの乳製品やリンゴなどの生産量の多い農産物は専門のコーポラティブが複数存在し、流通や加工販売までを手掛けている。さらにコーポラティブは農産物の流通、販売を超えて、育児や家庭の支援、金融の相談、ボランティア活動と幅広く展開されている。こうした協同組合を活用して地域住民の互助の精神が浸透しているのが南チロルの特性の一つでもあると言えるのである。

3 研究の枠組み

3-1 研究の枠組み

本研究では Barcus（2013）が明示した統合型ルーラルツーリズムの特徴を中心に、Saxena & Ilbery（2008）と Colway & Gillmor（2007）の統合型ルーラルツーリズムの定義、Pini（2003）の農村ジェンダー研究の原則、Cánoves（2004）のルーラルツーリズムにおける農村女性研究、さらに南チロルの一連の研究（Borzaga et al.,

2010；Forbord et al.，2012； Tommasini，2013a，2013b）を考慮して、本研究の枠組みを設定したい。Barcus（2013）の指摘する統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴とは、ネットワーク（Network)、規模（Scale)、内生性（Endogeneity)、持続性（Sustainability)、埋め込み（Embeddedness)、補完性（Complementarity)、エンパワーメント（Empowerment）であり、さらに補足的な特徴として、リーダーシップ、ボランティア活動を加えている。本研究では、これらの特徴を応用して、ルーラルツーリズムにおける農村女性の分析の視点を表 1-2 のように設定する。

表 1-2 ルーラルツーリズムにおける農村女性に対する分析の視点

特徴	本研究における視点
ネットワーク （Network）	・ネットワークの機能と性質 ・ネットワークの構築過程 ・ネットワークの拡張、連鎖、重複の状況 ・ネットワーク間の関係性
規模 （Scale）	・県内 ・集落内
内生性 （Endogeneity）	・地域資源の活用方法 ・人材としての潜在性 ・教育の状況
補完性 （Complementarity）	・農業と観光における経済力 ・農業と観光における労働力
エンパワーメント （Empowerment）	・個人の価値観および意識の変化、誇りの増加 ・集団、組織を取り巻く社会環境の変化
埋め込み （Embeddedness）	・埋め込みと社会・文化的背景の関わり ・埋め込みの過程
持続性 （Sustainability）	・上述の 6 つの特徴が継続される取組みの状況 ・取組みと農村女性の関わり

（著者作成）

具体的にこれらの視点を活用してどのように対象を設定し、分析を行っていくの

か、以下から詳しく述べていくこととする。

3-1-1 ネットワーク

統合型ルーラルツーリズムで最も重視されている特徴は、Barcus（2013）のみならず、Colway & Gillmor（2007）、Saxena & Ilbery（2008）の研究においてもネットワークである。そこで本研究においてもネットワークを中心的な特徴に据えることとする。ここでは本研究におけるネットワークの定義、ネットワークの分析の方向性、ネットワークの分析の中心的内容について述べる。

まず定義についてである。農村部に存在する社会的ネットワークを分析する手法は、社会学に端を発し経営学や地理学へ広がりを見せ（水野，2007）、社会ネットワーク分析として定着しているが、社会的ネットワークの定義については、分野間で類似していると考えられる。Saxena et al.（2007）、Cawley & Gillmor（2008）、Barcus（2013）の研究ではネットワークそのものの定義が書かれていないため、社会ネットワーク分析の分野から金光（2018）の定義を引用とすると、社会的ネットワークは「行為者として個人や集団が意図的・非意図的な相互行為から取り結ぶ社会的諸関係」であり、社会ネットワーク分析はこの「社会的諸関係」を「集団内の関連のみで説明するのではなく、人間同士が作り合う関係そのものから分析するもの」とされる。金光（2018）はネットワークの行為者に「個人」と「集団」があるとするが、Barcus（2013）もネットワークは「個人」と「コミュニティ」があるとし、類似するところであり、本研究においてもネットワークの行為者を個人と集団（あるいは組織）としたい。金光（2018）の定義は非常に明確であり、本研究におけるネットワークの定義として採用する。

次にネットワークを扱う場合の分析の方向性について述べておく。本研究では定性的な調査の比重が高くなっている。社会的ネットワークの分析はこれまで、定量的な分析手法が取られる傾向にあった（吉田，2015）が、「農村部では経済活動と社会生活は不可分であり、農業者や農家間のさまざまな役割の結び付きが重なり合うなかに存在する」ため、農村部のネットワーク分析においては定性的な分析が有効であることを指摘する。Saxena & Ilbery（2008）、Cawley & Gillmor（2008）、Barcus

（2013）の研究においても、調査はスノーボール・サンプリング手法[8]を使用した定性的な調査であり、こうした先行研究を踏襲して本研究においても定性的調査を中心とした。

さらにネットワークの分析の中心的内容についてであるが、本研究ではネットワークを分析する場合、構造的特質よりも、ネットワークの機能や拡張性、ネットワーク同士の重複の状況を分析の中心とする。その理由は本研究が基盤に置く先行研究の分析方法によるためである。Saxena & Ilbery（2008）はイギリスの国境地域を対象に農村部のネットワークの特徴を分析したが、そこではネットワークの機能と性質およびネットワークの存在が統合型ルーラルツーリズムで重要な、埋め込み、内在性、エンパワーメントをどのように示すかについて述べている。また Barcus（2013）は、ネットワークの地域における重複の状態や、ネットワーク構成員である個人または組織の内容、結び付きの動機などを分析の中心とした。彼らの研究においては、ネットワーク構成員間およびネットワーク間の結び付きの強弱や、ネットワーク内の垂直性、水平性といった構造的特質より、ネットワークの持つ機能や拡張性、ネットワーク同士の重複の状況がどのように起こっており、それが統合型ルーラルツーリズムに不可欠な要素をどれだけ説明できるかという分析に終始している。本研究は統合型ルーラルツーリズムの考え方を基盤に据えるという観点から、Saxena & Ilbery（2008）と Barcus（2013）などの研究による分析の方向性を踏襲する。

なお南チロルにおいてルーラルツーリズムにおける農村女性を分析する場合、分析対象として想定されるネットワークそのものは、農業的ネットワークと観光業的ネットワーク、その他のネットワークなどが当初段階では想定されるところである。

3-1-2 規模

南チロルの農村女性が関わるネットワークは多様で複数のネットワークが存在すると考えられるため、南チロル全域での分析は大変複雑になることが想定される。

---

[8] スノーボール・サンプリング手法は雪だるま式調査法と言い、インタビュー対象者から関係のありそうな次の対象者を紹介してもらう方式の定性調査である。サンプルをランダムに抽出せず、関係を辿って増やしていくという調査方法である。

そこで本研究では統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴の一つである、規模を意識して分析を進めることとする。Barcus（2013）は統合型ルーラルツーリズムの規模について、「経済的、社会的、文化的」に地域に適した規模で行われねばならないことを指摘している。南チロルは自治県としての歴史的成立過程において南チロルとしての自治意識が強く芽生え、また農村部においては特に地域へのアイデンティティが強い（Tomasini, 2013a）とされる。したがって南チロル全体のアイデンティティを共有する県としての規模と、より細かなメッシュとしての農村という規模で南チロル内のネットワークを見ていく必要があると考える。農村の範囲としては、農業における最小単位かつ 1 つのまとまった観光圏域として考えられる集落（コムーネ）とする。以上の点から本研究ではまず、県内と集落内という規模におけるネットワークの分析を行うこととする。

3-1-3 内生性、補完性、エンパワーメント

内生性の分析の視点は、地域資源の活用方法、人材の潜在性、教育の状況とした（表 1-2）。その理由として Barcus（2013）は、「地域の経済・政治環境に目を向けるとともに、地域の人材、能力、価値」に焦点を当てるとしているためである。本研究では内生性の分析において、農村女性はルーラルツーリズムを通してどのような地域資源をいかに活用しているのか、またルーラルツーリズムにおける人材としての潜在性はどうであるか、能力を構築するに必要な教育の状況はどのようになっているのか、という分析の視点を設けた。具体的な分析対象のイメージとしては、地域資源として農産物、農産物加工品、農場、家屋、家屋周辺、家庭内が想定され、人材の潜在性としては、農村女性の伝統的生活経験、農業経験、コミュニケーション力、教育の状況としては農業組織が提供する教育・職業訓練の機会とそれ以外の自発的に探してきた機会などが挙げられる（表 1-3）。

補完性の分析の視点は、観光と農業における経済力と労働力的とした（表 1-2）。Barcus（2013）が補完性において農業と観光における産業間の補完性を指摘しているためである。そこで本研究では、補完性の内容を農業と観光業における経済力と労働力とし、農村女性の経済力が県内と集落内においてどのように変化し、労働力が集落内と家庭内においてどのように変化したのかを分析する。具体的な分析対象

のイメージとしては経済力については観光収入と観光業に付随して発生した農業収入、農村女性の可処分所得の状況などであり、労働力については集落内の近隣住民の支援や労働状況などを見ることとする（表 1-3）。

エンパワーメントにおける分析の視点は、個人の価値観、意識の変化、誇りの増加と、集団、組織を取り巻く社会環境の変化とした（表 1-2）。Barcus（2013）はエンパワーメントについて、「（地域の）資源や活動に対する統制の現れ」であり、ルーラルツーリズムでは「地域活動者の価値観と誇りを考慮すべき」としている。そこで本研究では、ルーラルツーリズムを通して農村女性が、どのような価値観の変化が起きたのか、どのように誇りの増加が現れたのかを分析の中心とするが、ネットワークの行為者が個人と集団、組織であるため、集団におけるエンパワーメントの分析も対象としたい。なお Pini（2003）は、農村女性を分析対象とする場合は「女性のエンパワーメントを強調すること」と指摘しており、本研究においても留意したい。エンパワーメントの具体的な分析対象のイメージは、個人の場合はアグリツーリズモ運営農家と非アグリツーリズモ運営農家であり、集団、組織の場合は県内および集落内の農業組織等になると考えられる（表 1-3）。

3-1-4 埋め込み、持続性

Barcus（2013）の述べる統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴のうち、最後の 2 つとなる、埋め込み、持続性については、規模を県内と集落内に明確に分けて分析することが難しいと考えられる。Barcus（2013）は、埋め込みについて統合型ルーラルツーリズムにおけるネットワークは「特に社会・文化的背景により関係が形成され」、「地域に埋め込まれている」と述べる。こうした埋め込みはネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメントという 5 つの特徴による分析を通して総合的に述べられるべきであると考えられる。

Embeddedness は経済学、経営学、地理学等における国内研究では「埋め込み」と訳され使用されていることから、本研究でも「埋め込み」を使用する。「埋め込み」の概念は、経済学においてポランニー（1957）が「経済は社会に『埋め込まれている』」と指摘したことに始まった。これは当時の経済学において経済が社会構造を無視して経済的利害のみで成立するとした立場を否定するものであった。ポランニー

の指摘は再解釈され、「埋め込み」の概念は現代市場への適用が可能であるとGranovetter（1985）が主張すると、「埋め込み」の概念は経済学で頻繁に使用されるようになった。渡辺（2015）は、Granovetter の再解釈以後、行為者が置かれる社会構造の分析が盛んになり、特に現在の経済社会学の分野で一般的に使用されていると述べている。埋め込みの概念は、近年の経済地理学にも影響を与え、中澤（2013）は、経済地理学においてはポランニーの概念化した「埋め込み」は社会的規範や法的規範、Granovetter の再解釈した「埋め込み」は主体の紐帯、規範、慣習、といった制度論を基として分析を行うとしている。Barcus（2013）は「埋め込み」について、ネットワークが地域に埋め込まれることに注目し、個人間・組織間の関係とネットワークが、社会文化的文脈のなかで形成されていることを指摘する。Barcus の指摘を受け本研究では、ネットワークとその行為者である農村女性が、ネットワークの形成において地域における歴史、文化、農業などによる社会的影響をどのように受けてきたのか分析する。

持続性について Barcus（2013）は、「持続可能な観光開発」と重なる考え方であり「正確な定義を厳密にすることなく」、「問題の焦点を議論するための有用な概念」としている。Barcus（2013）は持続性に関し、ベイフィールドを事例とした分析において、統合型ルーラルツーリズムの持続性を除く 6 つの特徴の特徴が地域で持続的に保たれるような、地域としての取組みについて述べている。したがってこの持続性を分析の軸に据える場合は、ネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメントに埋め込みを加えた 6 つの特徴の分析を通して、総合的に行われるべきであると考えるのである。

これまでに述べたネットワーク、規模、内生性、エンパワーメント、補完性、埋め込み、持続性を視点に活用して分析する対象は、具体的には表 1-3 の通りであり、現段階で南チロルの農村女性の生活から想定できる分析対象を示している。

表 1-3　具体的な分析内容

規模	ネットワーク	内生性			補完性		エンパワーメント		埋め込み	持続性
		地域資源	人材の潜在性	教育・職業訓練の機会	経済力	労働力	個人	集団・組織	社会文化的 背景の関わり	継続の取り組み （概念的扱い）
●県内 ●集落内	● 農業的 ● 観光業的 ● その他	● 農産物 —自家生産 —近隣農家生産 ● 農産物加工品 —自家生産 —近隣農家生産 ● 農場 —耕地・果樹林 —酪農施設・放牧場 —農産物加工場 ● 家屋 —建物 —ダイニングルーム —部屋 —エントランス ● 家屋周辺 —庭 —菜園 —小型家畜施設 ● 家庭内 —料理・手芸・工芸 —伝統衣装	● 伝統的生活経験 —郷土料理の調理 —伝統衣装の裁縫 /着衣 —教会活動への参加 ● 農業経験 —農産物調理の経験 —農産物加工の経験 ● コミュニケーション力	● 農業関連組織が 提供する機会 —AT経営講習 —農産物加工品 生産講習 —農産物認証制度講習 ● 個人的に見つけた機会	● 農業的収入 —農産物直販 —農産物加工品 ● 観光業的収入 —アグリツーリズモ —体験アクティビティ ● 将来的消費者創出 ● 女性の可処分所得	● 県内後継者創出 ● 家族内労働力 —夫 —子ども世代 —その他の家族 ● 近隣住民の支援 ● 県内後継者創出	● AT運営農家 —女性 —夫 —子ども世代 —その他の家族 ● 非AT運営農家 —女性 —その他の家族	● 農業組織 ● 女性組織 ● 観光組織 ● AT経営者組織 ● その他	● 自治の歴史の影響 ● 農業組織の影響 ● 教会の影響	（当初段階は設定せず）

（著者作成）

3-2 研究の内容

本研究は、国内外の文献調査、南チロルにおける複数回の現地調査、南チロル農民連合に協力を得て行われたアンケート調査をもとに行われた。イタリア文献に関する調査は現地調査の前後にフィレンツェ、ミラノ、シエナ等の都市に滞在し、フィレンツェ国立図書館、ミラノ大学図書館、シエナ市立図書館で行った。また南チロル内ではボルツァーノ大学図書館で文献調査を実施した。

現地調査は事前調査と本調査の構成となっている。事前調査は 2016 年 3 月 9 日－23 日に実施し、調査の実行可能性が十分であるかを他地域との比較から検証した。比較対象地はイタリアでアグリツーリズモ経営農家が最も多くルーラルツーリズムが盛んとされるトスカーナ州オルチャ渓谷周辺地域としたが、交通利便性、治安、観光政策の明確性などを踏まえて、南チロルの方が調査における実行可能性が高いと考え調査対象地の決定に至った。事前調査では同時に、南チロルの農業およびルーラルツーリズムの背景および現状について、南チロル農民連合、南チロル観光協会、南チロル農村女性協会、サン・ジェネジオ住民へインタビューを実施する機会を得た。

本調査は第 1 回が 2017 年 3 月 9 日－19 日、第 2 回が 2017 年 9 月 5 日－19 日、第 3 回が 2018 年 2 月 1 日－28 日（アンケート実施期間に該当）、第 4 回が 2018 年 2 月 19 日－27 日、第 5 回が 2018 年 11 月 6 日－11 日とし、計 5 回実施した。第 1 回調査では、サン・ジェネジオのアグリツーリズモ経営農家を対象にインタビューと、農家の土地・建物に関する調査を実施した。第 2 回調査では、サン・ジェネジオの全てのアグリツーリズモ経営農家の女性を対象にインタビューを実施した。また、南チロルのシンクタンクである Eurec Research へのインタビュー調査を実施した。さらに、2018 年に実施するアンケート調査に関し、南チロル農民連合と調整した。第 3 回調査では、南チロル農民連合の協力を得て、南チロルの全アグリツーリズモ経営農家の女性を対象にインターネット・アンケート調査を実施した。現地調査に違いないが、アンケートの実施、集計においては南チロル農民連合と緊密に連絡を取り合い、著者は日本で作業した。第 4 回調査では、南チロル農民連合にインターネット・アンケート調査の中間報告を行い、意見交換を実施した。また南チロル農村女性協会会長へのインタビュー調査も実施した。さらに、サン・ジェネジオ

の 3 アグリツーリズモ経営農家の女性に長時間にわたるインタビューを実施した。第 5 回調査は、南チロル農民連合、南チロル農村女性協会とこれまでの一連の調査結果の報告をもって意見交換を行った。また南チロルの Eurec Research が主催する国際会議である、1st World Agritourism Congress in South Tyrol で発表する機会を得た際に、複数の農村組織代表者との意見交換や研究対象外地域の農家との意見交換を、著者の調査結果に関して行った。

3-3 本論の構成

第 1 章は序論として、研究の背景と目的、研究の方法と内容を明示したのち、先行研究の整理を行った上で本研究の意義を明示した。先行研究では研究の中心的概念に統合型ルーラルツーリズムを置くためその概念を整理した上で、それに近年の農業先進国における農村女性研究の課題を照らし合わせながら、本研究の分析の枠組みを提示する。また第 1 章では研究対象の選定理由を明らかにするとともに、「南チロル」、「ルーラルツーリズム」、「農村女性」といった用語について、本研究で使用する上での注意や定義を示す。

第 2 章は、南チロルの農村女性をめぐる歴史的・社会的背景の整理と、ルーラルツーリズムの発展過程の整理を中心とする。前半では、第二次世界大戦後に自治県として認められた後に農業の強化がなされるとともに、担い手としての女性の社会的地位向上が図られてきた経緯を述べる。後半では、農業における採算の低下を背景にルーラルツーリズムを補完産業として導入し発展させてきた経緯を、イタリア全土および南チロル周辺地域の状況を概観しつつ述べる。またこれらを受けて南チロルのルーラルツーリズムの発展過程を整理する。

第 3 章は、南チロルのアグリツーリズモ運営に関わる農村女性が、県内においてどのようなネットワークを構築し、あるいは組み込まれ、それにより農村女性の役割にどのような変化が起きていったのかについて、アンケート調査とインタビュー調査から明らかにする。アンケート調査とインタビュー調査は第 3 章と第 4 章において共通して使用されるものであり、第 3 章において両調査の概要を述べる。

第 4 章は、南チロルのアグリツーリズモ運営に関わる農村女性が、集落内においてどのようなネットワークを構築し、あるいは組み込まれ、それによりどのような

変化が起きていったのかについて、アンケート調査とインタビュー調査から明らかにする。

第 5 章は、南チロルのルーラルツーリズム発展において農村女性が果たした役割について、これまでの県内および集落内におけるネットワークの分析を行う。統合型ルーラルツーリズムの概念から導き出された特徴に照らし合わせ、ルーラルツーリズムにおける、ネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み、持続性といった項目について、農村女性がどのような役割を果たしてきたのかを中心に考察を行う。これをもとに第 6 章で結論を導くこととする。

4 概念の規定

4-1 南チロルおよび他の地名

ボルツァーノ自治県はその歴史的経緯から南チロル（アルト・アディジェ）地域と呼ばれ、自治の認められている同県ではこれまでこの南チロルを主たる地域名として使用してきたため、本研究でもボルツァーノ自治県を南チロルと称している。南チロルはオーストリア、スイスの両国と国境を接するが、その多くがオーストリアと接しており、古くからオーストリアの影響を受けてきた。国境の北にはオーストリアのチロル州が立地し、歴史的にも社会的・経済的な繋がりの強い地域となっている。

4-2 農村

農村について明確な定義は日本にはない。辞書によれば「住民の大部分が農業を生業としている村落」（大辞泉）であり、農林水産省によれば「農林業的な土地利用が大きな割合を占め、人口密度が低く、農林業を通じた豊かな二次的自然環境及び土地、水といった公共財的資源を有している地域」とある 。また英語圏において農村は、農業を主体とする地域を指す farming village のほか、都市との比較において地方を指す用語として使用され、また、地域社会を含めて farming community という呼び方をする場合もある。イタリアにおいては英語の rural village に近い rurale が一般的であるが、農業を主体とする地域として villaggio agricolo を使用する場合もある。このように、農村の定義はどの国も何を中心として見るかで異なってくる

が、日本の辞書にある「住民の大部分が農業を生業としている村落」はどの国もほぼ共通して使用する定義であり、本研究における農村の定義とする。

4-3 農村女性

本研究で扱う農村女性とは、農村において農業に従事する女性とする。専業農家のみならず、兼業農家の女性も含み、また農業に従事はしなくても従事する家族を支援できる非生産世代の女性、例えば学業中心に生活を送る若年女性や高齢者も、農業との関わりを多少なりとも持てる場合は対象とする。

第 2 章　南チロルのルーラルツーリズムと農村女性

本章では、南チロルの農村女性をめぐる歴史的・社会的背景を整理し、ルーラルツーリズムの発展過程を明らかにする。前半では、第二次世界大戦後に自治県として認められた後に農業の強化がなされるとともに、担い手としての女性の社会的地位向上が図られてきた経緯を整理し、後半では、農業における採算の低下を背景にルーラルツーリズムを補完産業として導入し発展させてきた経緯を整理する。これにより南チロルのルーラルツーリズムがどのような過程を経て現在のような発展に至り、その背景で農村女性はどのような環境に置かれていたのかを示す。

1 南チロルの概要

南チロルの概要は、第 1 章でも簡単に触れたが、地域の歴史や産業を述べる前提となるので、一部の内容を再掲する。南チロルのイタリアの正式な名称はボルツァーノ自治県である。2016 年現在、南チロルは県人口が 524,256 人、基礎自治体のコムーネ数が 118 の自治県である（Autonome Provinz Bozen Südtirol，2017）。イタリアの行政区域は、州（Resione）、県（Provincia）、コムーネ（Comune）という階層になっている。コムーネというのは日本では市区町村にあたるが、市区町村のように規模別の区分けはない。中世から存続するコムーネもあり、自治の中心となっている（中山，2014）。南チロルにある 118 のコムーネは図 2-1 の通りだが、人口が 10 万人を超えるボルツァーノのような大都市も、人口 200 人以下の自治体も存在し、これらはすべてコムーネと呼ばれている。本研究では便宜上、人口規模の大きい上位 3 つのコムーネであるボルツァーノ、メラーノ、ブレッサノネを「市」と呼び、その他の地域を「村」と呼ぶことがあるので注記しておく。イタリアには 20 の州があり、15 の普通州と 5 の自治州に分かれるが、ボルツァーノ自治県はトレンティーノ=アルト・アディジェ州に属している。

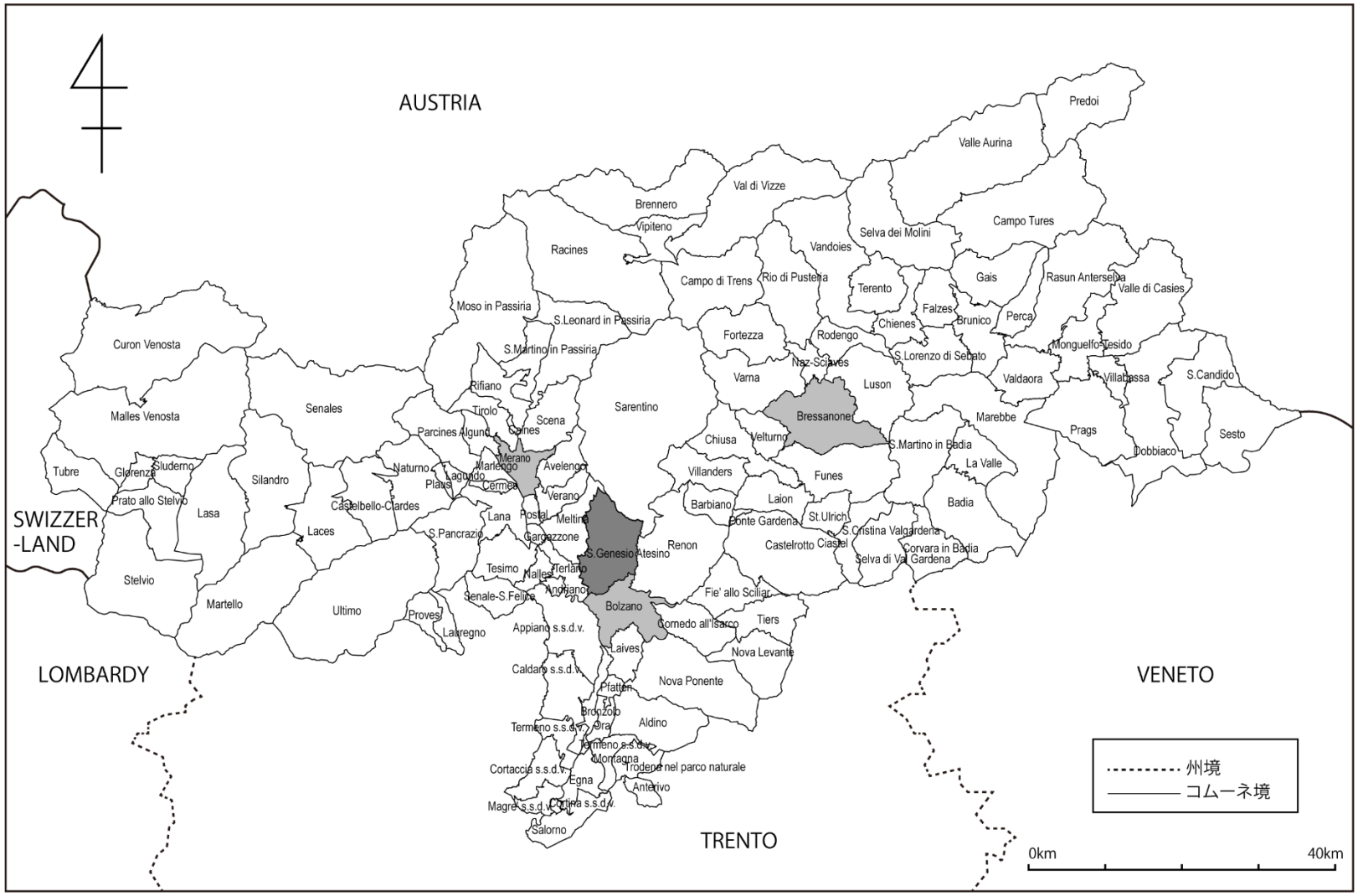

図 2-1　南チロル全域とコムーネの分布状況

（Autonome Provinz Bozen Südtirol（2018）より作成）　（注）3 大都市を淡色、インタビュー調査対象地を濃色で塗色

トレンティーノ=アルト・アディジェ州は 2 つの自治県のみから成立し、1 つがトレント自治県、1 つがこのボルツァーノ自治県である。トレンティーノ=アルト・アディジェ州は 2 つの自治県のみから成るため、州議会は県別に組織され運営されている。自治州や自治県には一定分野における独自の立法権があり、地域で徴収される国税のうち高い割合の配分を受け取ることができるため、ボルツァーノ自治県ではこの配分率は 9 割とされ、高い自治権が確立していると言える。

ボルツァーノ自治県は第一次世界大戦以前までオーストリア領のチロル州に属した歴史からドイツ語系住民が多く住む。2011 年現在、南チロルの使用言語はドイツ語 62.3%、イタリア語 23.4%、ラディン語 4.1%となっている（Autonome Provinz Bozen Südtirol, 2017）。ドイツ語系住民の多さから、標識と看板、地図はドイツ語とイタリア語の併記となっている。ボルツァーノという地名はイタリア領になってからの新しいもので、イタリア割譲後から現在に至るまで、県内住民の多くはこの地域を南チロル（ドイツ語でアルト・アディジェ[Alto Adige]）と呼ぶのが一般的である。こうした経緯から、本研究ではボルツァーノ自治県を南チロルと称している。

南チロルの人口は、1936 年以降から増加傾向にあるが、なかでも中心市であるボルツァーノ、メラーノ、ブレッサノネといった都市人口が増加したことが大きい。1936 年から 2017 年にかけての人口は、ボルツァーノの 2.4 倍に対し、3 都市を除くその他の地域の人口は 1.7 倍に留まっている（図 2-2）。1919 年にイタリア領となった南チロルは、ムッソリーニ政権下で強いイタリア同化政策が行われ、反発するドイツ語住民がオーストリアやドイツなどに移住する時期があったが、第二次世界大戦後にこの移住者達が南チロルに戻ったとされる（山川・鈴木, 2010）。またその後のボルツァーノのような都市の拡大、国境沿いでドイツ語が通じるという利便性から隣接国企業との経済活動も活発化し、南チロルの人口は拡大していった。現在はボルツァーノのような都市化した地域にはイタリア語住民が、そうではない農村部にはドイツ語住民と少数民族のラディン語住民が居住する傾向にある。

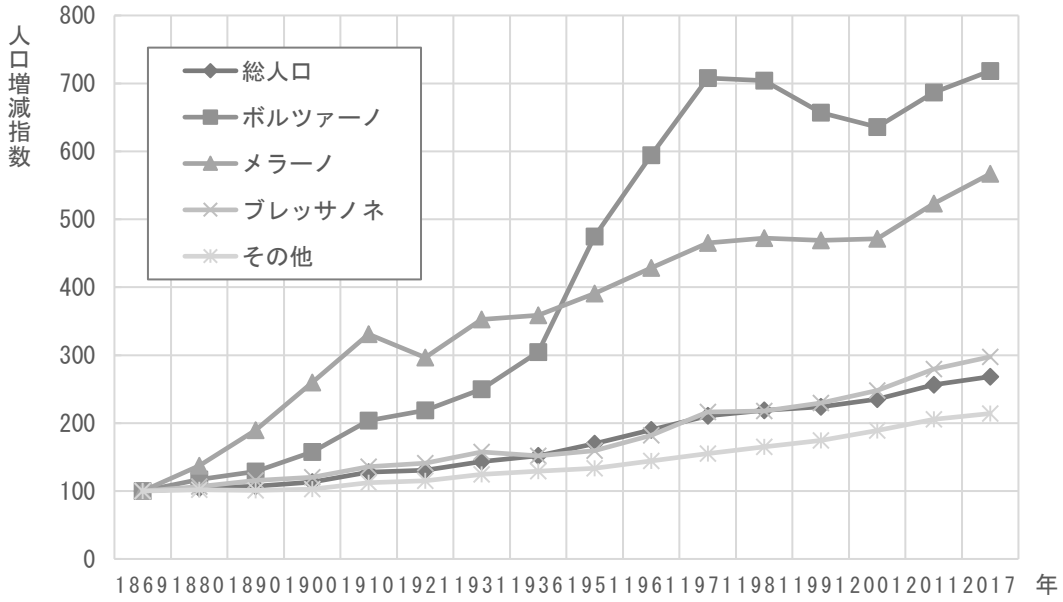

図 2-2　南チロルの人口の推移（1869-2017 年）

（Autonome Provinz Bozen Südtirol 2017、ASTAT 2018 より著者作成）

（注）人口増減指数は 1869 年を 100 とする

南チロルの言語構成は、ドイツ語が 62.3%、イタリア語が 23.4%であるほかに、ラディン語が 4.1%、その他言語が 10.1%となっている（2011 年時点、表 2-1)。ラディン語系住民は、古くから南チロルの一部の山間の地域に居住する少数民族であり、その他言語の住民は東欧、アフリカ、中東諸国などからの移民である。第二次世界大戦後、ドイツ語系住民の割合は 60-65%という一定の割合で存在しているが、イタリア語系住民は 1961 年の 34.3%をピークに 2011 年では 23.4%に減少し、代わりにその他言語の住民、つまり移民が増えている傾向にある。

表 2-1　南チロルにおける言語別人口構成の推移（1880-2011 年）

年	ドイツ語（%）	イタリア語（%）	ラディン語（%）	その他（%）
1880	90.6	3.4	4.3	1.7
1890	89.0	4.5	4.3	2.3
1900	88.8	4.0	4.0	3.2
1910	89.0	2.9	3.8	4.3
1921	75.9	10.6	3.9	9.6
1961	62.2	34.3	3.4	0.1
1971	62.9	33.0	3.7	0.1
1981	64.9	28.7	4.0	2.2
1991	65.3	26.5	4.2	4.0
2001	64.0	24.5	4.0	7.4
2011	62.3	23.4	4.1	10.3

（Autonome Provinz Bozen Südtirol（2017）より著者作成）

南チロルのコムーネの規模であるが、人口が 1,000 人以上 4,000 人未満のコムーネが 74 存在し、コムーネ総数の 63%を占めている（図 2-3）。人口が 6,000 人以上のコムーネは 13 しかなく、ほとんどが人口規模の小さいコムーネとなっている。人口規模の小さいコムーネのうち、ドイツ語系住民の多い地域では農業が盛んな傾向がある。ドイツ語系住民が多いということは、それだけ古くからこの地域に居住する住民が多いということを意味している。

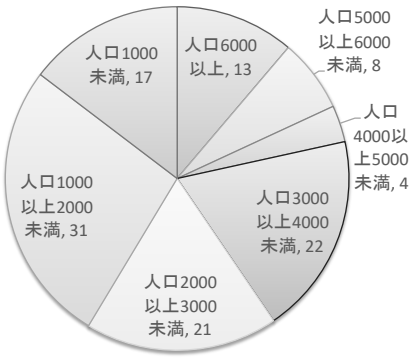

図 2-3　南チロルの人口規模別コムーネ数比率（2016 年）

（Autonome Provinz Bozen Südtirol（2017）より著者作成）

2 南チロルの歴史と農業

2-1 南チロルの歴史

南チロルはドイツ語系住民が多数派を占めるというイタリアでも特殊な地域であり、その複雑な歴史は表 2-2 に示した通りである。南チロルは 14 世紀から 19 世紀にかけてチロル地域のハプスブルク家によって支配され、ドイツ語系住民による生活と文化が継承されてきた（Evans & Rizzi, 1978）。1861 年にイタリアが統一されると南チロルへの干渉を強め「未回収のイタリア」として認識されるようになった。第一次世界大戦時に、当初中立の立場であったイタリアは、「未回収地」である南チロルのオーストリアからの割譲を条件に協商国側について参戦し、休戦協定後の 1919 年には南チロルはイタリアに割譲された。1922 年、ムッソリーニ政権になると、南チロルではイタリア同化政策が行われ、ドイツ語系住民に対しイタリア言語、教育、地名の使用が強要された。南チロルに工場を設立し南部から移住を促進するムッソリーニに対し、カトリック教会は「カタコンベ学校」[9]の運営によりドイツ語とドイツ語系文化の維持を図ろうとした。この時期には南チロル祖国戦線が結成され、ドイツ民族主義を強調するヒトラー政権に傾倒したが、ヒトラーは南チロルを正式にイタリア領と認めたため、南チロル住民の希望は打ち砕かれた。

第二次世界大戦のさなか、1939 年から 3 年以内に南チロルのドイツ語系住民をドイツ帝国へ移住させる協定が提携されると、住民はドイツ、オーストリア、イタリアのいずれかに居住する選択を迫られた。イタリア外に流出したのは選択権を持つ住民の 3 割程度で、流出者の多くは工場従事者や観光業、接客業などの従事者であり、農業従事者は 9%程度に留まったとされる（山川・鈴木, 2010）。この理由は、農業従事者は土地を離れると農業を継続することができないため、その地に留まるしかなかったことが挙げられる。しかしながら 1943 年にイタリアが連合国軍に降伏すると南チロルは一時的にドイツ支配下に置かれ、この時期にはかつて流出していた住民の多くが南チロルに戻ったとされる。

---

[9] カタコンベ学校はローマ帝国時代の弾圧下のキリスト教会にならい、教会地下に作られた学校のことを指す（山川・鈴木, 2010）。

表 2-2　南チロル歴史略年表

年	内容	社会的背景
1363	チロル地域のハプスブルク家による支配が始まる	ハプスブルク家からイタリア王国
1861	イタリア王国によるイタリア統一 南チロルはイタリアにおける「未回収のイタリア」と認識される	
1915	イタリアが南チロルの割譲を条件に第 1 次世界大戦参戦	第一次世界大戦
1919	サンジェルマン条約により南チロルがイタリア領となる	
1922	ムッソリーニ政権による支配、ドイツ語系住民への同化政策を実施	ムッソリーニ政権の統治
1930	南チロル祖国戦線結成、ドイツのナチスへの傾倒が進む	
1934	ドイツのヒトラー政権が南チロルをイタリア領と認める	
1939	南チロルのドイツ語系住民のドイツ帝国へ移住させる協定が締結 住民はドイツ、オーストリア、イタリアの居住の選択を迫られる	第二次世界大戦
1943	イタリアが連合国軍に降伏、一時的に南チロルはドイツ領となる 多くの移住者が南チロルへ戻ったとされる	ドイツ政府の統治
1945	ドイツが連合国軍に降伏、オーストリア臨時政府可でチロル州が復活 南チロルでオーストリア復帰を望む活動が活発化	オーストリア臨時政府の統治
1946	オーストリアのチロル州復活がパリ講和会議で連合国軍から拒否	
1947	ドイツ語系住民の保護と自治権に関する協定が、イタリアとオーストリア間で締結、協定文書の不履行に住民が反発し紛争化	イタリア政府の統治
1960	イタリア政府は南チロル問題を国連へ持ち込む	
1967	国連によるドイツ語系住民の保護へ向けた「一括提案」の承認	
1972	南チロルにおける自治法が施行される	自治州と自治県の制定
1992	「一括提案」のイタリアの実践を受け、国連が紛争の終結を宣言	
1993	EU 設立（イタリアは 1957 年時点で母体の EEC に加盟）	欧州統合の動き
1995	オーストリア EU 加盟により、チロル州、トレント自治県と南チロルの 3 地域で雇用、環境保護、教育なの協力計画が策定される	
2000	イタリア自治法改正、県の権限が強化される、言語小集団としてのドイツ語系住民、ラディン語系住民が承認される	

（山川・鈴木（2010）、 増谷・古田（2011）より著者作成）

1945 年にドイツが連合国軍に降伏し、南チロルがオーストリア臨時政権下になると、南チロルのドイツ語系住民はオーストリアへの復帰を望み、南チロル人民党を結成し運動を行った。だが南チロルのオーストリア復活はパリ講和会議で連合国軍から拒否され、1947 年には南チロルのドイツ語系住民の保護と自治権に関する協定がイタリアとオーストリアの間で締結された。だが実際、協定内容の半分ほどしか実行されなかったため、ドイツ語系住民は反発し、紛争事件が頻発していくこととなった。

1960 年、イタリア政府は紛争事件の絶えないこの南チロルでの問題を国連に持ち込み、国際的協議の上での解決に委ねられた。1967 年、国連はイタリア国内におけるドイツ語系住民の保護に向けた「一括提案」を提示し、南チロル人民党はこれを承認した。そして遂に 1972 年、南チロル自治法が施行され、約 20 年にわたり保護の枠組みを展開していくこととなった。この経緯について山川・鈴木（2010）は、「1971 年までは南チロルにおける自治獲得の時期とすれば、1972 年以降の 20 年は南チロルの自治確立の時代になった」と述べている。

1992 年に南チロル人民党が国連へ「一括提案」の実施を確認したため、オーストリア政府が国連において紛争の終結を宣言し、南チロル問題は解決されたと認識された。1993 年に EU が設立され欧州統合の動きが強まり、1995 年にオーストリアが加盟すると、オーストリアのチロル州、イタリアのトレント自治県と南チロルの 3 地域で国境を超えた地域間交流が開始された。山間部を多く含む地理的条件の類似したこれらの地域で、環境保護や教育などの分野で協力していく計画が策定された。これに伴い地域間の人や物の移動も活発になっていった。2000 年にはイタリアの自治法が改正されて県の権限が強化され、また国連におけるヨーロッパ内の少数言語集団に関する憲章を受け、南チロルのドイツ語系住民、ラディン語系住民が歴史的少数集団として承認された（大澤，2015）。南チロルでは 1992 年の時点で自治権が確立していたが、これらの動きを受けて自治が一層強化されることとなった。

2-2 南チロルの農業

南チロルにおける産業構造は、2011 年の雇用者数で見ると貿易業（40,673 人）、宿泊・飲食業（37,594 人）、製造業（30,645 人）が上位 3 産業となっている（Business Location Südtirol, 2015・2019）。県統計における観光業の区分は存在しないが、宿泊・飲食業と運輸業（20,865 人）は観光的側面が強いことから、これを広義の観光産業と捉えるならば、県で最大の産業は観光産業（48,823 人）となる。これは全雇用者数（239,129 人）における 20.4%に当り、5 人に 1 人が観光産業に従事していることになる。雇用者統計は産業別雇用者数を扱い、農林業においては雇用される農業従事者数のみしか反映されておらず、家族・親族経営の農業事業体数は反映されていない。農業事業体数は図 2-4 を参照されたい。2010 年時点の南チロルにおける農業事業体数は 20,247 軒となっている。図には示されていないが、同年の家族・親族経営における農業従事者数は 54,172 人であり、県人口の約 10 分の 1 が農業に従事していることになる。農業事業体数は 1990 年以降減少傾向にあり、前統計年度増減率は 1990-2000 年に－16%、2000-2010 年に－12%となり、減少傾向が止まない状況にある

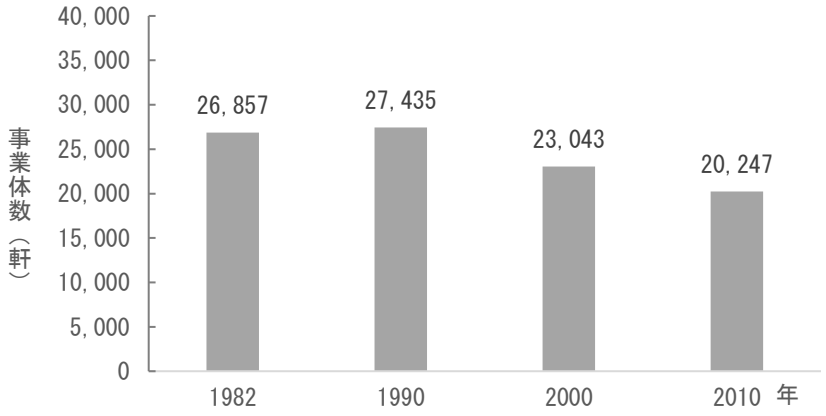

図 2-4　南チロルの農業事業体数の変化（1982-2010 年）

（Autonome Provinz Bozen Südtirol（2017）より引用）

2010 年の農業事業体数は 1990 年の 73.8%まで減少した。農業経営の厳しさを背景に、若者が農村を離れて都市へ流入することはイタリア全土で起きている状況であるが、南チロルでもその傾向は同様である。

農業従事者数を年齢別に見ると、40 歳代、50 歳代が中心層となっており、それに 60 歳代、30 歳代が続いている（図 2-5）。農業事業体数は減少しているものの、農業従事者は高齢化している状況にはない。すなわち、一定量の農業後継者が存在していることがわかる。なお南チロルの農地継承は基本的に経営者の息子とされ、日本と同様に一家の長男が相続する慣習にある。つまり農地を分割して複数の子息に相続することは認められず、こうした規制で農地の縮小を防いでいる。

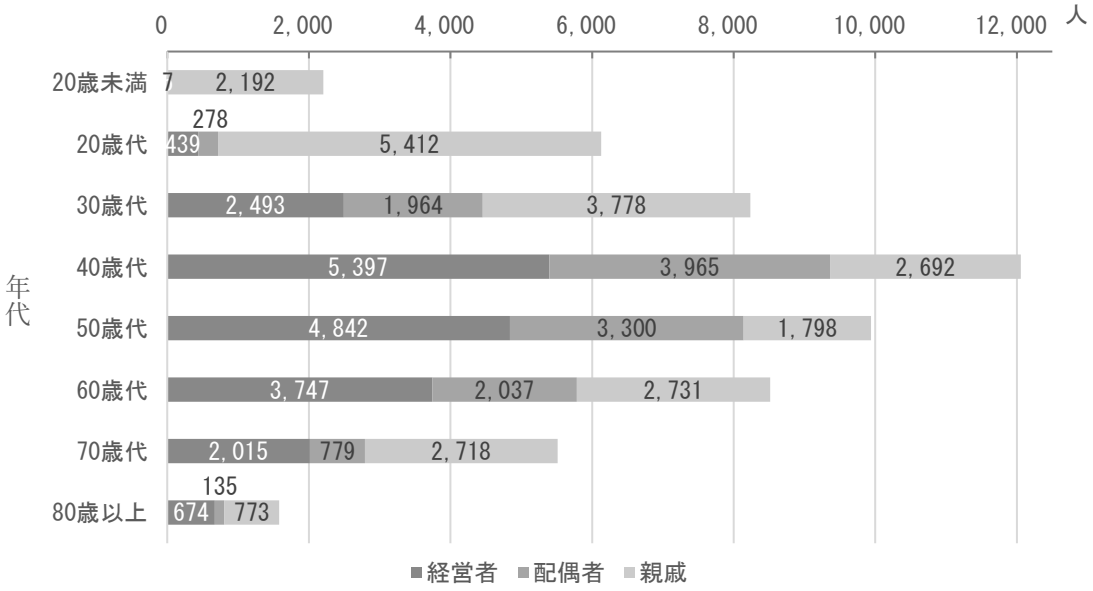

図 2-5　南チロルにおける年齢別農業従事者数（2010 年）

（Autonome Provinz Bozen Südtirol（2017）より引用）

南チロルの農業では、リンゴ、ブドウ、牛乳が主要農産物であり、そのほかに野菜類、根菜類、麦、ナッツ類などが生産されている（写真 2-1・写真 2-2）。面積を見ると、放牧地 30.4%、牧草地 13.4%と酪農業向けの面積が大きいことがわかる（図 2-6）。また恒久的樹木（ブドウ外果実 3.9%、ブドウ 1.1%）とは、リンゴ、ブドウなどの果樹栽培を中心とする面積を指している。

写真 2-1　南チロルのブドウ畑

（著者撮影　2018 年 11 月）

写真 2-2　南チロルのリンゴ畑

（筆者撮影　2018 年 11 月）

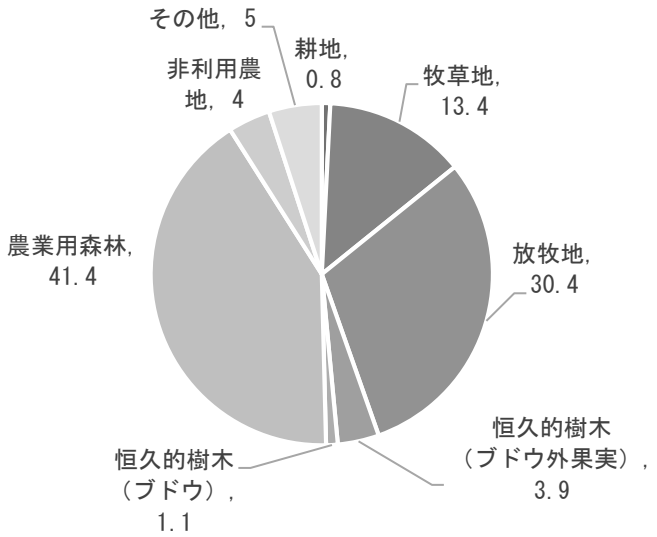

図 2-6　南チロルの用途別農地割合（%）（2010 年）

（Autonome Provinz Bozen Südtirol（2010）より著者作成）

南チロルにおけるリンゴの生産高はヨーロッパで突出しており、2013 年時点でイタリア全国の 50%、EU 市場の 15%、世界市場の 2%を占有するという高い生産を誇る（DeMeyer, 2013）。南チロルのリンゴ生産が本格的に広まったのは 100 年ほど前とされるが、生産量が著しく増加したのはここ 30 年のことである。1970 年代まではイギリスやフランスと同様に大型樹木による疎植栽培（株間を広げて栽培密度を下げて生産する栽培方法）が取られていたが、オランダで新しい苗木が生産され輸入を開始した後、栽培方法を改革してその生産性を高めた（小池，2017）。1980 年頃からは密植栽培を導入し、1990 年代以降は高度な剪定と側枝の誘引によるトールスピンドル手法が確立した。これは樹木の株間を限界まで狭くすることで面積当たりの生産性を極限まで向上させる生産方法で、世界で最も先進的なリンゴ生産方法として知られ、日本を始めとする各国のリンゴ生産者が視察に訪れている。なおイタリアのリンゴ生産は生食用ではなく加工用として生産する傾向が強い。

果樹栽培でリンゴ生産に次ぐ生産量となるのはブドウである。リンゴとブドウの生産量は表 2-3 に示している。ブドウの生産量割合はリンゴに比較すれば小さい。生産されるブドウはワイン用である。ブドウの生産量推移（図 2-7）は 1985

年以降減少傾向にあるが、これはブドウ用農地をリンゴ用に転換してきたためである。

表 2-3　南チロルの果樹、野菜等の生産量（2016 年）

種別	生産量（ｔ）
リンゴ	1,063,678
ブドウ	49,980
ジャガイモ	10,560
カリフラワー	2,800
ビーツ	1,515
ナシ	564
ラディッシュ	465
キャベツ	406
ライ麦	240
レタス	232
大麦	210
小麦	160
オーツ麦	45

（Autonome Provinz Bozen Südtirol（2017）より引用）

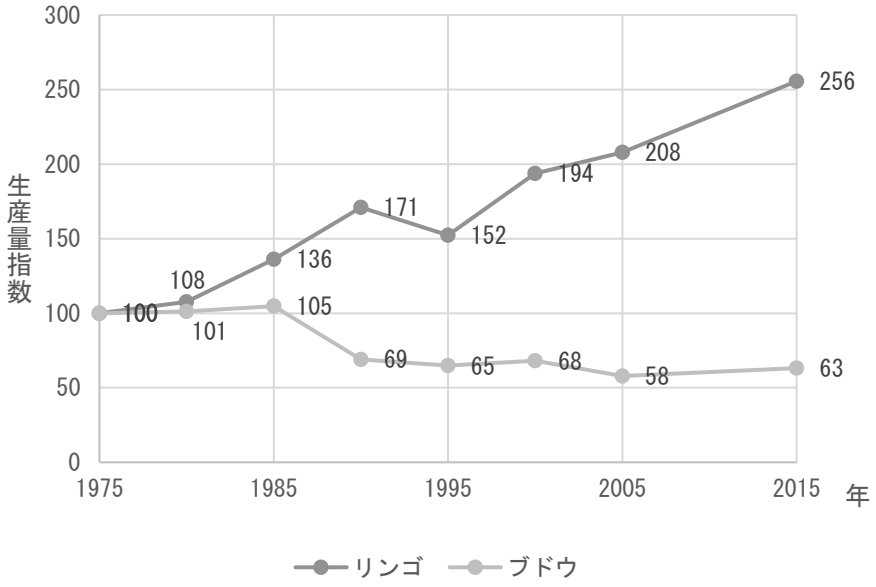

図 2-7　南チロルにおけるリンゴとブドウの生産量指数の推移（1975-2015 年）

（Autonome Provinz Bozen Südtirol（2017）より著者作成）

（注）生産量指数は 1975 年を 100 として計算したもの、2010 年は資料に数値なし。

近年は生産するブドウの品質もワインの加工技術も高まり、かつてより高品質なワインが生産されることとなったため、南チロル商工会議所（IDM）が宣伝広報を行い、ワインの生産流通を手掛けるコーポラティブも中心地ボルツァーノに新設されるなど、地域全体で生産に力を入れている。南チロルのワイナリーはワインツーリズムにおける重要な資源として期待もされており、観光の閑散期に当たる春と秋には南チロル観光協会などが中心になりワイン・フェスティバルを開催している。

生産量の多いリンゴやブドウは、農産物別流通組織であるコーポラティブという組織を介して市場に流通する。南チロルにはリンゴ、ブドウ、牛乳などの複数のコーポラティブが存在している。一方、生産量が少ない野菜類や果樹類は、生産者が個別に県内の各所で行われているマーケットに卸すことも多い。こうしたマーケットは住民の台所となるのみでなく、多くの観光客が来訪して購入する。マーケットは常設で朝から夕方まで開設している。野菜や果物のほか、ハム、チーズ、ジャムといった農産物加工品、パン、ケーキなども売られている。スペックと呼ばれる豚や猪でできたハム類は種類も豊富で観光土産として購入されることもある。

DeMeyer（2013）によれば、南チロルのリンゴ生産の革新の背景には「地域の自治の獲得と確立に向けた自助、自立の精神」があり、また南チロルの農民は「文化と伝統を重んじるとともに、常に革新的で挑戦的」と述べている。つまり南チロルにおける農業の生産性向上への取組みは、第二次世界大戦後の南チロルの自治の確立とともにあった。これまでイタリアおよび複数の周辺国に政治的に翻弄されてきた南チロルでは、もはや周辺国に依存するのではなく、地域が強い産業を持ち自立することが重要と考えられ（Autonome Provinz Bozen Südtirol, 2014 ；Vogel et al., 2007）、主産業である農業の強化が不可欠であった。そのためには多少のリスクがあっても、より革新的な農業生産手法に挑戦することが必要だったと言える。

3 南チロルにおけるルーラルツーリズムの導入と発展

3-1 南チロルのツーリズム

南チロルには、東アルプス山脈の一部を形成するドロミテ山塊が南東部中心に広がり、3,000m を超える 350 の山々が州全体に存在する。ドロミテ山塊は県境をなすトレント県やベルーノ県へ広がり広大なエリアを形成している。ドロミテ山塊の多くは急峻な岩山だが、間には透明度の高い複数の湖や渓谷、エーデルワイスやバラといった植物が広がり、古くから世界中から登山やハイキングを目的とした観光客が訪れていた（大澤，2003；Brida et al.，2012）。1960 年代にはオーストリアでスキーがレジャーとして定着した影響もあり、南チロルのオーストリアとの国境付近に複数のスキー場が開発されると、冬にはスキーを目的とした観光客も訪れるようになった。また 2009 年にドロミテ山塊の一部が、優れた自然美や独特の地形特性などを基準として、ユネスコにより世界自然遺産に登録された。南チロルにはドロミテ山塊のほかにも、中世からの温泉保養地であるメラーノ、2011 年に世界文化遺産に登録された北西部スイス国境地域のアルプス先史時代の家屋群、アイスマン博物館に加え、オーストリアとイタリアの融合した食事や街並みといった文化的観光資源も存在する。近年は夏の登山、ハイキングに加え、ロッククライミング、サイクリング、乗馬といったアクティビティ、冬のボルツァーノ市街で開催されるクリスマス・マーケット、春と秋のワイナリー巡りを目的とした観光客も増え、観光客数は増加傾向にある。こうしたなかでルーラルツーリズムも存在感を高めてきていると言える。

2017 年現在、南チロルを訪れる観光客はイタリア人 2,563,150 人、外国人 4,739,214 人の計 7,302,364 人となっている（図 2-8）。オーストリアと国境をなし、ドロミテ山塊で知られる南チロルは、イタリア人観光客より外国人観光客の方が多く、1988 年以降は増加率もイタリア人観光客を外国人観光客が超え、外国人観光客割合が増加傾向にある。外国人観光客の国別内訳は、ドイツが 67%と、スイスとリヒテンシュタイン 8%、オーストリア 7%と続く（図 2-9）。この理由は、南チロルの中心であるボルツァーノ駅までドイツのミュンヘンから鉄道で約 5 時間、オーストリアのインスブルックから鉄道で約 2 時間、スイスのサンモリッツから車で約 3 時間という利便性の良さに加え、ドイツ語圏の外国人観光客からはドイツ語が通じる

イタリア文化を感じられる場所として認識され、気軽に訪れることのできる海外旅行先となっていることが挙げられる。

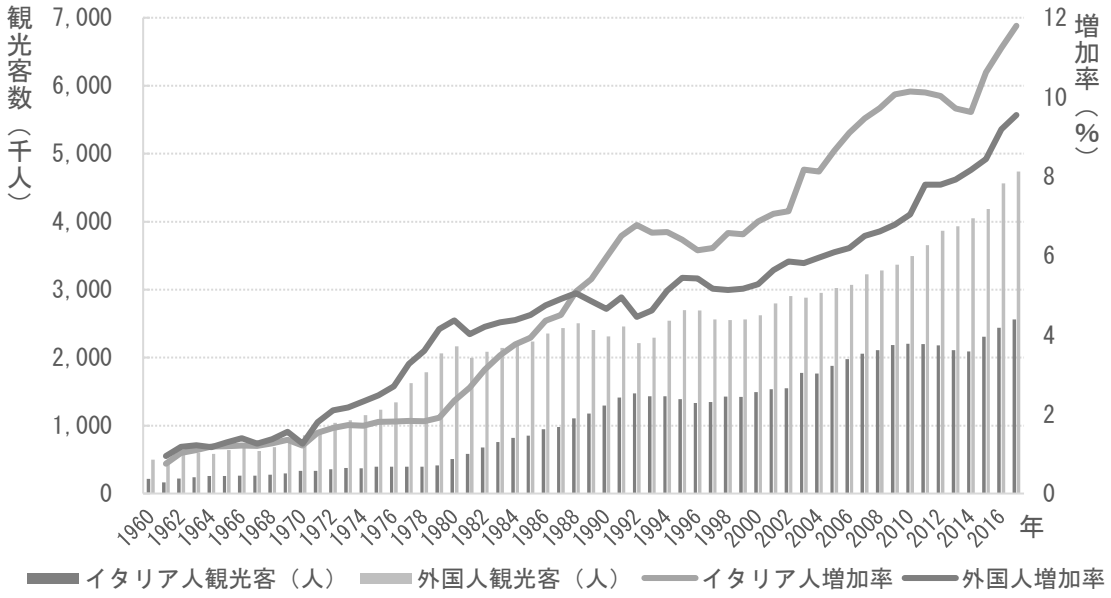

図 2-8　南チロルの国内外観光客数および増加率（1960-2016 年）

（ASAT（2018）より著者作成、増加率は対 1960 年のもの）

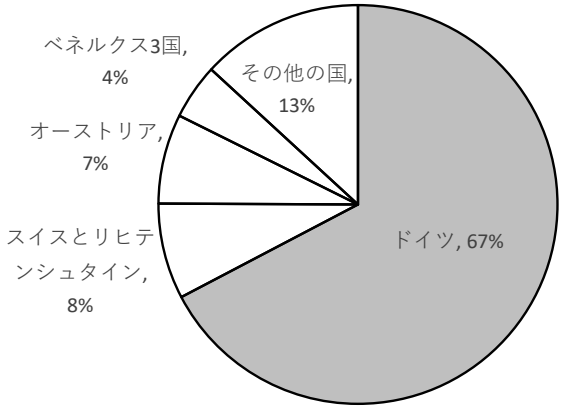

図 2-9　南チロルを訪れる外国人観光客の構成（2016 年）

（IDM（2016）より著者作成）

3-2 ルーラルツーリズムの萌芽

南チロルのルーラルツーリズムはオーストリアの影響を強く受けたとされる。富川（2005・2007）は、オーストリアには農家での宿泊（農家民宿）に長い歴史があり、1945 年以降にマスツーリズムの影響からペンションやガストーホフ[10]への改築が進められたが、1960 年代から新しい考え方として「農村で休暇を（Urlaub auf dem Bauernhof）」がマーケティング活動として使用され、農家民宿がインスブルックやチロルへ広がりを見せたと述べている。南チロルは、1918 年にイタリアに割譲される以前はオーストリアのチロル州の一部であった。南チロルの歴史や文化はチロル州にルーツを持つことも多く、ルーラルツーリズムがイタリア本土より、オーストリアの農家民宿の影響を受けていることが推察できる。

Tommasini（2013b）がまとめた南チロルのルーラルツーリズムの萌芽は次の通りである。1950 年代から 1960 年代にかけて、南チロルでは農業収入の低下から都市への人口流出が懸念された。これはイタリアの全体的な問題であったが、イタリア最北部の南チロルでも同様であった。しかしながら南チロルの農村住民はドイツ語を言語とする、地域の伝統と文化さらには南チロルのアイデンティティを継承する重要な住民であり、彼らが農村から流出することは問題であると政治的にも意識され始めた。そこで農業と観光産業を結び付けることで、農村住民の収入を経済的に補うのみでなく、農村コミュニティの崩壊を防ぐものとして、それまでオーストリアで発展しつつあった「農村で休暇を（Unlaub auf den Bauernhof）」[11]の導入を検討することとなった。この時農家民宿の導入の支援を行ったのは、カトリック教会と南チロル農民連合だった。カトリック教会は当初、農村における観光産業化に介入することに懸念を示したようだが、金銭という唯物論的な事項は排除して、地域住民のためになることを行うという方針に転換して、最終的には積極的に農家民宿の発展に向けた支援を行うこととなった。Tommasini（2013b）によれば、農家民宿を広める活動は、カトリック教会と小さな農村の 2 人の女性により行われたとされ

---

[10] オーストリアにおけるペンションは、家族経営を基本とする小規模ホテルを指す。またガストーホフも小規模ホテルであるが一般客が利用できるレストランが併設されていることが特徴である。

[11] オーストリアで使用された「Urlaub auf dem Bauernhof」は当初、農家民宿のキャッチコピーとして使用されたが、それが後に農家民宿そのものを指す用語として定着した。

る。1960 年代に南チロルの農村では、避暑地として親類や知人程度の宿泊客を泊めた経験があった。それは空いた部屋を提供する程度のものであったが、農家民宿として宿泊者用に快適な専用部屋をまずは一つ作って提供することで、現金収入を得ることができると、広報活動が行われた。活動は徐々に組織的になり、多くの南チロルの農村に広まることとなった。

1973 年、県法第 42 号によって、農場とインフラ整備を進める法律が定められた。カトリック教会と農村女性達の広報活動の目的は、農家民宿という形態を地域に広めると同時に、宿泊客が快適に過ごせるような最低限の道路、水道、電気といったインフラ整備を提案するものであった。また農村女性達はそれまで、不足する収入を得るために都市まで出稼ぎに行くこともあったが、農場に滞在して子供たちを世話する方が、長期的に子供たちを農場に留めさせることができると考え、自宅で収入を拡大させる農家民宿を支持した。1980 年には、約 1,000 人の農村住民が農家民宿に関わっていたとされる（Tommasini, 2013b）。

1985 年、イタリアで国法第 730 号、通称アグリツーリズモ法が制定された。アグリツーリズモ（Agriturismo）とは、農家が経営する宿泊施設、農村アクティビティ提供事業などの総称である。南チロルで展開されていた農家民宿（Urlaub auf dem Bauernhof）とほぼ同義と言って良い。イタリアは 1962 年に EU の前身組織である EEC に加盟しており、その後も EU 農政の影響を強く受けることとなった。CAP 政策と呼ばれる EU 共通農業政策においては、農産物の市場統合と自由化が行われた（平澤, 2005）。これに由来するデカップリング政策においては、農家への所得補償を減らす代わりに、農法の転換支援に補助金を出すことを決定した。この農法の転換支援の補助金は、観光業への参入もその範囲とされたため、イタリアは農家への観光産業参入支援を積極化することを決定した。当初、イタリアのアグリツーリズモ参入への動きはボトムアップに始まった。きっかけは 1965 年のトスカーナ州の元貴族により提唱されアグリツーリズモ協会の設立だった。また 1973 年には隣接するトレント県の条例にアグリツーリズモが明文化された。こうした各地での動きにも連動して、国法としてアグリツーリズモに関する法整備がなされたのであった。国法第 730 号における最も特徴的な内容は、アグリツーリズモはあくまで農業収入の不足を補うという位置づけであり、観光産業による収入が農業収入を上回らない

ことを基本的指針としている点である。しかしながら、実際には州法や県法により地域の事情に根差したアグリツーリズモ法を制定することが決められており、こうした基本的指針に関する解釈は地域により異なる実情がある。また、南チロルのような自治県では、国法としてのアグリツーリズモ法の基本指針を遵守する必要はなく、地域の判断に委ねられた。実際、南チロルでは国法第 730 号を受けて、県法との調和が図られた。1973 年に農家民宿の発展を促すためにできた県法第 42 号は、制定後約 10 年かけて改正が行われてきたが、1985 年の国法に定められた基本事項を統合している。具体的には、農家民宿はあくまで農業収入を補完する観光産業であるという位置づけを確認した上で、農家の伝統的な家屋の利用、農場で使用する農具などの展示、地域産品を使用した食事の提供、自家農産物加工品の販売などである。それと同時にこの時期から農家民宿の呼び名をドイツ語の Urlaub auf dem Bauernhof のみでなくイタリア語の Agriturismo と併記するようにもなったと考えられる。本研究では以下から、南チロルの農家民宿について、アグリツーリズモと称して論を展開していくこととする。

3-3 ルーラルツーリズムの発展

3-3-1 ルーラルツーリズム推進組織の設立

南チロルのルーラルツーリズムは、1998 年以降にさらに発展したと言える。図 2-10 から見て取れるように、アグリツーリズモ数とその宿泊者数が増加していることからもわかる。また、1 アグリツーリズモ当りの年間宿泊者数も増加傾向にあり、アグリツーリズモの数が増えたことで宿泊者数が増加したのみでなく、アグリツーリズモ当りの宿泊稼働率が上がってきていることが見て取れる（図 2-11）。

こうしたアグリツーリズモ数や宿泊者数の増加の背景には、南チロルのルーラルツーリズムの制度設計の拡充と、その推進組織の登場が一因と言える。

制度設計では、1996 年に県法第 32 号（Decreto del Presidente della Provincia del 27 agosto 1996, n. 32 e successive modifice）が制定され、アグリツーリズモのサイズの条件が決められ、南チロルで展開されるアグリツーリズモにおいては施設当り 6 部屋までと制限された。農業と観光産業との両立に適したサイズとして設ける部屋数の上限を 6 部屋とし、観光産業が無秩序に拡大しないように規定するのみでなく、規

模を明確にし、農家がアグリツーリズモに参入しやすい環境を整えた。

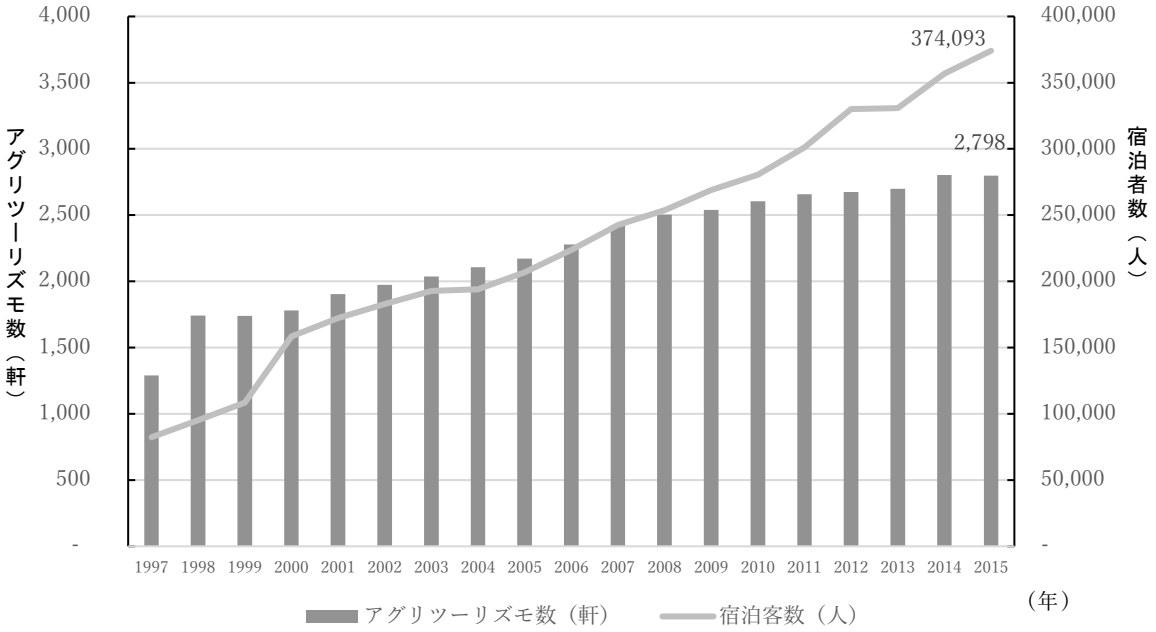

図 2-10　南チロルのアグリツーリズモ数と宿泊者数の推移（1997-2015 年）

（ASTAT（2018）より著者作成）

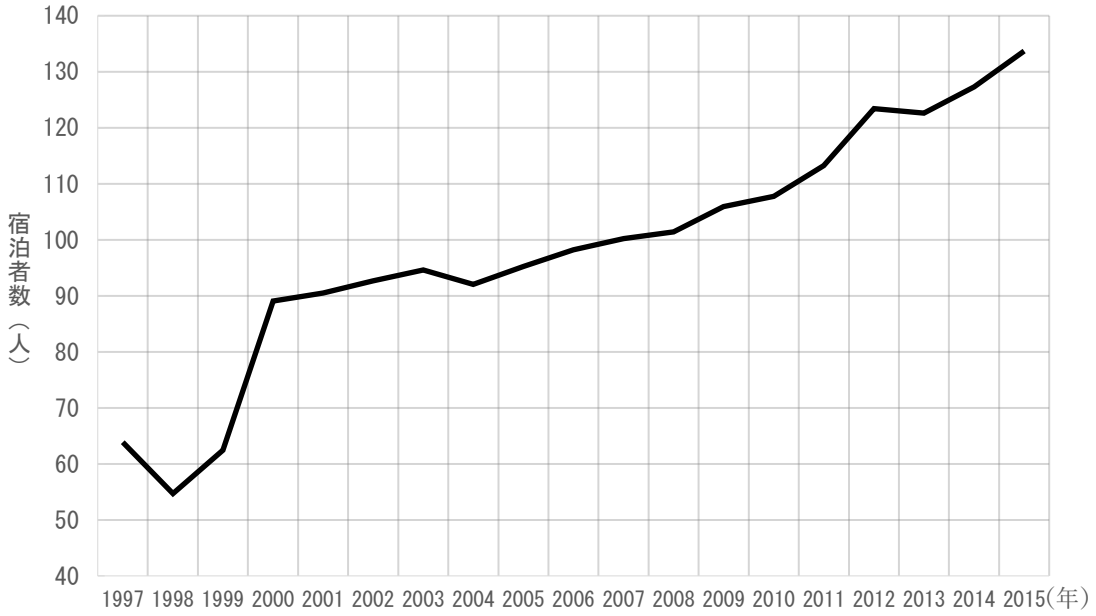

図 2-11　南チロルの 1 アグリツーリズモ当りの年間宿泊者数の推移（1997-2015）

（ASTAT（2018）より著者作成）

制度設計の拡充と連動して、1999 年に南チロル農民連合傘下に、ルーラルツーリズムを推進する専用組織であるルーター・ハン（Roter Hann）が設立された。ここではルーター・ハンの事業内容を研究員のノールセイセン氏へのインタビュー（2016 年 3 月実施）をもとに取りまとめておく。ルーター・ハンは中心地のボルツァーノに活動拠点を置く研究員約 6 名、アシスタント約 10 名（2016 年 3 月現在）の組織である。こうしたスタッフの多くはオーストリアの出身で、研究員は大学院で修士号や博士号を取得している。ルーター・ハンの活動内容は農業およびそれに関わる観光マーケティングとなっており、具体的にはアグリツーリズモのレーティング、生産物のプロモーション、農家向けのセミナー、伝統的クラフト産品の復興の 4 つを柱にしている（Roter Hahn，2016a・2016b・2016c）。

アグリツーリズモのレーティングは、観光客向けのアグリツーリズモ紹介冊子に掲載されている。宿泊施設の規模や内容、バリアフリー対応、乗馬などのスポーツ・アクティビティ、通信環境や農産物の種類など、約 20 点の項目について、観光客が宿泊施設選択の目安にできるよう公開し、最も良い評価をエーデルワイスの花 5 つとして掲載する。レーティングの目的は観光客の利便性もさることながら、実際にはアグリツーリズモの経営者がレーティングを見てより良いサービスの向上を目指すことを目的としている。ルーター・ハンは、全てのアグリツーリズモに約 100 問 16 枚の審査シートを渡し集計している。なかにはレーティングを良しとしないアグリツーリズモ経営者もいるため、レートのダウンは基本的にしていない。生産物のプロモーションは、1 農家 1 農産物加工品の生産を支援し、加工品を観光客向けの農産物加工品冊子で紹介している。すべての農家がアグリツーリズモに参入できるわけではなく、農業経営だけで精一杯という農家も存在する。こうした農家は農産物加工品を生産すればルーター・ハンが冊子を通してプロモーションするので、立寄り観光客に販売することが可能となり、時には生産体験などのアクティビティを提供することができる。このようにアグリツーリズモを経営しない農家も、観光産業の恩恵を受けることができるようにしている。農家向けセミナーは、アグリツーリズモ経営の方法、アグリツーリズモの改修ノウハウ、農産物加工品の開発方法など多岐に亘る。農家は観光産業における経験は無いため、ルーター・ハンの研究員または外部から講師を招いて、長期の研修を実施する。研究の期間は、1 日当りお

よそ 7 時間で短くて 3 日間位から、長いと 1 ヶ月というものもある。低料金であるが農家から一定額を収受している。こうして農家が円滑にアグリツーリズモに参入できる支援体制を整えているのである。そして近年力を入れているのが、伝統的な工芸品であるクラフトの復興である。山間部ゆえに伝統的に木材を使用したクラフトは盛んであったが、近年は衰退傾向にあった。これを観光客向けに土産品として販売するのみでなく、これまで以上の技術の向上を目指し、クラフト専用のプロモーション冊子を使用して紹介している。クラフトの復興は、農村コミュニティの維持も目的として展開されている。

ルーター・ハンは農家からの広告収入と県からの補助で成り立っており、こうした研究者の人件費も賄っている。広告収入というのは協賛金という言い方もされるが、アグリツーリズモ紹介冊子に掲載するのに 1 アグリツーリズモあたり年間 5 ユーロ、農産物紹介冊子に掲載するのに 1 農家当り年間 6 ユーロといった具合に収入を得ている。ノールセイセン氏によると、パンフレットによる広告収入やアグリツーリズモのレーティングはオーストリアのルーラルツーリズムでも活用されている形態で、南チロルのルーラルツーリズムはオーストリアの影響を強く受けているとのことであった。

3-3-2 アグリツーリズモにおける県法での規定

2018 年現在の南チロルにおけるアグリツーリズモの規定は、2008 年の県法第 7 号（Legge provinciale del 19 settembre 2008, n.7, Delibera della Giunta Provinciale n.4617 del 9.12.2008）が基本となっている。そのなかでアグリツーリズモを「農業起業家によるホスピタリティ活動」と定義し、その目的を「農業における多機能性の促進および所得格差の是正のための農業観光活動」と述べている。すなわち経営者は農業を行っている者しかできず、その目的はあくまで農業収入を補完するものである、ということを明確にしている。

施設や農場などについての規定としては、アグリツーリズモは宿泊施設を伴い、部屋は 6 室、ベッドは 10 台までを基本とし、ベッド数が 10 台を超える場合は書面で申告した場合のみ、超過台数が認められることになっている。また農業規模として、果樹園や耕地は 0.5ha 以上、牧草地、放牧地は 1ha 以上の面積を有し、放牧地

がある場合には必ず家畜を飼育することを規定している。食事、観光アクティビティなどについての規定としては、農村らしい文化的・教育的な体験、スポーツのアクティビティを宿泊者に提供すること、食事には地元農産物を提供すること、農村ではテイスティングなどの機会を設けることとされている。食事については細則があり、提供するものは 80%が地域産品、30%は自家生産品としている。農産物、農産物加工品の販売や加工場は県内で行うとしている（これにはアルコールを含む飲料全体も対象となるが、パンやベストリーは対象にならない)。1999 年の時点で、伝統的な南チロル製品のリストが定められており、食事にはこれらを積極的に使用することが求められている。

これらに加えて、南チロルのアグリツーリズモ関連法規には、教育・訓練について細かく規定されている。アグリツーリズムを始めるには運営者登録を南チロル商工会議所で行う必要があるが、そのためには農業および家政学の専門職業訓練学校などによる教育・訓練プログラムを 85 時間受講しなければならない。ただし、同じアグリツーリズモを運営する家族に有資格者がいる場合は 19 時間まで免除されるというものである。アグリツーリズモ開業後、この受講が 2 年間のうちに行われない場合、県は運営を停止することになる。2008 年の県法第 7 号以前には、施設と農場、食事、観光アクティビティなどについて規定があったが、2008 年により細かい点まで明文化された。なお、教育と訓練についての規定は、2008 年に新しく加わったものである。

県法第 7 号に先立ち「アグリツーリズモ活動のための要件」が定められ、そこには農業と観光産業に関わる労働日数における規定が設けられている。イタリアの国法第 730 号法では、観光収入が農業収入を上回ってはならないとしているが、南チロルではこれを自治県の裁量で解釈し直し、収入ではなく労働日数で置き換えている。つまり、観光における労働日数が農業労働日数を上回ってはならない、としている。

以上のような規定が遵守されるために、県は年間に全アグリツーリズモの 6%を調査していると述べている。

3-3-3 ルーラルツーリズムの発展段階

南チロルにおけるルーラルツーリズムの発展段階を整理しておくと、図 2-12 のようになる。まず 1960 年代には南チロル農民連合とカトリック教会によりオーストリア形式の農家民宿が紹介され、農村女性らの広報活動を介して南チロルでも農家民宿を始める者が出てきた。南チロルが自治県として認められた翌年の 1973 年、農村に観光業を導入するためのインフラ整備等について県法により定められ農家民宿が公的に認識されることとなった。

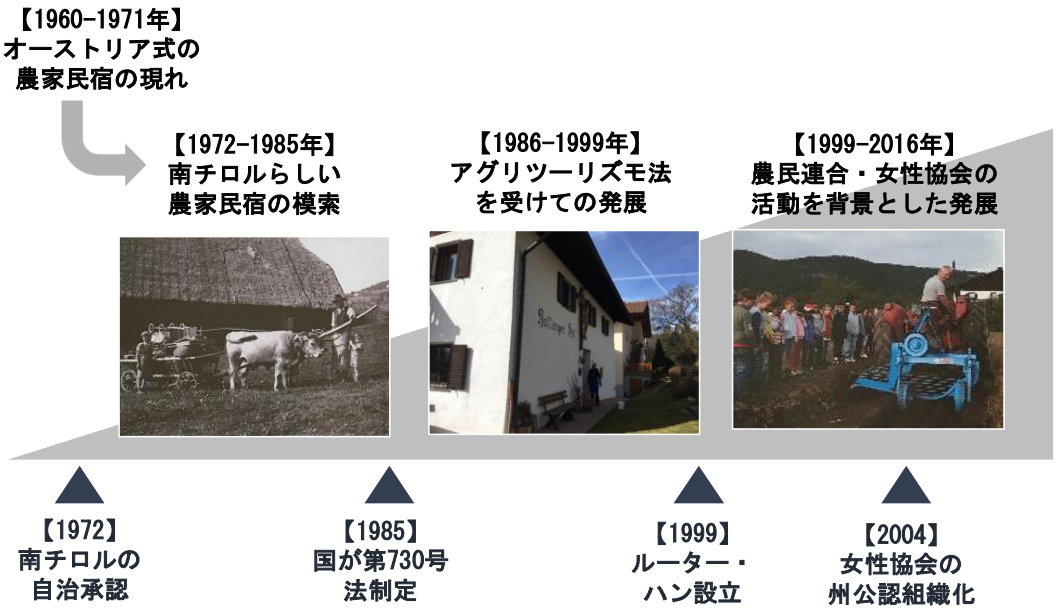

図 2-12　南チロルにおけるルーラルツーリズムの発展段階

（著者作成）

1985 年にイタリア全土を対象にアグリツーリズモに関する法律が制定されることとなり、南チロルでも独自に展開してきた農家民宿のスタイルと統合し、この頃からドイツ語表記のみでなくイタリア語記載でアグリツーリズモと称して展開を図るようになった。1996 年に県は南チロルで展開して良いアグリツーリズモの規模を 6 部屋とし、観光により農業が衰退しない環境を整えた。

1999 年に南チロル農民連合傘下にルーラルツーリズムを推進する専用組織が設立され、積極的にアグリツーリズモの開業や、観光客に販売する農産物加工品の製造、ルーラルツーリズムに参入する際の農村住民への教育と訓練などが促進され

た。これにより南チロルのアグリツーリズモ数は飛躍的に増加し、また土産品購入が農村内でできるようになり、南チロルのルーラルツーリズムが大きく発展した。

3-4 ルーラルツーリズムの現状

これまで見てきた通り、南チロルのルーラルツーリズムはアグリツーリズモを中心に著しい発展を見せている。制度設計や推進組織の設立が背景にあったことは述べたが、南チロル観光協会や南チロル・アルペン協会、またアグリツーリズモを経営しない農村住民の支援も大きい。

南チロル観光協会は、当初は県組織だったが、南チロル商工会議所（Innovation Development Marketing Südtirol, IDM）内に移管された。南チロル全域の観光におけるプロモーション、パンフレットの作成、イベントの主催などを行っている。南チロル観光の玄関口になるボルツァーノ駅周辺に大型観光案内所も設けているほか、各地域の小型観光案内所を取りまとめている。南チロルの観光で特徴的なのは、交通の利便性が優れている点である。イタリアではミラノやローマといった大都市でさえ、バスの遅延、地図の誤記、タクシー運転手による不当な料金請求が多発し、観光客の気持ちを暗くさせることが多い。一方南チロルでは、バスの遅延は少なく、地図や時刻表が細かく正確で、タクシー料金は区間表示やメーター使用がされて明朗である。さらに登山道やハイキングコースには狭い間隔で行先表示の看板があり（写真 2-3)、到着地までの時間が正確に記載され、どの看板も古くなって見えないということはなく比較的新しいものが建てられている。このように観光客が市街地のみならず山間部に至るまで移動がしやすい工夫がされており、そうした面ではイタリアらしさが全くないと言って良い。山間部のハイキングルートの多くは、現在の農村住民の生活道でもある。車は通ることはできないが、馬で通ることは可能であり、隣村まで行くのには本数の少ないバスを待つよりフットパスを歩く方が早いこともある。こうしたことから、近隣の農村住民が時折歩いてはフットパスの状況を常に確認している。またフットパスに置かれているベンチは南チロル観光協会が整備し、雪解けや雨の後の倒木の対応などは南チロル・アルペン協会が行っている。南チロル観光協会会長のアゴスティ氏へのインタビュー（2016 年 3 月実施）によれば、かつてフットパスはここまで整備されていなかったが、外国人

観光客の６割以上を占めるドイツ人観光客から、より分かりやすいフットパスの整備を求められ、少しずつ改良を重ねた結果、現状のようになったとのことである。

写真 2-3　フットパスを示す看板

（著者撮影　2017 年 3 月）

アゴスティ会長によれば、近年観光客が集まりやすいエリアは、依然としてドロミテ山塊の山歩きが楽しめる、ルディア、ガルディーナ、バルセナレス、ソルダ、ブルニコといった地域で、このエリアでは観光客の宿泊地になる傾向にあるとのことである。こうしたエリアは古くからの山岳観光地であり、大小のホテルが集積している。またかつてオーストリア方面から温泉保養目的の宿泊客を集めたメラーノは日帰り観光地化しているとのことであった。農村での滞在を目的とする観光客は増加傾向で、こうした現状から南チロルでは全体的にベッド数が不足しているため、アグリツーリズモにおける稼働率の増加が期待されている状況にある。

また南チロルの観光産業は季節変動が激しく、繁忙期は夏と冬で、特に夏場は非常に多くの観光客が訪れるものの、春と秋は閑散期となる。とくに３月中旬の

イースターホリデー、8月のバカンスシーズンの直後は客足が途絶える状況になるため、南チロル観光協会では4月や10月にはワイン・フェスティバルなどを開催して、閑散期の新たな需要を掘り起こす努力をしている。ワイン製造については、より高品質で付加価値の高い商品製造に南チロル商工会議所が尽力していることもあり、白ワインを中心として愛好家が増加している。イタリア全土でワインツーリズムが盛んな背景もあって、南チロルでもワイナリー巡りを目的とした観光客も徐々に増加してきているとのことである。

南チロルの宿泊施設はホテル、アグリツーリズモ、アパートメント、キャンプ場の4形態に分かれており、さらにホテルは規模、サービス内容別に5ランク（5つ星から1つ星で、規模とサービス内容が最も高いものが5つ星）に区分けされている。南チロルを訪れる観光客のうち、約7割はホテルに宿泊する傾向があるが、6%がアグリツーリズモに宿泊しており（図2-13)、この割合が年々高まってきているとのことであった。

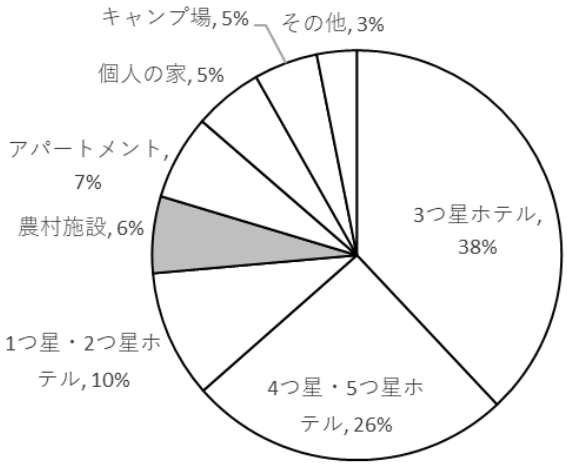

図2-13　南チロル来訪者宿泊先の構成（2017年）

（ASTAT（2018）より著者作成）

4 南チロルの農村女性

4-1 1970年代までの南チロルの農村女性

南チロルが自治県として認められる1972年以前における、南チロルの農村住民や農村女性の暮らしを記載した資料は多いとは言えない。南チロルは第二次世界大

戦後、オーストリアとイタリアの間でドイツ語系住民の保護と自治権に関する協定が締結されていたが、内容の半分程度しか実行されなかったとして住民が反発し、1950 年代には爆弾事件などが絶えない紛争地域となった。イタリア政府は 1960 年にこれを国連に持込み解決を求めた。こうした背景から、近隣国の政府や研究者の多くはこの紛争の先行きに注目する一方、山間の農村に暮らす住民、ましてや農村女性の生活環境を顧みる者はいなかった。1972 年に南チロルが自治県として認められた後、南チロルの農村の生活や文化を記述する資料（Gorfer & Faganello，2008）が徐々に出始めるが、記述内容は 1970 年以降のものが中心である。ここでは主に 1970 年代の南チロルの農村女性の生活を、こうした資料にイタリアの農村とジェンダーに関する研究（Counihan，1988；Willson，2009；宇田川，2015）の資料を加え、さらにインタビュー調査（2018 年 2 月）を合わせて取りまとめておくこととする。

1970 年代までの南チロルにおける農村社会では、男性が農業の責任を、女性は家事と育児の責任を負った。女性は農産業の手伝いも行ったが、家庭用菜園も含めた庭の管理を行い、自家用の小さな家畜の飼育も行った。農業組織や村組織での会合や農産物の取引においては男性が行い、女性は家内および周辺の仕事に専念したため、男性は外、女性は内という生活形式になっていた。これはイタリア、オーストリア双方の国の山間部の小さな農村ではおよそ同様であったと考えられる。南チロルでは、相続においては長男が全農地を継承する慣習があったため、農家の主人は土地を所有する男性であり、農家では男性である主人の主張が最も重要とされた。当時の様子を南チロル農村女性会長のエルスバマー氏は、自身の幼いころの母の様子について次のように語っている。

1960 年代、私の家には祖母もいました。だから母は農場から離れませんでした。彼女は家にいて家族の世話をし、家の外の仕事と言えば庭の管理でした。母の仕事の中心は家族の世話であり、それに責任を負っていました。1960 年代の農村女性の生活空間は家と庭で、家事と育児が仕事の中心でした。家には近隣の仲間や農業の手伝いをしてくれる人たちも集まってきたので、家を清潔に保ち、常に彼らを迎えられるよう家にいることが必要でした。母は

それ以外にも、家畜の世話や農業の手伝いもしました。特に小牛の世話は母に委ねられました。ブドウやその他の果樹栽培においては母が手伝いましたが、子供の私も農場に出て母の仕事を助けました。

また、農村女性には自分の自由になる金銭はなかったとも述べている。1960 年代はオーストリア式の農家民宿が農村部に紹介された時期であり、農村女性が農家民宿の開業で自分の自由になる所得を増加させる可能性を認識したとしている。

農村女性は常に主人の後ろにいて、家の外で意見を主張することはありませんでした。農家の主人である男性は外向的でしたが、女性はバックヤードにいました。そして農村女性には自分の自由になるお金もありませんでした。…1960 年代には南チロルの観光が増加したため、農村へも影響が現れました。ゲストルームを整備することで、農村女性は自分の自由になる収入を得る可能性を知ったのです。

EC（欧州共同体、後の EU）にすでに参加していたイタリアでは、共同体間での農産物の価格競争が起こり、農業収入の低下と収入補填についての議論がされている時期であった。将来的に農業収入の減少が免れないという危機感が農村に浸透しつつあった時期であった。さらに南チロルでは面積の 85%は標高 1,000m を超える地域にあり、多くの農村が山間部かつ高台に立地した。起伏のある山間部では農作業も農業資材の移動も灌漑設備の整備も重労働であった。南チロルの農業にトラクターなどの機械が入ったのは 1950 年代半ば以降であったが、傾斜地の多い山間部では使用される機械も限度があり、農業は手作業の割合が高い状態が続いた。このように農業が重労働な状態にあるため、農業は男性中心になったと推察される。

かつてムッソリーニ率いるファシスト政権下では、イタリア中部を中心として、農村女性の内職が推奨されていた。内職というのは、レース編みのクロスや女性と子供の衣類、刺繍のついたバッグといった裁縫作業などで、作ったものは町の市場で売るというものであった（Counihan, 2004）。当時は教育と就職は男性が優遇され、女性は早婚して大家族を作ることが良しとされており、そのために家庭内就労

を奨励したのであった。こうした家庭内就労は1980年代までイタリアに残ったが、南チロルにもこうした慣習がある程度伝播してきたと考えられる。南チロルでは裁縫作業を推奨された経緯は見られないが、農村の活力を持続させるためには、女性が家内に残ることが重要であると早い段階から認識されていた。農業収入が低下する1960年代後半から1970年代前半にかけては、農村女性は農閑期の日中に市街に出て農業とは異なる仕事をすることも多かった。母親である女性が外に出て働くと、子どもが農業への興味、理解、憧れを失い、将来的に農業を継承せず都市に流入してしまう恐れがあることから、農村女性の市街での出稼ぎは良いことではないという認識が高まっていった。南チロルでは、農村にこそオーストリア時代からの古いドイツ語系住民が居住し、そのアイデンティティを大切に継承してきた経緯があるため、農村が衰退することに対しては、イタリアの他地域よりも高い警戒感があったと考えられる。早い段階で農村女性が家内就労を継続できる仕組みが模索されることとなった。

4-2 南チロル農村女性協会の設立と取組み

南チロルでは自治権を獲得した1972年以降、主産業である農業を強化し、同時に農村女性の地位向上が進められ、かねてから社会の活動に積極的な女性が多く存在したと考えられる。1981年には農村女性の社会および職業生活の地位向上を目的に南チロル農村女性連盟が設立された。この組織の設立には兼業により地域外へ女性が一定期間出て行ってしまうのではなく、副業を推進することで女性が農村で継続的に暮らせるようにと言う考え方が背景にあった。組織の目的は設立当初と大きく変わりはないが、現在はより「農村女性の定着」に焦点を当てるようになってきている（五艘，2018）。南チロル農村女性連盟は、当初任意の女性団体であったものを、1981年には南チロル農民連合が支援して設立させたため、現在では同連合のグループ組織となっている。なお設立からの経緯は図2-14に示している。

南チロル農村女性連盟の活動経緯として、1985年には「農村女性の日」が創設され未亡人を讃えることに始まり、1998年には州議会議員として農村女性を1名、2009年には2名当選させることに成功し、農村女性の社会的発言力を拡大させた。2004年に正式な州の非営利組織として登録されると、活動がさらに活発化した。そ

の内容としては、2007 年に「農村での子育て」と題して農村女性の利用可能な保育施設を設置し、2008 年に「農村女性賞」として農村で副業などにおいて最も活躍した女性への表彰の機会を設け、2013 年には「私達の手から」と題して農村女性のアグリツーリズモや農村をフィールドにしたアクティビティを一覧化してプロモーションを開始した。さらに 2014 年にアグリツーリズモや農村を拠点にして小学生に農村生活の理解を進める「農場の学校」を開設、2016 年には農村男性との婚姻予備軍である若い女性向けに農村女性の生活の理解を進める「農村女性の学校」を開始した。

図 2-14 南チロル農村女性協会の活動展開（著者作成）

南チロル農村女性連盟の加盟者数は 15,960 名とイタリア最大であり、組織は 6 つの地域と傘下の 154 のグループで形成される（Südtiroler Bäuerinnenorganisation, 2014・2017b）。組織の決定は理事会で地域代表により行われるが、実際の活動の単位は 154 のグループである。各グループは定期的に農村女性のみで集まり、コーヒーを飲みながらおしゃべりをしたり、ドライフラワー造りをしたり、郷土料理を作ったり、クラフトやトールペインティングなどを教え合ったりする。時には娘を連れてくることもある。3 月になると定期総会が行われるため、そこに着ていく伝統衣装を補修したり、当年の農村女性賞の候補者を予測したりする。こうした集まりにより農村女性間のコミュニケーションが図られる。また洋裁や料理、ガーデニングなどの得意分野がわかってくると、それを支部長クラスで集約し、「私達の手から」のメニューとして加えることになる。

第 3 章　県内ネットワークにおける農村女性の役割の変化

本章では南チロルのアグリツーリズモ運営に関わる農村女性が、県内においてどのようなネットワークを構築し、あるいは組み込まれ、それによりどのような変化が起きたかについて、アンケート調査とインタビュー調査から明らかにする。アンケート調査とインタビュー調査は本章と第 4 章において共通して使用されるものであり、本章では概要を述べることとする。なおアンケート調査は南チロル全体を対象としたものであり、県内でアグリツーリズモ運営に関わる農村女性の全体的な傾向を把握するものである。一方、インタビュー調査は 1 つの集落を抽出して実施したものであり、全体的なアンケート調査では把握しきれない農村女性の教育、家族、生活に関する詳細な内容を把握するものである。

1　調査の概要

1-1 アグリツーリズモ経営に関わる農村女性へのアンケート調査

南チロル全域においてアグリツーリズモ運営に関わる農村女性が、どのようにアグリツーリズモ経営に関与し、アグリツーリズモへの関わりを通してどのように家庭や社会における役割や意識が変化したのかについて、全体的な傾向を把握することを目的としてアンケート調査を実施した。対象は南チロル全域のアグリツーリズモ経営に関わる農村女性とした。なお、調査期間は 2018 年 2 月 1 日～28 日（計 28 日間）とした。

調査の方法は、調査の依頼においては著者と南チロル農民連合との協働調査とし、依頼元を南チロル農民連合傘下のルーラルツーリズム推進組織であるルーター・ハンのディレクターと著者の連名とした。南チロル農民連合は南チロル全域の農業関係者を支援する団体で、設立 100 年を超える歴史的に古い組織で、カトリック教会や第 1 政党である南チロル人民党とも深いかかわりを持つ、南チロル農村住民に最も信頼されている団体である。その南チロル農民連合がルーラルツーリズム推進組織として傘下に設立したのがルーター・ハンである。その活動内容は第 2 章に詳し

いので参照されたい。

調査対象は、ルーター・ハンがアグリツーリズモの活動が継続的に行われていると判断する 2,800 軒のアグリツーリズモとした。この継続的に行われているアグリツーリズモとは、ライセンスを受けたアグリツーリズモのなかでも実質休業の状態に入っているアグリツーリズモを除いたものである。回答者には農村女性を希望したことから、調査票の冒頭に、アグリツーリズモ経営に関わる農村女性が回答するよう説明を付記し、農村女性の回答を得るようにした。

調査はルーター・ハンが管理するアグリツーリズモのメーリングリストを経由して調査票の URL を添付し、回答を求めた。調査票のフォーマットは Google 社の Google フォームとスプレッド・シートを使用して作成した。また、調査票は一定のルールで回答を入力しないとアンケートを終了できない設計とし、無効サンプルが出ないような配慮をした。そして、ルーター・ハンの意向により、回答者の負担を考慮して設問は大項目 10 問、小項目 24 問とした。調査項目は、ルーラルツーリズムにおける住民側の満足度や幸福度における先行研究（田中ほか，2013・2014；田林，2000・2014；Brereton et al.，2014；Pesonen et al.，2010；Rivera et al.，2016）で行われた調査を参考に、南チロルという地域特性に配慮して設定した。大項目は、南チロルでアグリツーリズモ運営に関わる農村女性の属性、アグリツーリズモ経営との関わり、収入の状況、アグリツーリズモ開業後の家事・育児の支援状況、アグリツーリズモ開業後の意識の変化を問う内容となっている。なお、調査票の言語はドイツ語とした。著者が作成した英文の質問内容を、ルーター・ハンのスタッフが内容に相違がないか随時確認をしながらドイツ語に翻訳し、それを著者が調査票へ変換する手法を取った。

調査における 1 次データの著作権は、著者が調査結果を報告書として提出することを条件に、ルーター・ハンと著者の双方にあるとの取り決めを調査開始前に行った。

以上の内容でアンケート調査を実施した結果、回収サンプル数は 333、有効サンプル数は 333 となった。なお、調査項目の詳細は次の表 3-1 の通りである。

表 3-1 アグリツーリズモ経営の調査項目

種別	大項目	小項目
基礎情報	1. 居住地	
	2. 年代	
	3. 農業	3-1. 生産する農産物
		3-2. 農業形態
経営	4. アグリツーリズモの実質的な経営者	
	5. アグリツーリズモの開業を主張した者	
	6. アグリツーリズモのサービス責任者	6-1. アクティビティ（ハイキング、乗馬など）
		6-2. ゲストの食事の用意
		6-3. 食事のサーブ
		6-4. レセプション
		6-5. 部屋や施設の清掃
		6-6. ゲストとのコミュニケーション
収入の状況	7. 農業と観光の収入割合	
社会関係	8. アグリツーリズモ開業後の交友関係の変化	
家事・育児の支援	9. アグリツーリズモ開業後の家事支援	9-1. 家の清掃
		9-2. 衣類の洗濯
		9-3. 日用品の買い物
		9-4. 家族の食事の用意
	9'. アグリツーリズモ開業後の育児支援	9'-5. 子どもの送迎
		9'-6. 子どもとの遊び
		9'-7. 子どもの学習支援
意識の変化	10. アグリツーリズモ開業後の意識の変化（5 段階評価）	10-1. 農村女性の経済的自立に繋がった
		10-2. 農家女性の経営スキルが向上した
		10-3. 農村女性の意見がより尊重されるようになった
		10-4. 地域における自己実現の機会が改善した
		10-5. 地域への誇りが増した
		10-6. 農村女性の自由時間が減った
		10-7. 農村の生活が前よりも幸せに感じる
		10-8. 地域における対人関係の紛争の可能性が高まった
		10-9. 農村女性に対する経済的圧力が高まっている

1-2 アグリツーリズモ経営農家へのインタビュー調査

サン・ジェネジオ地域を対象として、アグリツーリズモ経営に関わる農家へインタビュー調査を実施することで、アグリツーリズモ運営および農業の実態、アグリツーリズモ経営に関わる農村女性の出身地、家族構成、教育歴などの詳細、農村女性のアグリツーリズモ運営への関与状況などを明らかにすることを目的とする。

サン・ジェネジオ地域は南チロル中心部のボルツァーノ市北部に隣接する村だが、ボルツァーノ市を過ぎると山間部に入るため、住民の多くは 800-1,500m の高地で酪農と作物栽培を中心とした農業に携わっている。人口は 3,047 人（2015 年現在）と南チロルでは平均的な規模[12]の農村と言える。サン・ジェネジオは約 50 年前には市街地から訪れるアクセスはケーブルカーしか無く、孤立した集落だった。またドロミテやオーストリア国境沿いのスキーエリアといった観光地への交通利便性も立地上悪かったため、長らく観光客が訪れることのない村だった。それが 1950 年代後半に道路が開通しオーストリア方面からもボルツァーノ市からもアクセスが容易となり、ボルツァーノ市からはバスで 30 分という利便性になったため、国内外の観光客が訪れるようになった。こうしたことから、1980 年代以降に少しずつアグリツーリズモが開業し、現在では 18 のアグリツーリズモが営業を行っている。南チロルのアグリツーリズモは、観光化が進んでおらず、ホテルやレストランがあまり存在しない地域で、観光客を受け入れるために発達した経緯がある。こうした南チロルにおいてアグリツーリズモが発展した典型的なタイプの農村であるとして、インタビュー先にサン・ジェネジオ村を選定した。

調査対象は、南チロルのサン・ジェネジオおいてアグリツーリズモを経営する農家全 18 世帯とした。サン・ジェネジオにおいてライセンス認定を受けたアグリツーリズモはリスト上全 20 軒存在するが、うち 1 軒はインタビュー実施時期（2017 年 9 月）に改装中で休業しており、1 軒は経営者が他地域居住者で本業は他地域（南チロル南部、カルダーノ村）での小規模ホテル経営であり、経営者が常時不在という状況から、調査対象から除外している。なお、インタビューの回答はアグリツー

---

[12] 南チロルには 118 のコムーネ（基礎自治体で日本の市区町村に該当）があるが、人口 1,000 人以上 4,000 人以下のコムーネが 74%を占めている（Autonome Provinz Bozen Südtirol（2017）よりデータを引用して算出）。

リズモ経営に関わる女性と経営責任者（重複する場合もある）の同席を依頼して実施した。依頼の時点で、アグリツーリズモ経営に女性が関わっていないので返答できないと回答した農家は存在しなかった。なお、調査の期間は 2017 年 9 月 7 日～16 日（計 10 日間）とした。

調査の方法は、事前にアポイントを取っての対面式のインタビュー方式とした。設問数が多いことから、訪問時に回答の時間を十分に取ることができないという農家に向けては、E メールにて質問票を送付し、後日記入して返信してもらう形式を取った。インタビューの一部は、サン・ジェネジオのアグリツーリズモ経営者を経由してアポイントを入れたり、インタビュー時に同行してもらう等の協力を得たりして実施し、少しでも多くの回答を得るように努めた。またインタビュー実施に協力的だった農家（表 3-2 におけるアグリツーリズモ①、⑦、⑫）については再度の訪問を実施し追加的な調査を実施した。

調査の結果、13 世帯から回答を得た。母数を 18 世帯とすると回答率は 72%であり、比較的多くの農家からインタビュー回答を得ることができたと考えられる。

1-2-1 回答の概要

インタビュー対象としたアグリツーリズモ 18 世帯と、そのうち回答を得た 13 世帯のアグリツーリズモの概要は表 3-2 の通りである。グレーで塗られている部分は、回答を得られなかったアグリツーリズモとなっている。サン・ジェネジオのアグリツーリズモはサン・ジェネジオの観光パンフレット（2017 年度版）でリスト化されており、表はインタビュー結果にパンフレット内容を追記して作成した。

インタビュー調査から、サン・ジェネジオ村のアグリツーリズモの概要について整理する。まず、ルーラルツーリズム推進組織であるルーター・ハンにおけるアグリツーリズモのレーティング状況は星 4 つから星 1 つまで格付けは多様で、星 3 つ以上のアグリツーリズモは室料が 100 ユーロ以上の傾向にあった。サン・ジェネジオ村のアグリツーリズモは 1981 年から 2015 年にかけて開業され、2000 年以後の開業は星 3 つ以上のレーティングとなっている。1999 年にルーター・ハンが設立され開業の支援を受けたことが影響している可能性も考えられる。

表 3-2　サン・ジェネジオのアグリツーリズモの概要（2016 年）

AT※1	格付	開業年	室料（€）	朝食代（€）	部屋数	ベッド数	英語※2
①	4	2003	93-160	9	4	13	○
②	4	2010	85-100	10	5	12	△
③	4	1998	95-170	10	4	9	○
④	4	2015	90-105	13	2	6	○
⑤	3	2009	40-90	無	3	9	△
⑥	3	2007	50-100	無	4	16	○
⑦	3	2007	83-98	12	3	8	○
⑧	3	1983	55-75	10	2	8	○
⑨	3	2005	45-110	無	4	11	○
⑩	3	2010	55-85	無	2	4-6	△
⑪	3	不明	21-36※3	無	3	8	△
⑫	1	1987	70-100	6	2	10	○
⑬	1	1981	42-90	10	3	12	○
⑭	4	不明	76-96	12	2	8	△
⑮	3	不明	55-100	10	2	10	不明
⑯	3	不明	55-90	10	3	7	△
⑰	3	不明	50-90	無	4	10	△
⑱	2	不明	40-70	無	1?	3-4	△
⑲	2	不明	45-70	無	1	4	不明
⑳	2	2011	70-100	無	2	4	△

（Tourimusverein Jenesien（2016）より著者作成）

（注）　※1 AT はアグリツーリズモを示し，並び順は出典資料に掲載の順。

※2 ○は日常会話が通じる，△は食事や精算など必要最低限の単語が通じる

※3 1 人当たり料金表示

朝食提供サービスは、18 のアグリツーリズモのうち 11 件と約半数になっている。サン・ジェネジオ地域は酪農と耕作を混合させた農業を行う農家がほとんどであり、こうしたことから食事提供サービスを行う時間的余裕がないということも推測される。サン・ジェネジオ村中心部からは南チロルの中心都市のボルツァーノ市内までバスで約 30 分という利便性であり、宿泊客は市場で食材を購入して備え付けのキッチンで朝食を作ることもできる。アグリツーリズモの部屋数は県規定を遵守し 6 部屋内であり、ツイン・タイプからアパートメント・タイプまで存在する。

1-2-2 回答を得た農家の農業状況

インタビュー調査から、サン・ジェネジオ村のアグリツーリズモの農業の状況は表 3-3 の通りである。農業の状況においては、インタビュー回答を得た 13 のアグリツーリズモのうち 2 世帯は他地域（1 世帯は南チロルのメラーノ、1 世帯は県外のミラノ）からの移住（夫がミラノ、妻がオーストリアのウィーン）であるが、それ以外はすべて祖先から土地を引き継いで農家を営んでいる。うち祖先から土地を引き継ぎ 200 年以上居住したことが証明される「ELEHOF」の称号がある農家はインタビュー結果によればアグリツーリズモ⑪のみであった[13]。

表 3-3　サン・ジェネジオのアグリツーリズモ農家の農業状況（2017 年）

アグリツーリズモ	農業開始年	農家種別	農産物									農産物加工品						従業員数（人）
			牛乳	肉牛	リンゴ	ブドウ	野菜	果樹	ナッツ類	木材	その他	ジャム	ジュース	バター・ヨーグルト	ハム・ソーセージ	ワイン	その他	
①	1913	酪農	●	●														0
②	1687	混合	●	●			●					●		●				0
③	1672	作物									●※1	●	●					2
④	1760	作物				●			●							●		0
⑤	不明	混合	●				●			●	●※2	●						0
⑥	2004	混合		●						●		●	●					0
⑦	1400	混合	●			●						●	●					0
⑧	1600	酪農	●									●	●					0
⑨	1754	作物			●	●						●	●				●※3	3
⑩	不明	混合		●		●	●	●				●			●		●※3	0
⑪	不明	作物				●		●										0
⑫	1987	作物			●	●			●			●						0
⑬	1263	作物		●	●		●					●	●		●			0.5

（注）※1 飼料作物　※2 卵　※3 パン

（著者作成）

[13] 農村において祖先から土地を継承しつつ 200 年以上居住すると認定される「ELEHOF」の称号は、南チロルの農家の約 10%が保有するとされている。農村では名誉ある農家として扱われ、称号を得た農家は県から授与された看板を入口に掲示する。

1-3 組織等へのインタビュー調査

本研究における調査では、先述のアグリツーリズモ経営農家を対象としたアンケート調査とインタビュー調査に加え、農業、農村女性、ルーラルツーリズムに関連する多様な南チロルの組織にもインタビュー調査を実施しており、またインタビューを実施したアグリツーリズモ農家の紹介などで、当初想定していなかった農家へのインタビューや、ワイン・コーポラティブなどへのインタビューも可能となったため、合わせて表 3-4 に 8 件のインタビュー先をリスト化しておく。

表 3-4 インタビュー対象組織

組織名	対象者	調査年月
南チロル農民連合 （ルーター・ハン）	ルーラルツーリズム推進組織 代表者および研究員	2017 年 3 月 2018 年 11 月
南チロル農村女性協会	会長および秘書	2018 年 2 月
南チロル観光協会	会長	2017 年 3 月
サン・ジェネジオの養蜂農家	N 氏、40 代女性	2017 年 3 月
サン・ジェネジオ近郊の アグリツーリズモ（星 5）	O 氏、20 代女性	2018 年 11 月
サン・ジェネジオ近郊の アグリツーリズモ（星 4）	P 氏、女性	2017 年 3 月
Kellerei Bozen （ワイン・コーポラティブ）	従業員	2017 年 9 月
Eurec Research （官民シンクタンク）	ルーラルツーリズム担当 研究員	2017 年 9 月 2018 年 11 月

2 農産物の生産と販売における新たな役割

2-1 農産物のメッセンジャーとしてのネットワーク

南チロルでアグリツーリズモの制度化が進められていた 1990 年代には、農業においては深刻な問題が相次いでいた。1989 年頃からヨーロッパでは狂牛病問題が起こり、イタリアでも輸入牛肉に感染が認められるなどして、市場に牛肉不信が蔓延した。また 1990 年代後半からは北イタリアでの鳥インフルエンザ問題が起こり（喜田，2004)、相当数の鶏の殺処分がなされた。こうした問題で農家の収入は激減することとなった。そこで南チロルでは、農産物販売を軌道に戻すには、農産物に関する消費者への丁寧な説明が不可欠であり、説明が消費者の不信感を払拭させると考えるようになった。そしてこの頃から、南チロルの農村女性は農産物のメッセンジャーとして注目されるようになったという。当時の様子は南チロル農村女性協会のエルスバマー会長により、次のように語られている。

> *それはスキャンダルがたくさんあった頃のことです。狂牛病と鳥インフルエンザの問題は農家にとって衝撃でした。それまで（コーポラティブなどの）組織を通して農産物は販売されていましたが、組織が農産物を販売していたので、農家は消費者との接点はありませんでした。農村女性達が私達のところに来て言いました。「私たちは、質の高い、良い製品を生産する方法と、販売の方法を学ぶ必要があります。農産物のみでなく、ジャム、ジュース（果実飲料)、それらすべての作り方と、外部へ売る方法を。そのためにはもちろん、消費者と話さなければなりません。彼らと話すことがより重要になってきており、私たち女性は自分の農産物や製品について話さなければなりません。」*

当時の南チロルの農家は、農産物の流通の多くをコーポラティブ[14]に頼っていた。したがって農家単体で農産物の安全性などについて説明をする機会を持たなかっ

---

[14] コーポラティブ（【伊】cooperative・【独】genossenschaft）は、農産物別の生産流通組合である。南チロルにおける代表的な組織としてリンゴの VOG、牛乳の Mila などが挙げられる。第二次世界大戦後に引揚げ軍人への職業提供を目的に農産物以外にも多様なコーポラテ

た。これに危機感を抱いた農村女性が、自分たちが広報役になると声を上げたのである。この後、南チロルでは農産物の地域産品としてのブランド化[15]が進められ、農産物の見本市などが開催されるようになると、農産物のメッセンジャーとして農村女性が登用されるようになった。

当時、個々の農家は通常町に出てファーマーズ・マーケット（市場）で彼らの生産物を売ってきましたが、（狂牛病や鳥インフルエンザ問題の）その後はチームを組んで働くようになりました。南チロルのブランド形成はこの時期に始められています。もう一つの重要な点は（主力農産物の）リンゴについて展示会や見本市を開催したことです。ですが代表して展示会や見本市に参加した農家は、生産物自体について十分な知識がありませんでした。もちろん彼らは生産者や産地については知っていましたが、それを味わうために必要な方法などという面では知識を欠きました。こうした知識をよりよく伝えることができるのは農村女性だということに気づきました。農村女性は農業を行うのみでなく、生産物を調理します。そして（農業と料理の）両方の伝統や習慣とつながっています。だからこそ、（農村女性である）私達は自分が最適なメッセンジャーであることを認識したのです。（エルスバマー会長）

また南チロル農村女性協会の秘書であるナイデルコフラー氏は、農村女性の方がむしろ消費者の信用を得やすかったことを強調している。

（見本市などに行って直接説明の機会を得たことで）農村女性は彼女達がメッセンジャーとして本物であるという自信を得ました。消費者が「あなたがそう言うなら、そうなのでしょう。私はあなたが正しいと感じます。」と言ってくれたのです。それは農村女性が自分の農産物や製品についてより多く

ィブが北イタリアで発展したとされる（Borzaga et al., 2010）。

[15] 南チロルでは生産物のブランディングや宣伝広報は南チロル農民連合が担い、流通はコーポラティブが担う傾向になっている。

の知識があり、自信を持って話すことができるという利点があるためです。（ナイデルコフラー氏）

さらに農産物の説明はもちろん農村男性でも可能であるが、女性を登用した一因に担い手の中心ではないことが挙げられている。

ソーセージ・ハムの加工や耕作や作物の保護は常に男性が中心となって働いています。農村男性も消費者に話したいと考えますが、トラクターなどに乗る時間が多くて忙しいのです。男性の背後で農作業を手伝う農村女性の方が、（農産物についての）物語を語りやすい。そして（物語を語ることは）女性に自信を与えます。（ナイデルコフラー氏）

このように狂牛病問題や鳥インフルエンザといった農業問題を契機として、南チロルの農村女性らは農産物の安全性や活用法を伝えるメッセンジャーとして活動するようになった。その後は農産物の展示会や見本市といった遠方での催事のみでなく、県内で行われる南チロル農民連合の支部が開催する農産物販売イベントや、地域の農産物販売所にも同行して消費者へ直接メッセージを伝えるのが恒例となっていった。

2005 年に県法第 12 号が制定され、「南チロル産地認証制度」が開始された。ルーター・ハンによれば「南チロル産地認証制度」の開始により、「これまで以上に農産物および農産物加工品に関する情報発信が必要となり、メッセンジャーとしての農村女性の存在感が高まった」とのことである。「南チロル産地認証制度」が開始され拡大していった時期は、南チロルのルーラルツーリズムの発展期であり、アグリツーリズモの開業が増加した時期と重なっている。農産物のメッセンジャーとして自信を付けてきた農村女性らが、ルーラルツーリズムにおいてもその能力を発信しようとしたのは必然だったと考えられる。

このように、南チロルのルーラルツーリズムが発展期を迎える以前に、農村女性らに農産物のメッセンジャーとしての役割が与えられ、農村組織などを介して活動する緩やかなネットワークが存在していたのである。このネットワー

クの存在は、農村女性による農産物の情報発信能力という、人材としての潜在性を証明するとともに、農村女性の内生性を示すものであったとも言えるのである。また活動により得られる自信は、農村女性個人とそれを支援する南チロル農村女性協会という組織双方のエンパワーメントも示していると考えられる。

2-2 農産物加工品生産直売のネットワーク

アンケート調査からは、南チロルでアグリツーリズモ経営を行う農家の主要農産物には牛乳（48%）、リンゴ（32.4%）、ブドウ（19.2%）、肉（13.5%）といった南チロルを代表する農産物のほかに、農産物加工品であるジャム類（31.8%）、果実飲料（28.2%）、ハム・ソーセージ類（9.6%）、チーズ・その他の乳製品（6.6%）を生産していることがわかる。またジャム類と果実飲料においてはその割合から、かなり多くの農家で生産されていることがわかる（図 3-1）。

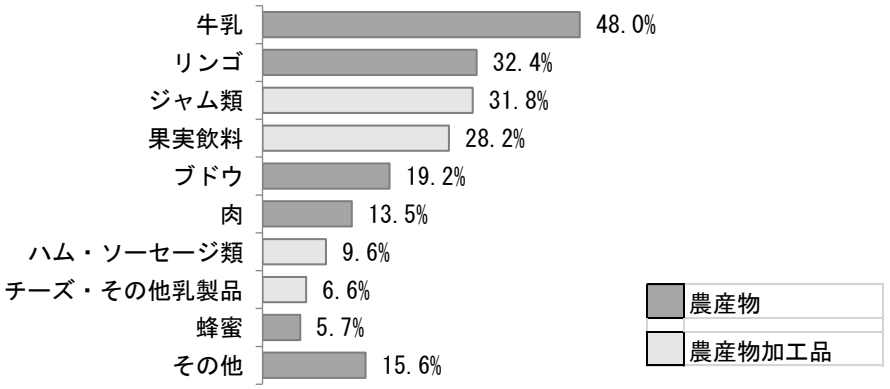

図 3-1　アグリツーリズモ農家の主要農産物・農産物加工品の種類別農家割合（2017 年）（n=333，複数回答）

（注）主要農産物・農産物加工品の回答農家数を全体の 333 で除して算出

南チロルの農家では、ジャム類や果実飲料は主に自家用として生産されてきた。主に女性が管理する自宅の庭にはリンゴ、梨、ベリー類、アプリコット、イチジクなどの果樹が植えられ、これらを自宅のキッチンでジャム類や果実飲料に加工し冷所で長期保存した。またイタリア北中部で薬用植物として親しまれているエルダー・

フラワーは、南チロルでも伝統的な飲料であり、濃縮シロップに加工して保存され年間を通して食卓に上がっている。また自宅用に飼育する豚や猪を加工してできるハム・ソーセージ類、チーズなどの乳製品は、販売用は主に肉や牛乳をコーポラティブと呼ばれる農産物別流通組合に卸して製品化しており、自家用にのみ敷地内の小さな加工場で生産していた。

これらの自家用の農産物加工品は、アグリツーリズモの開業により観光客から土産品として求められるようになった。そこで農村女性は土産品としての農産物加工品を生産する役割を担うことになったのである。農家による農産物加工品の生産はキッチンや自宅の加工場で行われている。これはかつて自家用に生産していたスペースであり、「昔から家族や親戚のために作っていたものを、観光客向けに多めに作るようになった」（アグリツーリズモ⑬、50 代女性）と言える。観光客への農産物加工品の直接販売は、コーポラティブや市場を通すより手数料がかからない分収益性が高い。「今や農家における農村加工品の製造と販売は、農業収入を補填する重要な役割を果たしている」と言える（ルーター・ハンのノールセイセン氏）。

自家用の農産物加工品を衛生面や包装などにおいて土産品のレベルに押し上げ、またそれを広く宣伝して販売を促進するために、南チロルのルーラルツーリズム推進組織であるルーター・ハンが支援を行っている。農産物加工品の製造方法から包装などデザインに関する講習会まで、ルーター・ハンや南チロルの農業専門学校などの教育機関で農家向けに開催されており、開催案内が農家に定期的に発信されている。また生産された農産物加工品は、ルーター・ハンが運営するインターネットのウェブサイトと、冊子によって宣伝広報されている（写真 3-1）。なおルーター・ハンはアグリツーリズモを経営する施設や人的余裕のない農家には、農産物加工品のみの製造のみを推奨している。

農産物加工品の関連商品として、アグリツーリズモのオリジナル商品としてロゴを入れたエプロンや、布製のショッピングバックなどを販売する農家も出てきている（写真 3-2）。こうしたアイデアは農産物加工品講習会に参加した女性のアイデアにより出てきていると言える。女性たちは「講習会を通してできた村の外の（アグリツーリズモを経営する）友人達に会って刺激をもらう」（表 3-2 のアグリツーリズモ⑦、50 代女性）ことを通して、農産物加工品や関連商品の開発と製造を行ってい

る。このようにして、アグリツーリズモの開業は、農村女性に自家で土産品としての農産物加工品および関連商品を生産、販売する役割を与えたのみでなく、村外でアグリツーリズモを経営する農村女性との結び付きという新しい農村ネットワークを生み出したと言える。このネットワークは、農村女性が地域資源を活用して土産品を販売するという内生性を示したと言える。また農村女性が、農産物加工品の生産と直売を通して新たな農業収入を生み出すという経済的な補完性もまた示していると考えられる。

写真 3-1　ルーター・ハンが発行する農産物加工品の案内パンフレット

（Roter Hahn(2016b)より引用）

写真 3-2　アグリツーリズモで農産物加工品の説明をする女性

（2018 年 11 月　筆者撮影）

3　地域資源の観光資源化における新たな役割

農産物や農産物加工品のメッセンジャーを自認した農村女性らは、ルーラルツーリズムの発展と同時に自宅を拠点として、自分の地域で採れる農産物の加工方法や伝統料理の作り方などを、観光客向け体験プログラムとして展開するようになった。体験プログラムの展開はアグリツーリズモを開業した農家が中心となって提供されたが、アグリツーリズモを経営していない農家でも、農産物加工品の販売の高まりと同時に展開した所もある

南チロルの農村女性らがアグリツーリズモを中心に体験プログラムを提供するようになり、南チロル農村女性協会は彼女達の能力をより広域に伝達しようと、2013 年に「私達の手から」（Aus unserer Hand）というブランドを作り、県内の農村女性が展開する体験プログラムを取りまとめて宣伝を行うようになった（写真 3-3）。プログラムには観光客向けに、南チロル内の学校向けに行う農村教育プログラム「農場の学校」（Schule am Bauernhof）を加え、2016 年に冊子が出版された。冊子にはプログラムの提供者として 84 名の農村女性および関係者の名前が掲載され、合計で 123 のプログラムが紹介されている。関係者というのはイタリア語や英語を苦手とする農村女性は息子や夫をプログラムの代表者にしているためである。プログラムは、「料理と農産物」「手芸と装飾」「文化と自然」「農場の学校」の 4 つに分かれており、提供プログラム数で見ると「料理と農産物」（49 件）が約 4 割を占めている。「料理と農産物」はさらに「伝統料理、地域産品を使った料理」（19 件）、「軽食、ブッフェの提案」（8 件）、「農産物の案内と加工法」（22 件）の 3 種に分かれている。これらには南チロル独特のオーストリアとイタリアが融合した伝統料理の作り方に加え、自家産品を使用した果実シロップの作り方やワインやチーズの加工法、伝統的なパン作りの方法など多岐に亘る。「手芸と装飾」（22 件）においては、農家の庭で採れる生花やドライフラワーを使用したリース作りとそれらの装飾方法、陶器オブジェ作り、ガラス装飾、レース編み、村に伝わる伝統衣装作り、草木を使用した工芸品作りなどがある。「文化と自然」は農場と庭園を歩きながら案内することがプログラムの中心であり、作物の育成や酪農の方法などを説明する。なかには、庭で採れたバラの花びらを乾燥させ粉末にしてポプリにするプログラムなど、説明のみでなく体験を織り交ぜて行われることもある（写真 3-3）。

図 3-2 は地域別に見た体験プログラムである。観光客の利便性の高いボルツァーノが 38 件と最多で、ドロミテが 25 件と続いている。観光客の来訪者数が圧倒的に多いのはドロミテだが、ボルツァーノの方にプログラム数が多いのは、観光地化されていない農村部こそルーラルツーリズムが進んだ証拠と言える。なお、本研究で調査対象地としているサン・ジェネジオ村もこのボルツァーノの地域に含まれる。

写真 3-3　南チロル農村女性協会による「私達の手から」パンフレット

（Südtiroler Bäuerinnenorganisation（2016）より引用）

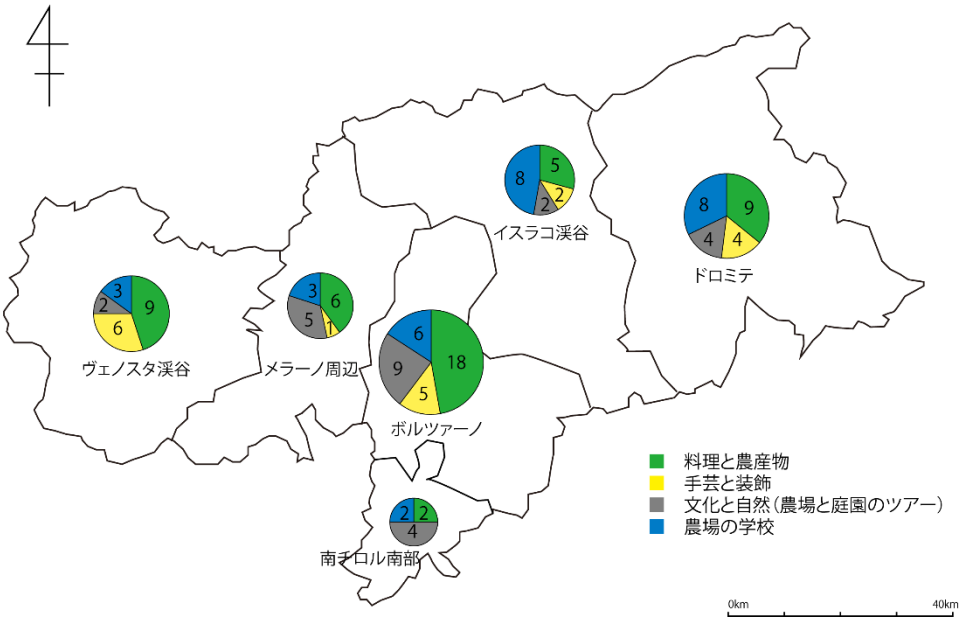

図 3-2　地域別農村女性による観光向け体験プログラムの件数（2016 年）

（Südtiroler Bäuerinnenorganisation（2016）より著者作成）

サン・ジェネジオのインタビューを行った限りでは、体験プログラムのプログラム数は冊子掲載数より多いと考えられる。プログラムの実施を季節限定にしている農家や、あまり多くの観光客を受け入れたくないと考える農家もおり、こうした農家は情報を冊子やウェブサイトに掲載していない。観光アクティビティにおいては、一元的な観光客よりは知人が経営するアグリツーリズモからの紹介や、これまでに受け入れた観光客であるリピーターのみを対象としていると考えられる。

農村女性が観光アクティビティとして展開しているものは、農村女性の生活から生まれたものがほとんどである。料理は農村女性から農村女性へ代々受け継がれ自宅で提供されているものであり、手芸や装飾は農村女性が農業と家事・育児の間の自由時間に行ってきた趣味にほかならない。農場と庭園のツアーは農場の手伝いや庭の管理から生まれたものである。こうしたアクティビティを開始することは、農村女性にとって容易であり、自信をもって提供できることである。G 氏（アグリツーリズモ⑦、50 代）は「それまで自己満足で管理してきた庭だけど、（アグリツーリズモの宿泊客などに）きれいだね、と言われると改めて嬉しい。もっと庭をきれいにしたいと頑張る気持ちが湧いてくる。」と述べている。また L 氏（アグリツーリズモ⑫、50 代）は「伝統的なこの建物を訪ねる時、特徴的な木造の家のみでなく、装飾している花やオブジェについても聞かれることが多い。すると花はいつ頃どこで採れたかを説明するのよ。」と述べている。このように、農業や農村の生活を観光アクティビティとして提供することは、農村女性に自分の生活に関しての誇りを増大させる機会にも繋がっていると考えられるのである。

地域資源の観光資源化ネットワークは、当初は個々の農村女性のボトムアップな活動に始まる緩やかなネットワークであったが、後に南チロル農村女性協会に束ねられ、同協会の活動の一部としての形式を持つようになった。このネットワークは、地域資源を最大限活用すると言う意味での内生性を示している。また庭の管理や家内の仕事をしてきた女性の特性を活かして体験プログラムを創出し、地域資源の観光資源化による新たな収入源を生み出すという意味で、経済的な補完性を示していると考えられる。

4　アグリツーリズモ運営者という新たな役割

4-1 アグリツーリズモ運営の教育ネットワーク

アグリツーリズモ開業においてはライセンスの取得前後においてアグリツーリズモ基本講習への参加が義務付けられている。基本的にはライセンス取得時に参加を促しているが、開業後 2 年間にアグリツーリズモ基本講習に参加すれば良いことになっており、ライセンス取得後 2 年を過ぎても参加がない場合は、アグリツーリズモの運営に対し県から中止命令が出されることになっている。2 年間の猶予があるのは、多くのアグリツーリズモはライセンス取得後に施設の改装や提供サービスの検討を始め、ライセンス取得後 1-2 年後に本格的な開業を行う傾向にあるためである。またアグリツーリズモ基本講習には、アグリツーリズモ運営に関わる成人はすべて参加することとされている。つまり夫婦で経営する場合は代表者のみではなく、夫婦の両方が講習を受けねばならない。

アグリツーリズモ基本講習は、県内にある農業分野を持つ専門学校のコースが当てられている。県が管轄する農業分野を持つ専門学校は計 8 校あり、各地域に分散して立地している。こうした専門学校の中心は高校を終えて入学してきた学生であるが、就農している社会人もアグリツーリズモ基本講習を始め単発の講習受講が可能となっている。アグリツーリズモ基本講習は通常は 3 ヶ月間、週 2 回の頻度で開催される場合が多い。この講習は、専門学校では年 1 回開催されるが、県内の各専門学校で時期をずらして開催されているため、開業を考える農家は年間を通してどこかの専門学校で開催されているアグリツーリズモ基本講習に参加できる。表 3-5 はボルツァーノ市内にある Haslach 家政・栄養専門学校のアグリツーリズモ基本講習の内容である。講習の内容は南チロルのアグリツーリズモ開業条件や法的理解から、所有施設の改修方法に加え、個々のアグリツーリズモのコンセプトや運営計画の設計、宣伝やマーケティングの方法や農業との両立方法など、アグリツーリズモ開業、運営に関する幅広い内容が含まれている。その開催期間は 4 ヶ月間で週に約 13 時間の受講で、拘束時間が非常に長いものとなっている。

表 3-5　Haslach 家政・栄養専門学校のアグリツーリズモ基本講習の例

期間	2018年11月27日-2019年3月28日 火曜日18:00-22:15, 土曜日9:00～18:00
料金	380ユーロ （別途、追加料金）
主催者	Fachschule für Hauswirtschaft und Ernährung Haslach
開催地	ボルツァーノ(Angela-Nikoletti-Platz 14 39100 Bozen)
講習の概要	・講習参加者の所有施設におけるアグリツーリズモとしての利用可能性 ・施設改修費用 ・必要な施設規模 ・宣伝方法 ・副業としてのアグリツーリズモ ・南チロルにおけるアグリツーリズモ開業基準 上記の説明を経て開業の意思決定を支援する 修了後、アグリツーリズモ開業における自治体への教育証明が発行される
対象者	・アグリツーリズモを始めたいと考える農家 ・すでにアグリツーリズモを運営しているが品質向上を望む農家 ・アグリツーリズモのライセンス取得後で、運営に関わる農家の担い手
講習で得られる成果	・アグリツーリズモ運営に必要な施設条件や法的理解 ・個々のアグリツーリズモのコンセプトと計画の設計 ・農業と観光の両立方法、マーケティング方法についての理解

（Haslach 家政・栄養専門学校 2018 年度プログラムより引用）

受講期間の長さは、アグリツーリズモ開業、運営における十分な知識と準備期間を与えるのみではなく、受講者同士のコミュニケーションの機会にもなる。アグリツーリズモ開業を控えた農家同士がお互いの不安を話し合ったりして、すでにアグリツーリズモ開業している農家に経験談を聞く機会にもなる。アグリツーリズモ基本講習はその拘束時間の長さから、アグリツーリズモ運営者同士の最初のネットワークを構築する場にもなっていると言える。

アグリツーリズモ講習会に参加した G 氏（アグリツーリズモ⑦、50 代）は、アグリツーリズモの開業時、まずは夫がアグリツーリズモ基本講習に参加した。自分も運営には関わることになるので、夫が受講した後、アグリツーリズモ基本講習に参加した。彼女は次のように述べている。

最初は自分のアグリツーリズモをどうしたら良いのかわからなかった。だからアグリツーリズモ基本講習で仲良くなった友人のところを訪れて、不安を聞いてもらい、彼女が始めたアグリツーリズモの工夫やサービスを見せてもらって自分の参考にしている。料理だけではなく、室内の装飾な

ども参考になる。講習への参加で得た友人達からは常に刺激をもらっている。それに、これまで村の外の遠方に住んでいる農家の友人ができることはあまりなかったから、村の外の農家に行ってお茶を飲んで話をするのは、とても新鮮で楽しい。

G 氏はアグリツーリズモ基本講習で得た新たな友人から、アグリツーリズモ運営の刺激やアイデアをもらい、自分のアグリツーリズモ運営に役立てている。また村の外の新しい友人の存在は、彼女の生活をこれまでよりも「新鮮で楽しい」ものにしたと言う。G 氏の夫の Q 氏は、アグリツーリズモ開業後の妻の変化について次のように述べている。

彼女はとても社交的になった。これまでは家の中でしか自分の意見を主張しなかったけれど、アグリツーリズモを開業するようになってからは、同じようにアグリツーリズモを運営する農村女性と連絡を取って会ったりして、生活がとても活動的になった。彼女が活動的になったことはとても良いことだと思う。彼女が活動的な生活を送り始めても、家の中の生活は大きくは変化していないから、私達（同居する夫と長男）には特に問題はない。

G 氏はその後、アグリツーリズモに関係する他の講習会にも積極的に参加するようになった。農産物加工品生産の講習会で自家製ジャムの包装や値付けについて学び、アグリツーリズモのロゴとビジネスカードの講習会で自分のアグリツーリズモを宣伝するためのロゴを作って農産物加工品のラベルに使ったり、ビジネスカードを作成してエントランスに置いたりした。こうした任意の講習会に参加して得た知識から、近年はアグリツーリズモのオリジナル商品として、ロゴを入れたエプロンも販売を開始した。G さんは「今後はガーデニングの講習会に参加して、もっと庭をうまく見せるようにしたい」と、さらに講習会参加に意欲的であった。

アグリツーリズモ基本講習は運営する農家の担い手の成人すべての参加が必要とされているが、それ以外の関連講習は任意となっている。サン・ジェネジオ村の

インタビュー調査によれば、アグリツーリズモ関連講習への積極的な参加が見られたのはアグリツーリズモ①、⑦、⑫であったが、いずれもアグリツーリズモ関連講習の参加者は女性であった。アグリツーリズモ①においては、ルーター・ハンから周知される講習会では語学力を向上させるには不足すると考え、別の語学学校を自ら探して講習会に参加した。またアグリツーリズモ⑫では、妻の語学力が向上したことに刺激を受け、夫がルーター・ハンから周知されたリストにある英語講習会に参加するようになったということであった。このように講習会参加や任意での教育を積極的に受けようとする女性の学歴だが、アグリツーリズモ①は短期大学卒業、アグリツーリズモ⑦は専門学校卒業、アグリツーリズモ⑫は 4 年制大学卒業となっており、学歴と教育意欲との関わりは見えていない状況であった。なお、サン・ジェネジオ村でインタビューを行った農村女性の学歴は、4 年制大学が 25%、短期大学が 25%、専門学校が 25%、高校が 25%となっている（未回答の 1 ヶ所を除く）。

講習会参加の回数が多いほど、他のアグリツーリズモ経営農家に友人を得る機会が多くなり、アグリツーリズモ経営農家間のネットワークに組み込まれていく度合が高まっていると考えられる。つまり農村女性はアグリツーリズモ開業を経て、関連講習の参加を高め、アグリツーリズモ経営農家ネットワークを構築し、またそれに組み込まれてと考えられる。そしてそのネットワークは農村女性に新たな知識や気づきのみでなく、教育への向上心も芽生えさせる機会になっていると言える。このアグリツーリズモ運営のための教育ネットワークは、農村女性に新たな教育機会や職業訓練の機会を与えているという意味で内生性を示していると言える。また、新たな教育を受けることで、農村女性自身のさらに学ぼうという向上心が芽生えていることは、農村女性の意識が変化したという点から個人のエンパワーメントも示していると考えられる。

4-2 次世代への農村教育ネットワーク

南チロルの農村女性は観光客向け体験プログラムを展開するのとほぼ同時期に、南チロルの小学生に対して農場教育プログラムを行うようになった。そして 2013 年に、農村女性らが個別に観光客向けに体験プログラムを開催していたものを、南チロル農村女性協会がまとめて「私達の手から」というブランド名で冊子や

ウェブサイトで宣伝するようになった。翌年の 2014 年、に南チロル農村女性協会が「農場の学校」というプログラムを開始した。このプログラムが開始された経緯を、南チロル農村女性協会会長のエルスバルマー氏は次のように述べている。

私たちは「農場の学校」を何より大切なプログラムだと考えています。これは南チロル農村女性協会が持っている「社会的農業」[16]という分野の一つです。子ども達はますます農業から遠ざかっています。チーズやバターの作り方、牛乳はどこから出てくるのか、よく知らずに消費しています。彼らは明日の消費者です。彼らが私達の製品が南チロル産の高品質なものと認識すれば、将来はそれを購入して消費するでしょう。なので学校として農場を訪れて、そこで生産されている牛乳やリンゴなどに接触することがとても重要なのです。…多くの農村女性は子供を産み育てた経験があるので、「農場の学校」の担い手になることは容易でもあります。

現在、「農場の学校」のプログラムを提供する農家数は 28 件となっている。その内容は、パン作り、ジャガイモの収穫、バター作りなど、農家の生産物を生かしたものになっており、主に学校のクラス単位で農家を訪れ、彼らの農場で 3～4 時間を過ごすことになっている。2016 年時点で 20 校が認定校として訪れている（Südtiroler Bäuerinnenorganisation，2016）。農村女性がアグリツーリズモの運営で多忙な場合は、このプログラムを夫や息子などが担うケースも見られる。アグリツーリズモ⑦の長男の R 氏はカトリック系青少年育成団体での活動経験を活かし、多くの「農場の学校」の生徒を受け入れている。混合農家である R 氏は、酪農を中心としたプログラムで、牛乳を搾り、バターを作り、サンドイッチを作るほか、農場内でゲームなどをして遊ぶ時間も作っている。農家における農業の中心は男性であるため、彼らの方がプログラムを展開しやすいと言うことも考えられるのであ

[16] 南チロル農村女性協会では「社会的農業（Soziale Landwirtschaft）」を「人々の社会的、身体的、精神的および（または）教育的な幸福を支援または改善することを目的とした農業」と定義している（Südtiroler Bäuerinnenorganisation，2017a）。同協会が持つ社会的農業には大まかに分けて、農場での保育と農場での高齢者支援、農村家族への相談支援、農場の学校という 3 分野がある。

る。また明日の農村の理解者、農産物の消費者を作りたいという考えは男女無関係に農村住民の願いでもあり、「農場の学校」は当初は農村女性向けのプログラムとして展開されていたが、男性の活動へと機会を広げており、農村女性が女性同士を超えて農場教育のネットワークを拡大していることがわかるのである。

こうした次世代への農村教育ネットワークは、農村女性が中心となり周囲の人材も巻き込みながら、明日の農業の消費者を作るという点で、農業内における補完性を示すと考えられる。また自分たちが行う農業を若い世代に見せるという点で、地域資源の活用という意味から内生性も示していると考えられる。

4-3 アグリツーリズモ運営者間のネットワーク

アンケート調査によると、アグリツーリズモを開業したことにより農村女性の交友関係に変化があったことがわかる。表 3-6 はアグリツーリズモ経営に関わる農村女性におけるアグリツーリズモ開業後の社会関係の変化を聞いたものである。これによると「アグリツーリズモ経営者の友人ができた」が 61.3%と最多であり、次いで「地域外に新たな友人ができた」が 28.5%、「地域の農家との結束が高まった」が 22.5%となった。この結果から、アグリツーリズモを開業した農村女性は、何かしら新たな交友関係が生まれ、それによりネットワークを構築したり組み込まれたりしていることがわかるのである（図 3-3）。

表 3-6　アグリツーリズモ経営に関わる農村女性の開業後の社会関係の変化

（n=333，複数回答）

社会関係の変化の内容	回答者数（人）	割合（%）
地域外に新たな友人ができた	95	28.5
アグリツーリズモ経営者の友人ができた	204	61.3
異なる業種での友人ができた	53	15.9
アグリツーリズモに関する新しいコミュニティや	67	20.1
地域の農家との結束が高まった	75	22.5

また社会関係の変化は年代別にある程度の傾向が見られる。図 3-3 によると、比較的若い世代は「地域の農家との結束が高まった」とした割合が高く、21-30 歳は 31.3%、31-40 歳は 32.5%となった。中年を中心とする世代は「アグリツーリズモ経営者の友人ができた」の割合が高く、31-40 歳は 62.3%、41-50 歳は 61.7%、51-60 歳は 65.1%となった。比較的高齢な世代は「アグリツーリズモに関する新しいコミュニティやワーキンググループに参加した」の割合が高く、61-70 歳代は 43.5%となった。

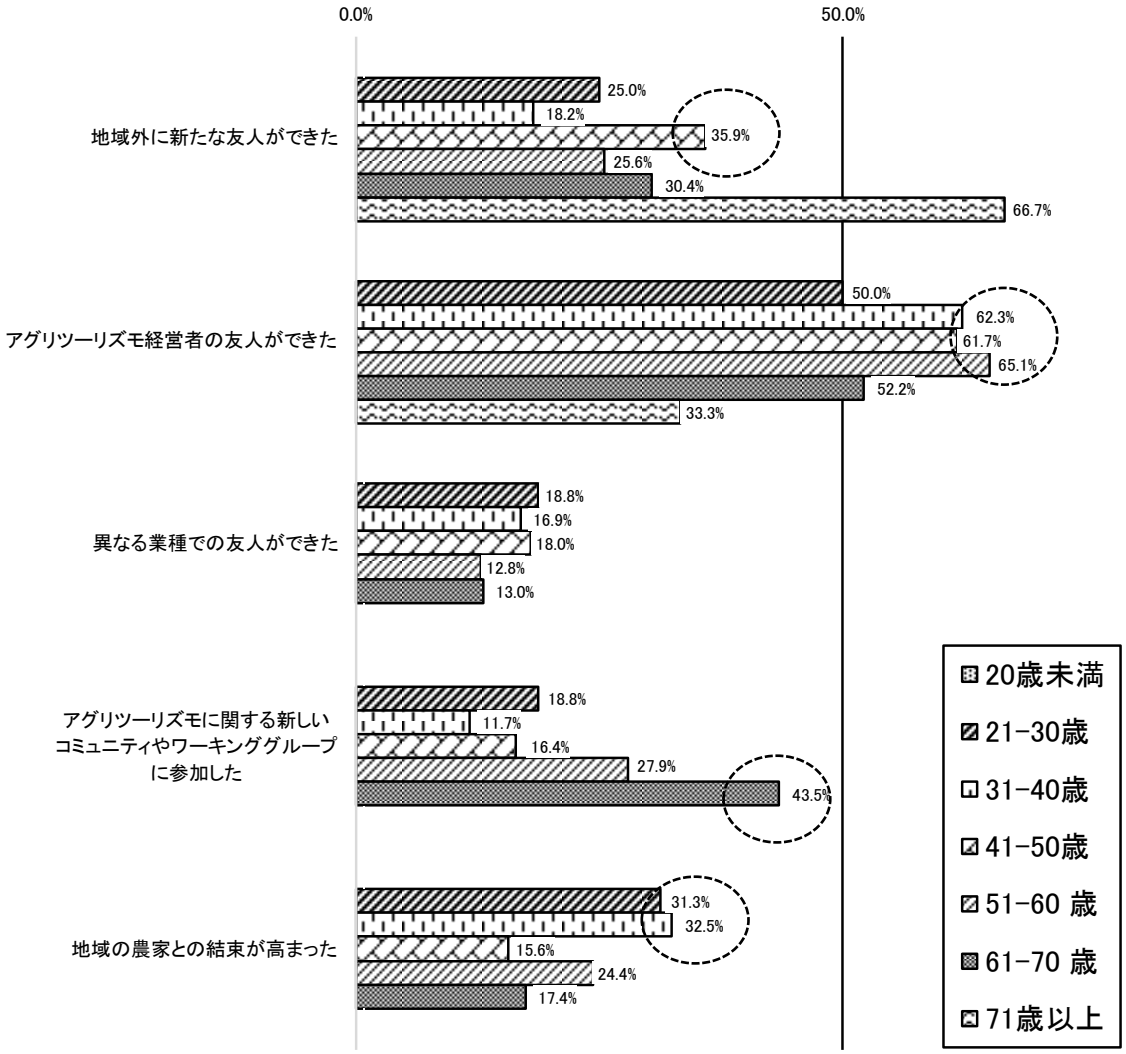

図 3-3　年齢別に見るアグリツーリズモ開業後の社会関係の変化

（n=333,　複数回答）

（注）年齢別回答農家数を年齢別農家総数で除して算出

このように若い世代では集落内の規模のネットワークが、中年を中心とする世代では規模とは無関係に県内におけるアグリツーリズモ農家同士のネットワークが、高齢な世代では何かしらの新しいコミュニティや取組みへ参加するというネットワークへ広がりが起こっていると考えられる。若い世代は就農して期間が短くまだ集落内で十分な人間関係の構築ができていないと考えられるが、これがアグリツーリズモ運営を契機に解消されていったと推察できる。中年を中心とする世代は、アグリツーリズモの実質的経営者として最も多い世代でもあり、アグリツーリズモの円滑な運営や将来の方向性を考える中心世代であることから、アグリツーリズモ運営者のコミュニティを求めているとも推察される。そして、高齢な世代はアグリツーリズモ運営という新しい領域の仕事にかける情熱は若い世代ほど生まれにくいが、それでも新たな領域に入って行こうとする挑戦が見られていると推察できる。

また、アンケート調査では、アグリツーリズモ開業後の意識の変化を 9 つの項目に分けて聞いた（図 3-4）。設問は、経済的・経営的な設問として「経済的自立が改善された」、「経営技術が向上した」、農村女性の地域向上に関する設問として「意見が尊重されるようになった」、「自己実現の機会が改善した」、開業において得た誇りや幸福感に関する設問として「成し遂げたことへの誇りが増した」、「農村生活が以前より幸せだと感じるようになった」、開業により得た不利益な状況として「自分の自由時間が減った」、「対人関係における紛争の可能性が高まった」、「女性への経済的圧力が高まった」）の 9 問で構成されており、前半の 6 問はアグリツーリズモ開業で得た肯定的な意識、後半の 3 問は否定的な意識となっている。意識について 5 段階評価で聞いており、意識を強くした項目を「そう思う」「ややそう思う」の多いものとすると、この 2 つの評価の最も多かった内容は「経営技術が向上した」（「そう思う」57.7%、「ややそう思う」26.7%、計 84.4%）と「成し遂げたことへの誇りが増した」（「そう思う」59.5%、「ややそう思う」24.9%、計 84.4%）であり、次に「自己実現の機会が改善した」（「そう思う」51.1%、「ややそう思う」29.1%、計 80.2%）が続いた。いずれもアグリツーリズモ開業後における肯定的な意識であり、この結果から農村女性は、アグリツーリズモ経営者としての自己認識が強まったと同時に、アグリツーリズモ運営を通して自信を得ることに繋がったと考えられる。

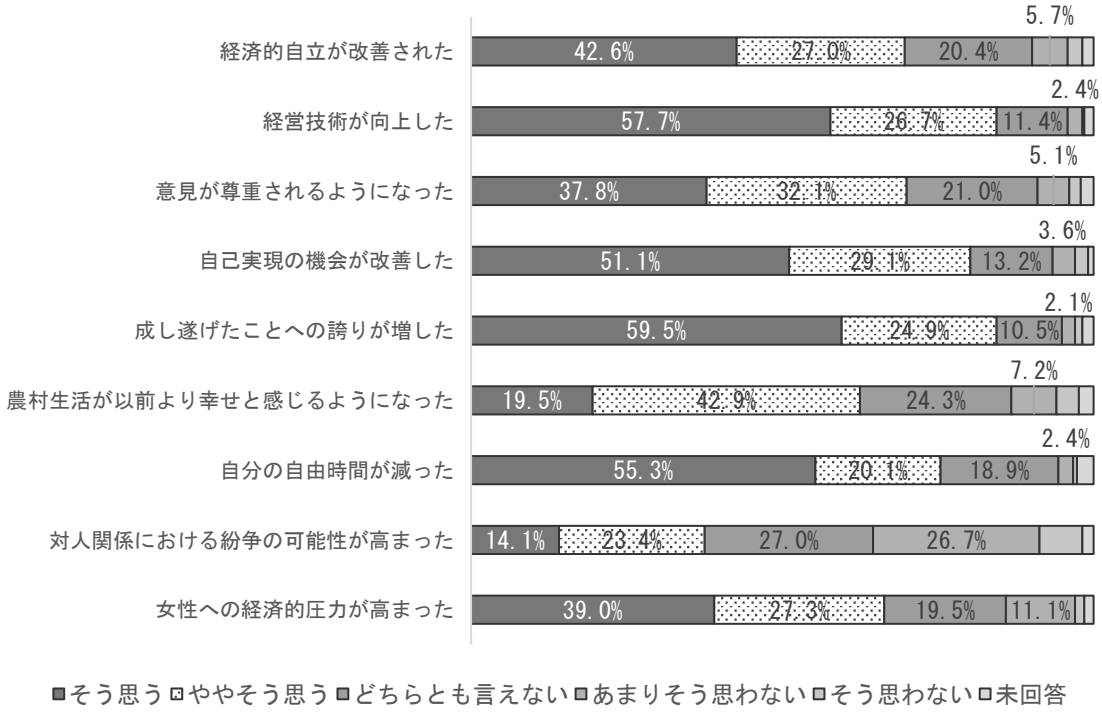

図 3-4　回答割合に見るアグリツーリズモの開業によって起こった意識の変化

（n=333）

以上のアンケート調査結果から、アグリツーリズモの開業において農村女性は交友関係を拡大させたことがわかり、アグリツーリズモ運営者間のネットワークを構築していったことが推察される。同時に、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性は経営者としての意識に目覚め、その活動が農村女性に自信を与え、自己実現の機会を提供することとなったと言える。こうしたことから、アグリツーリズモ経営者間のネットワークは農村女性がアグリツーリズモ経営者であるという役割の気づきを与える機会となり、また、彼らのエンパワーメントを向上させる基盤になっているとも考えられるの。

4-4 海外ゲストとのネットワーク

アグリツーリズモの運営は、海外のゲストとの交流を通して、農村女性やその家族の行動範囲や趣味に影響を与えたと考えられる。インタビューしたアグリツーリズモのうち、海外からのゲストを積極的に受け入れているアグリツーリズモ

では、海外ゲストとのネットワークが生まれている状況が見えた。アグリツーリズモ⑫のＬ氏は次のように述べている。

私は海外にたくさんの友人ができたことが、何よりも良かったと思っている。というのは、海外からのゲストのうち、リピーターになった人たちとは親しくなり、彼らの家に遊びに行くこともある。アグリツーリズモの縁で友人ができて、かつてドイツやオーストリアに遊びに行った。それから海外旅行先を選ぶのにも、ゲストの情報はとても参考になっている。

こうした海外ゲストとのネットワークは、以前から興味のあった海外旅行への興味を拡大させたと言える。L 氏は冬の農閑期や夏のアグリツーリズモ繁忙期後には、よく夫婦で海外旅行に出かけていて、2016 年には家族でメキシコへ、2017 年には夫婦でエジプトのリゾートに 2 回行った。南チロルからエジプトやメキシコへの海外旅行は、イタリア国民には比較的選択される旅行先であるが、航空機を使用した海外旅行で高価には違いない。こうした海外旅行にＬ氏は夫婦で年 1～2 回出かけている。「アグリツーリズモを続けるのはストレスが溜まることもあるけど、良い点もたくさんある。こうやって海外旅行にたくさん行けるような余裕が生まれたこと。そして海外の友人がたくさんできたことだ。」とＬ氏は述べている。

このようにアグリツーリズモの運営は海外ゲストとの交流の機会となっているだけではなく、アグリツーリズモから得た収入で海外旅行をするなど、新たな趣味の資金を生み出していることがわかる。こうした海外ゲストとのネットワークは、アグリツーリズモ運営を行う農村女性の意識の変化に影響を与えており、女性のエンパワーメントを醸成していると考えられる。

5　経済と政治における存在感の向上

アグリツーリズモによる観光収入は農家収入における重要な位置を占めるようになってきている（図 3-5）。アンケート調査においてアグリツーリズモ経営農家の農家収入における農業と観光の収入割合を聞いたところ、「農業 70%、観光 30%」の軒数が最も多く 23.1%となった。また観光収入が 50%以上となる割合は

37.8%と、3 分の 1 の農家で収入の半分以上を観光が占めていることがわかった。アグリツーリズモの経営農家にとって、観光収入が重要な収入源として存在感を高めてことがわかる。

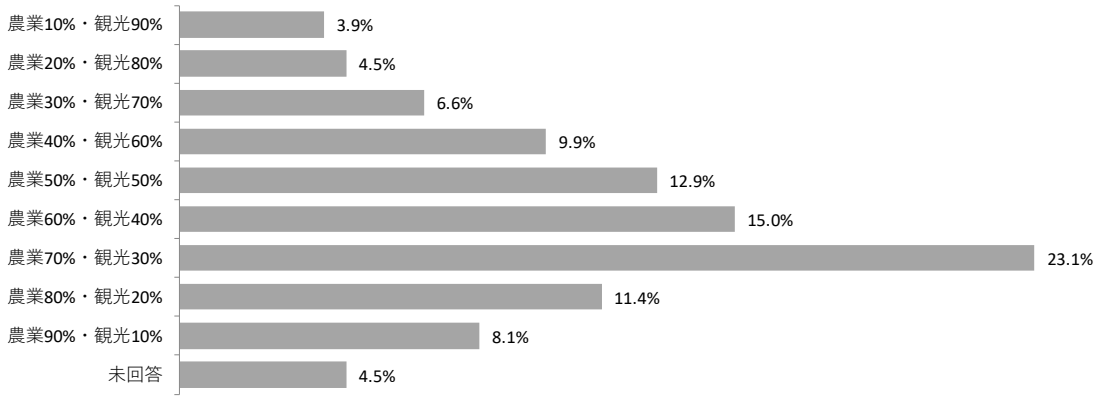

図 3-5 農村女性が運営に関わるアグリツーリズモの収入割合（n=333）

アグリツーリズモ運営で得た収入は、運営の中心を女性が担う場合は、その女性の収入となる。農業のみであった頃に自分の自由になる所得のなかった農村女性は、アグリツーリズモの開業と運営への関わりにより、こうした自由になる所得を得たと考えられる。実際、アンケート調査によれば、農村女性が経営に関わるアグリツーリズモの多くで、実質的経営者が女性となっている。その数値は 82.9%と、非常に高い割合で女性が実質的経営者であった。実質的経営者となれば、得た収入の使途の決定権は女性にあることになる。

なお地域別で農村女性が経営に関わるアグリツーリズモ農家の収入割合を見ると、観光収入が 50%以上の農家が多いのは、イサルコ渓谷とドロミテであり、ヴェノスタ渓谷とメラーの周辺、南チロル南部では観光収入は 30%程度に留まるという、傾向が見られる（図 3-6）。ドロミテは世界自然遺産で知られ、またイサルコ渓谷はスイスのサンモリッツとの組み合わせで観光客の多い地域であり、アグリツーリズモ開業前から観光客の受入れが盛んで、農業よりも観光業に依存する傾向のあった地域である。また、両地域は農業においては山深く、南チロルにおける条件不利地域でもあり、アグリツーリズモにおいても観光収入が高くなっていると考

えられる。一方で、南チロル南部は低地で平坦な土地が確保できることからリンゴ生産農家が集積し、観光業よりも農業に依存する傾向の地域と言える。

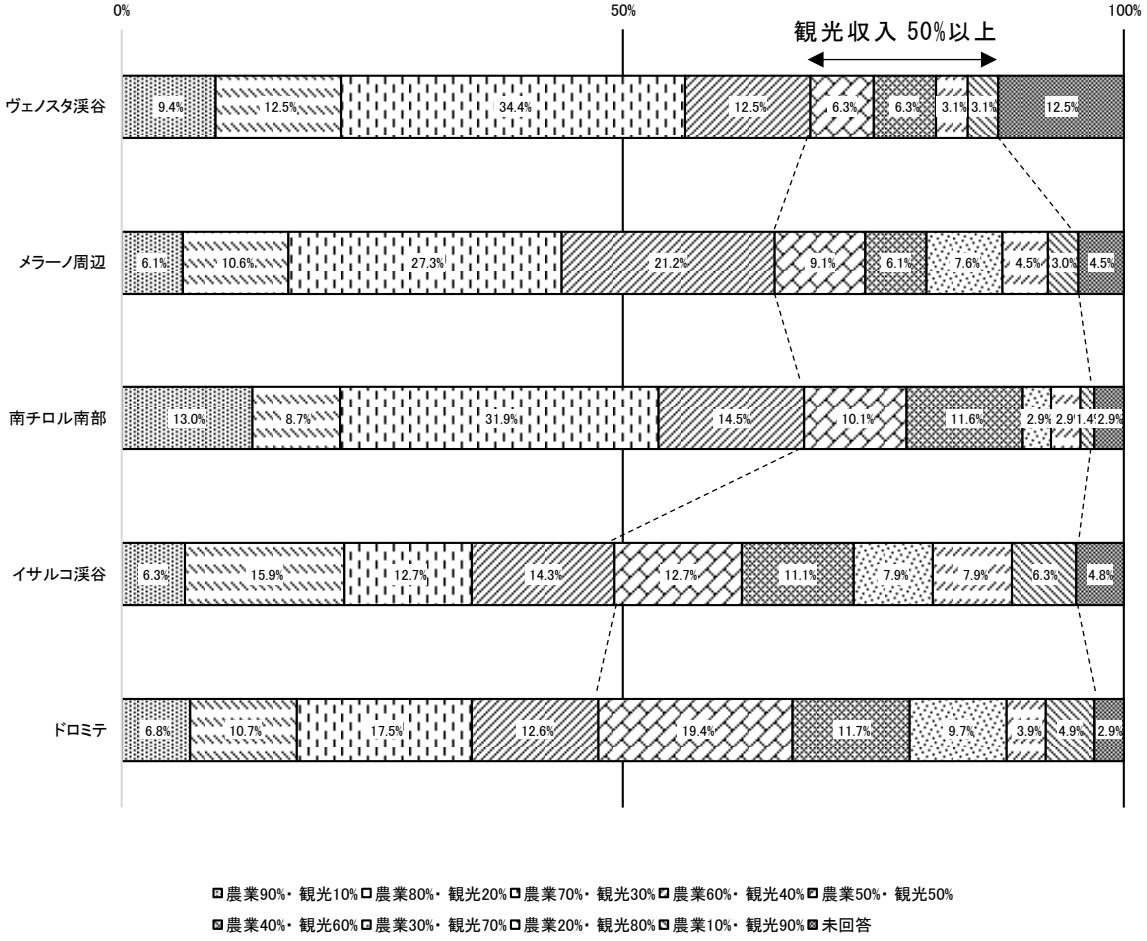

図 3-6　地域別アグリツーリズモ経営農家の収入割合　（n=333）

また年齢別で農村女性が経営に関わるアグリツーリズモ農家の収入割合（図 3-7）を見ると、観光収入が 50%以上あると回答した割合で最も多いのは 41-50 歳（41.4%）であり、次いで 31-40 歳（39.0%）、21-30 歳（37.6%）となった。一方で最も少ないのは 71 歳以上（0%）であり、次いで 61-70 歳（21.7%）となった。南チロルのアグリツーリズモが著しい発展をするようになったのがルーター・ハンの設立された 1999 年以降とすれば、現在の 30-40 歳代は 1999 年当時およそ 10-20 歳代であった。就農した時点でアグリツーリズモの導入支援制度が確立しており、親

世代から継いできた農業に就くと同時に、観光業を発進させようと考えた若い世代が多かったものと考えられる。

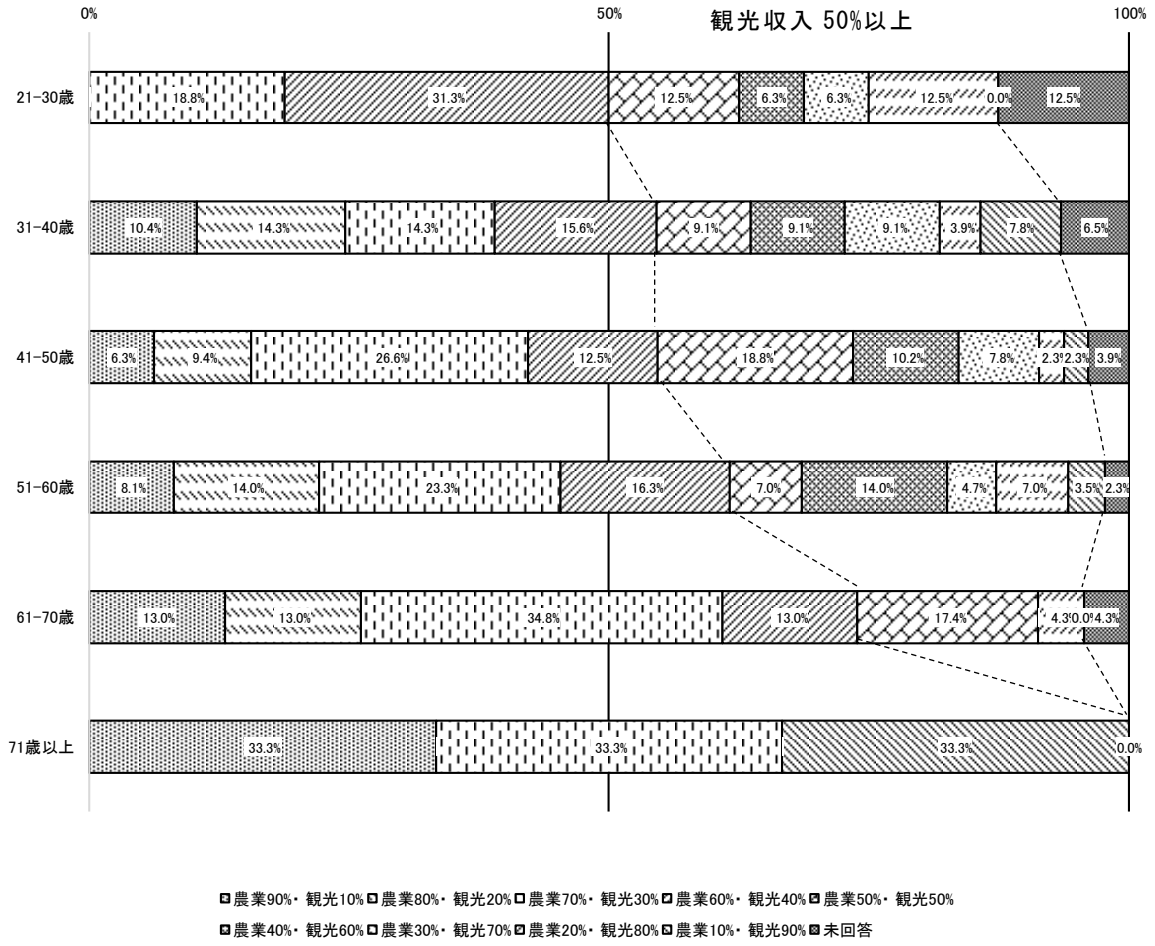

図 3-7　年齢別アグリツーリズモ経営農家の収入割合　（n=333）

またアンケート調査において、アグリツーリズモ開業後の農村女性の意識の変化を聞いているが（図 3-4)、そのうち経済的な設問である「経済的自立が改善された」は「そう思う」が 42.6%、「ややそう思う」が 27.0%となり、経済的自立が女性達の意識のなかでも十分に感じられていることがわかった。

このように、南チロルのアグリツーリズモ運営に関わる農村女性は、アグリツーリズモ運営の実質的な経営者となり、農家の収入を支えている。農家の収入割合は、農業収入が上回るとはいえ、観光収入は存在感のある割合となっている。そし

て農村女性らは、アグリツーリズモ運営を通して経済的自立を意識的にも実感していることがわかった。こうしたことから、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性は、南チロルにおける農家の収入を支える経済的なネットワークに組み込まれていると考えられるのである。そして、農村女性における農業と観光業の間における経済的な補完性を示すと考えられるのである。なお、南チロル農村女性協会は、こうした農村女性の経済的な社会進出を早い段階から認識し、より活躍しやすい社会を目指そうと考え、南チロル農村女性協会のメンバーから県議会に議員を送り込んでいる。県議会議員は、当然選挙により選ばれるが、1998 年に 1 名、2009 年に 2 名の議員を当選させることに成功した。これにより、南チロルの農村女性が経済活動を行う上での問題や課題を提起し、より活用しやすい環境を求めていくのみでなく、農村女性達の多様な活動が周知されることとなった。このように、南チロルの農村女性がアグリツーリズモを始め、様々な形でルーラルツーリズムに関わることで、女性達は経済的ネットワークのみでなく、政治的ネットワークにも組み込まれていくようになったと考えられる。

本章では、県内における、南チロルの農村女性のルーラルツーリズムを通したネットワークの形成過程と目的、ネットワークで農村女性が得た役割について明らかにした。第 4 章では、同様の内容について、集落内の状況について見ていくこととする。

第 4 章　集落内ネットワークにおける農村女性の役割の変化

本章では南チロルのアグリツーリズモ運営に関わる農村女性が、集落内においてどのようなネットワークを構築し、あるいは組み込まれ、それによりどのような変化が起きていったのかについて、アンケート調査とインタビュー調査から明らかにする。

1 農家間および農家と非農家を結び付ける新たな役割

1-1 アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワーク

サン・ジェネジオ村のインタビュー結果からは、アグリツーリズモ経営により集落内に新たなネットワークが生まれていることがわかった。まず、アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワークにでは、アグリツーリズモで提供される食事が関係していると言える。南チロルでは県の規定によりアグリツーリズモで提供する食事においては、県内産品の割合を 80%以上、うち自家生産品を 30%以上提供することが求められ、さらにこの割合が規定を超えて高いほどアグリツーリズモの格付けが高くされるという背景がある。サン・ジェネジオ村にある 18 軒のアグリツーリズモでは 11 軒のアグリツーリズモで朝食の、3 軒で朝食と夕食の両方を提供するサービスがあり、ゲストは事前に注文してこのサービスの提供を受ける。アグリツーリズモは農地のなかに立地するため、周囲にはレストランはないため、ゲストの多くは朝食を注文することになる。

アグリツーリズモでゲストが朝食を摂ると、たいていキッチンにいた女性が出てきて料理の説明をする。サン・ジェネジオ村の朝食は通常、ジャム類と果実飲料、野菜、果物、ハムやチーズ、ヨーグルト、牛乳、パン、蜂蜜といったものが並ぶ。ジャム類や果実飲料はほぼ自家製であり、野菜や果物は自宅の庭や菜園で採れたもので、その作り方や調理方法、それにまつわる家族の歴史など観光客との会話が弾むきっかけになる。ゲストがジャムや果実飲料など朝食にあるものを土産品として購入を求めれば、多くの場合その場やチェック・アウトの際に購入することができ

る。しかしながら、アグリツーリズモのなかには、酪農、畜産、養蜂を行っていない農家もある。こうした農家は、ハム、ソーセージ、チーズ、蜂蜜といったものを周辺の親戚や知人の農家から調達して食事に出している。周辺農家から調達した食材をゲストが土産品として購入を求めた場合、アグリツーリズモから生産農家を紹介し、購入方法を教える。また、ゲストが生産農家まで購入しに行くと言えば、その農家へ電話で一報を入れておくなどの対応もする。

アグリツーリズモ⑫（表 3-2）は、朝食、夕食の両方を提供するアグリツーリズモであるが、作物栽培が中心の農家で、酪農、畜産、養蜂は行っていない。朝食は実質経営者の L 氏（50 代、女性）が作り、ジャム類と果実飲料、サラダ、果物、ハムやチーズ、ヨーグルト、牛乳、パン、蜂蜜を出している。牛乳とヨーグルトは南チロルの牛乳コーポラティブの製品を出し、ハムは自家消費用に飼育した豚を加工して提供することもあるが、チーズと蜂蜜は知人農家から仕入れて提供している。知人農家はいずれも同じ村に住んでおり、車で 20 分程度の距離にある。蜂蜜を仕入れているのは、養蜂農家の N 氏（40 代、女性）からである。N 氏はアグリツーリズモを開業していないが、自家生産の蜂蜜を近隣のアグリツーリズモへ販売している。もともと L 氏と N 氏は近い年齢の子どもを持つことから友人関係であったが、L 氏がアグリツーリズモを開業してからは蜂蜜を L 氏のアグリツーリズモへ販売するようになり、それをきっかけに他のアグリツーリズモへも販売することになった。アグリツーリズモで提供される N 氏の蜂蜜は評判が良く、時々アグリツーリズモのゲストが N 氏のもとを訪れ土産品として購入するようになった。さらには養蜂の方法も質問されるようになり、近年では事前予約制で農場案内を行うようになった。農場案内は、N 氏を始め農場で働く夫などの家族が観光客に農場を案内しながら養蜂の方法を説明していくという、簡単なものである。N 氏は「アグリツーリズモをやるには施設や労働力がない」と言うが、周辺のアグリツーリズモを介して、ゲストへ土産品販売を行い、蜂蜜の消費者への直接販売を実現したと言える。南チロルのアグリツーリズモ開業基準にある通り、提供される食事は 80%が地域産品、30%が自家生産品でなければならない。地域産品は南チロルの県産品という規定ではあるが、産地が自宅に近いほど食事の質が高いと認識され、ルータ

ー・ハンの格付けにも影響するということである。したがってアグリツーリズモの多くは、食材調達はなるべく近隣農家を頼るようになるのである。

このようにアグリツーリズモの食材調達をきっかけに、アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワークが構築されたと言える。このネットワークは農村女性がアグリツーリズモの食事提供を通して、農産物という地域資源を生かし、その販路や情報を拡大するという内生性を示している。また、アグリツーリズモ運営農家で非経営農家の農産物を販売するという、農業と観光業の経済的・労力的な補完性も示していると考えられる。

1-2 アグリツーリズモとレストランによる近隣住民ネットワーク

アグリツーリズモは、レストランをゲストのみでなく住民にも開放して営業することで、アグリツーリズモのレストランを核とした近隣住民ネットワークを構築したと考えられる。サン・ジェネジオ村のアグリツーリズモでレストランを経営するのは、18 軒のアグリツーリズモのうち 3 軒だが、これは酪農や畜産を行う農家の多くが兼業で農業労働時間が長いため、レストラン営業できる農家が限られるためと考えられる。

アグリツーリズモ⑫（表 3-2）はサン・ジェネジオ村で 1987 年にアグリツーリズモを開業し、同時にゲストへ朝食と夕食を提供するサービスを始めた。その後、料理を作るのが好きだった L 氏はレストランの営業をゲスト以外にも行うこととし、4 月から 9 月までの 6 ヶ月間に一般客向けのレストラン営業を開始した。あくまでアグリツーリズモが中心であるため、レストランの営業情報は積極的には公開しておらず、レストランの席も宿泊するゲスト優先であることから、レストランが一般利用者で常時賑わうという状況にはなっていないが、週末には複数の一般客予約が入るのだと言う。利用者の多くは観光客ではなく地元の人々で、春には昼食の利用が、夏や秋には夕食の利用が多いと言う。レストラン利用者の季節変動の理由は不明だが、多数が農業に従事しているとすれば、春はリンゴ生産においては被覆作業などでの繁忙期であるため、昼食利用が多いということも考えられる。

著者がインタビューを実施した 2017 年 9 月の日曜日にアグリツーリズモ⑫の入口に座っていると、アグリツーリズモ⑫を経営する夫婦と親しい隣接の農家が昼食

を取りに訪れた。この隣接農家は、アグリツーリズモ⑫と同様にブドウとリンゴの生産をしているが、アグリツーリズモ経営は行っていない。レストランの実質的経営者である妻のＬ氏は、次のように述べている。

サン・ジェネジオの集落にはレストランが少ない。まして集落の中心から離れたこの近辺では、レストランは私たちがオープンするまで無かった。私達がレストランをオープンしてからは、近隣の住民がお茶を飲みにきたり昼食を取りに訪れたりするようになった。週末には時々、友人女性の依頼でレストランを貸切りにして、パーティーを行うこともある。食事を用意するのは大変だけれど、食べて飲んで踊って過ごすのはとても楽しい。パーティーが成功すれば、また次のパーティーの予約も入ってくる。これからはレストラン営業に力を入れて行こうと考えていて、1階を改修して広いレストランとバーを作っている。貸切りの場合は利用者が遅くなっても気持ちよく帰れるようにシャワーを備えるつもりで、ワインセラーも用意するつもり。

なおＬ氏が望んでいるレストランの改修作業は、夫と息子が農業の終わる夕方の時間帯や土日の空いている時間を見つけて行っている。Ｌ氏は、アグリツーリズモのために開業したレストランが、今や地域住民の集まる場になっていることを指摘し、Ｌ氏自身それを好意的に感じているようだ。また、レストランの貸し切りパーティーの成功はＬ氏にレストラン運営の自信を与え、より業務を拡大していこうとする意欲を湧かせたとも言える。

このように当初アグリツーリズモのゲスト向けにできたレストランが、一般客への営業を通して住民の利用を生み、近隣住民のネットワークが形成されるようになったと考えられる。こうしたアグリツーリズモのレストランを核としたネットワークは、家庭で伝統的な料理を調理していた女性という人材の潜在性を引き出したという意味で、統合的ルーラルツーリズムの内生性を示していると考えられる。また、家庭内における観光業と農業の経済的・労力的な補完性、アグリツーリズモ運営を行う農村女性の個人的なエンパワーメントまでにも影響していると考えられる。

1-3 趣味のネットワーク

アグリツーリズモの運営は、運営する農村女性の生活におけるリズムや志向を変化させ、趣味にも影響を与えていると考えられる。アグリツーリズモ運営を行う農村女性の一部は、開業後に新たな趣味を持ち、趣味のネットワークが生まれている。

アグリツーリズモ⑦（表 3-2）の G 氏（50 代、女性）は、アグリツーリズモを熱心に経営する農村女性の 1 人である。G 氏と夫は以前から山歩きが趣味で、ドロミテ方面にもよくハイキングに行っていた。しかしながら、アグリツーリズモを開業してからは、妻の G 氏が多忙になり、夫婦で山歩きに行く時間を簡単には見つけることができなくなったため、平日の夕方や週末に夫婦で時間を取れるよう事前に調整し、近郊のハイキングを行うようになった。週末には南チロルで遠出をしてドロミテ方面などでハイキングもしている。アグリツーリズモ開業前は、農業が落ち着く時期には夫婦で山歩きする時間がすぐに取れたが、アグリツーリズモ開業後は夫婦の手の空く時間に違いが生じたので、今は夫が妻の時間に合わせ、また時間が取れるように夫婦で事前に調整を行うようになったということである。G 氏家族は、アグリツーリズモ開業後、その収入などをもとにヨーロッパ圏内の海外旅行もしていた。しかしながら近年はアグリツーリズモの大規模改修工事が続き、改修費と労働時間が嵩み、海外旅行には行くことができていない。こうした G 氏が見つけた新たな趣味は、隣接するメラーノの温浴施設に行くことである。

> *最近はメラーノのスパ（日帰り温浴施設）に友人女性を誘って時々行くのが楽しみ。メラーノにはたくさんの種類のスパがあるし、車で 30 分と気軽に出かけて行けるから、出かけやすい。たくさん暖まって、汗をかいて、また元気になる。友達とのおしゃべりも楽しい。*

メラーノは中世からの歴史ある温浴施設が存在し、かつては南チロル最大の宿泊観光地でもあった。メラーノには温浴施設が現在でも多数存在するが、日帰りの利用が可能で地域住民に利用もされている。メラーノ中心部にある大型温浴施設である Terme Merano を事例にその入場料金を見ると、日帰り利用で 25 ユーロとなってい

る。これはサン・ジェネジオの住民にとって決して安い金額とは言えない。だが、G 氏はアグリツーリズモの収入を得ているので、こうした趣味の費用を自分で払うことができるのである。

またアグリツーリズモ⑫の L 氏もアグリツーリズモ運営と同時に新たな趣味を始めた。L 氏の夫はメラーノにある農家の出身で、次男のため、ボルツァーノ市南部の出身である L 氏と結婚した時、サン・ジェネジオ村に農地と家屋を購入し農業を始めた。アグリツーリズモは 1987 年に開業したが、土地と家屋を購入しているため、アグリツーリズモを開始しても改修にかける経済的余裕はなく、家族自身の手で少しずつ改装している。L 氏は家族で作り上げたアグリツーリズモに誇りを持っているが、農業と観光業の両立の生活は多忙で、ストレスが溜まることも多いと言う。

忙しい、忙しい。毎日忙しい。朝早くに起きてアグリツーリズモの宿泊客のために朝食を用意する。その間に子ども（高校生の娘）を学校に送り出す。朝食の片付けをしたら、洗濯と掃除をして、農業の繁忙期は夫の手伝いに行く。観光の繁忙期は毎日のようにゲストでいっぱいだから、農業を手伝う余裕はない。春と秋には昼食と夕食の時間帯にレストラン営業もする。夫が腰を痛めてから農業があまりできなくなってしまったので、観光業も頑張らなければならず、必死で働いている。もちろんアグリツーリズモは平日の夜や日曜は娘や夫が手伝ってくれるけれど。時にはアグリツーリズモが古いとか、サービスが十分でないとか、宿泊客にクレームをされることがある、特に最近はインターネットに掲載されてしまう。頑張っているのにこうしたことが起きると、とてもストレスが溜まってくる。

L 氏は多忙な生活で溜まったストレスを解消するため、アグリツーリズモを開業して経営が安定するようになると、これまで行っていなかった多様な趣味を始めた。

アグリツーリズモと農業で疲れた時には、近くの友人を誘って車でメラーノまで 30 分程度運転し、ダンスを習いに行く。アグリツーリズモはストレ

スが溜まるけど、ストレスを発散して気分がすっきりすれば、また頑張ろうという気持ちになれる。何より健康維持にもなるでしょう。メラーノは古くからの温泉地で、今では日帰りのスパなどの温浴施設がたくさんある。時々ヨガなども習っている。

L 氏は毎週ダンスに通っており、費用をアグリツーリズモの収入から支払っている。また、ダンスには夫や集落の友人夫婦を連れていくこともあると言う。L 氏の趣味はこれだけではない。L 氏夫婦は、土曜の夜、ゲストの食事対応が終わると、時おり集落内の友人の家へカードゲームに出かけて行く。カードはオーストリア発祥の集落で伝統的なゲームだという。アグリツーリズモを経営するようになってから、いつでもすぐに近隣の友人に会えるとは限らないため、土曜の夜など定期的にスケジュールを組んで友人と往来するようになった。L 氏は「アグリツーリズモ経営は忙しいけれど、その分効率よく遊ぶことができるように時間を空ける努力をしている」と述べる。

こうした趣味のネットワークは、すべてのアグリツーリズモの運営に関わる農村女性に言えることではないかもしれないが、多かれ少なかれアグリツーリズモの開業で多忙になった農村女性が、ストレス発散や健康維持のため新たな趣味を得るようになったということが推察される。こうしたアグリツーリズモを運営する農村女性を中心とした趣味のネットワークは、農村女性がアグリツーリズモ運営で多忙になって疲弊しても再び気力を取り戻す場として機能しており、農村女性のエンパワーメントに影響していると考えられる。また、アグリツーリズモ運営で得た収入を趣味の費用に充てることは、経済的補完性も示していると考えられる。

1-4 アグリツーリズモ運営者間および既存観光業者とのネットワーク

集落におけるアグリツーリズモの増加は、アグリツーリズモの経営者同士、またアグリツーリズモの経営者と既存観光業者とのネットワークを新たに構築したと言える。このネットワークを説明する前に、アグリツーリズモの経営者の状況について整理する。

アンケート調査からは、アグリツーリズモの開業を主張した者の状況としては、「夫」が 24.3%、「妻」が 23.4%、「夫婦」が 19.8%、「母 or 義母」が 13.2%、「父 or 義父」が 4.5%となり、開業の主張者は多様であることがわかった。しかしながら実質的な経営者を聞くと、「妻」が 82.9%、次いで「夫」が 7.8%となり、女性が圧倒的に高い割合を示した。こうしたことから、農村女性はアグリツーリズモの開業を積極的に主張したとは言えないものの、結果的には実質経営者を担うことになったということがわかる（表 4-1）。

表 4-1　アグリツーリズモの開業主張者と実質的経営者の人数割合（2017 年）

（n=333）

家庭構成員	開業主張者		実質的経営者	
	人数（人）	割合（%）	人数（人）	割合（%）
夫	81	24.3	26	7.8
妻	78	23.4	296	82.9
夫婦	66	19.8	－	－
母 or 義母	44	13.2	10	3.0
父 or 義父	15	4.5	4	1.2
全員（両親と夫婦）	10	3.0	－	－
子供または兄弟	9	2.7	14	4.2
その他	30	9.0	3	0.9
合計	333	100	333	100

また表 4-2 はアグリツーリズモ運営における業務の担い手に関する結果である。アグリツーリズモ経営は農家が経営の主体になるため、担い手は家族や近隣親族が中心になることから、選択肢は家族とし、担い手は複数名が想定されることから複数回答としている。業務の内容は「アクティビティ」、「料理」、「配膳」、「レセプション」、「部屋と施設の清掃」、「ゲストとのコミュニケーション」の 6 業務とした。

アグリツーリズモ運営における業務の担い手は、こうした6業務全てにおいて妻が中心になっている。特に「ゲストとのコミュニケーション」は92.5%、「部屋と施設の清掃」は91.0%と圧倒的に妻がその業務を担っている。

表4-2　アグリツーリズモ経営における業務担当の割合（2017年）

（n=333、複数回答）

業務	業務担当者割合（%）							
	妻	夫	息子 or 娘	父 or 義父	母 or 義母	兄弟 or 姉妹	その他	サービス提供無
アクティビティ※1	58.0	44.7	8.7	5.1	4.8	1.2	7.5	5.1
料理	76.3	2.4	3.6	0.0	7.2	0.3	6.6	10.2
配膳	77.8	7.5	8.4	0.0	6.3	0.6	6.0	7.2
レセプション	85.3	12.6	9.9	0.0	3.3	0.9	0.6	－
部屋と施設の清掃	91.0	14.4	21.0	1.2	12.6	4.2	8.1	－
ゲストとのコミュニケーション	92.5	54.4	22.5	9.3	16.2	2.7	1.2	－

（注）　※1…「ハイキング、乗馬など」と（　）で追記し質問を実施

数値は業務別に担当者数を全回答者数（n=333）で除して算出、40.0%以上を塗色

また「配膳」は77.8%、「料理」は76.3%とゲストへの食事に関しても妻が業務を担う傾向が強い。一方で、夫は「アクティビティ」が44.7%、「ゲストとのコミュニケーション」が54.4%となっており、妻よりは割合は少ないが、比較的高い割合で業務を担っていることがわかる。また、子ども世代の息子または娘においては、「ゲストとのコミュニケーション」で22.5%が業務を担っており、英語のできる若い世代として必要性が高いことが推察される。なお、父または義父はアグリツーリズモ経営の業務の担い手としては割合が非常に少なく、親世代の男性においてはアグリツーリズモ経営にはほとんど関わりがない傾向も浮き彫りにされた。アンケート調査からは、アグリツーリズモ運営は実質的経営者のみでなく、業務の担い

手も農村女性が中心であることがわかった。「ゲストとの会話や食事の提供は、女性がもともと得意とする分野」（南チロル農村女教会、ナイデルコフラー氏）であり、アグリツーリズモ運営は女性の得意分野が生かされる場であることがわかる。

しかしながら、アグリツーリズモを開始した際、運営方法がわからずに不安を抱く農家が存在していたことは第 3 章でも述べた通りである。こうした農家にはセミナーによる教育的フォローがなされたが、アグリツーリズモ開業者が他の経営者の声を実際に聞いて学びたいと考え、県内のアグリツーリズモ同士でネットワークが生まれたのであった。こうしたアグリツーリズモの運営者間の結び付きは、集落内でも起こっている。例えばサン・ジェネジオ村では、アグリツーリズモ⑦とアグリツーリズモ①（表 3-2）は実質的経営者が 40-50 代の年代の近い女性で仲が良く、互いにアグリツーリズモの新たなサービスや施設の装飾の工夫などを話し合う間柄になっている。同様に考える農家は多いことから、サン・ジェネジオ村には現在、アグリツーリズモを運営する農村女性の会が非公式に存在している。この会はアグリツーリズモ間の連絡の場という位置づけで、集落としてのアグリツーリズモ経営の課題などが話し合われ、経営歴の長い農家の女性が議長役を務めている。

実際、アグリツーリズモには集落内で多様な問題が発生していると考えられる。例えばアグリツーリズモ同士のトラブルである。あるアグリツーリズモからのインタビューにおいては、隣接のアグリツーリズモを「狂った隣人」と呼んでいた。あるアグリツーリズモは経営が順調な農家で、「狂った隣人」と呼ばれていたのは、経営が消極的な農家であり、方向性が真逆の農家である。著者はこの「狂った隣人」と呼ばれたアグリツーリズモにもインタビューを試みたが、現れた女性と話した感じでは決して「狂った隣人」という雰囲気はなく、ごく普通の農家という印象を受けた。しかしながら、アグリツーリズモに関するインタビューについてはあまり積極的に営業していないからか、回答を拒否された。どのような経緯で両者の仲たがいが生じたのは不明だが、アグリツーリズモ経営が影響を与えていることが推察されるのである。集落内でアグリツーリズモ運営者同士のネットワークが生まれているのは事実だが、内部における個人間の関係性は良いこともあれば悪いこともあり複雑であるとも推察される。

なお、集落内には観光業に関わる住民間で公的な協議会を持っている。サン・ジ

ェネジオ村には登録上、現在 18 軒のアグリツーリズモと 11 軒のホテル、5 軒のアパートメント、2 軒のゲストハウスのほか、複数のレストランが存在しており、協議会はこれらの経営者で構成されている。2017 年度時点では協議会は 9 名で構成されているとのことであった。協議会は地域としての観光宣伝等について話し合い、南チロル観光局とその内容を協議し、観光資源のほかに宿泊施設やレストランを掲載した詳細な観光パンフレットを作成している。協議会にはサン・ジェネジオ村の観光業の経営者が集まるが、参加者の性別は男女混合であるとのことであった。

このように集落内では、アグリツーリズモが集落で増加するにつれ運営者同士のネットワークが誕生している。さらにアグリツーリズモ運営者は集落内の既存観光業者のネットワークにも加わるようになっている。アグリツーリズモの実質的経営者は女性が多いため、アグリツーリズモの運営者同士のネットワークは農村女性中心となり、また既存観光業者との関係を生み出すのも農村女性であると言える。こうした状況から、アグリツーリズモ運営は女性の経営者としての能力を高め、集落内の社会参画の機会を拡大させたと考えることができ、これは農村女性の内生性と組織的なエンパワーメントを説明できる。

2 経営者としての存在感と家庭内の役割の変化

2-1 経営者としての存在感の高まり

アグリツーリズモには、農村女性によって農的なものを見せる仕掛けがなされている。ここではインタビュー調査に付随して行った施設調査の結果から、写真を示してその詳細を説明する。

（1）さまざまな世代が楽しめる仕掛けを行うアグリツーリズモの事例

アグリツーリズモ①（表 3-2）はルーター・ハンの格付けとしては星 4 つのアグリツーリズモで、サン・ジェネジオ村では高価格帯のアグリツーリズモに属する（写真 4-1）。標高 1,500m に位置し、酪農と乗馬教室を行いながら、アグリツーリズモを経営している。実質的な経営者は女性の A 氏（50 代、女性）である。A 氏はアグリツーリズモの改修提案を積極的に家族に行い同意を取り付けて、古い別棟をキッチン付きのアパートメント・タイプのアグリツーリズモに改修して宿泊者に提供し

てきた。アパートメントのうち、1つは3つのベッドルームと広いキッチンを備え3世代での宿泊が可能となっているが、これはA氏が「夏場に訪れる宿泊客の一部は2週間以上の乗馬教室に子どもを入れることがあり、その家族が全員泊まれるように」との配慮をして造ったという。

写真 4-1　アグリツーリズモ①の様子

A：サウナルーム　B：朝食　C：ファミリールームのキッチン

D：乗馬場周辺の見学小屋　E：乗馬場　（著者撮影　2017年9月）

夏季の長期乗馬教室に入るのは小学生から中学生ほどの子どもであることが多いため、庭には木馬の遊び場を造成し、周囲には保護者が乗馬の練習風景を見ることができる見学小屋を建てており(写真4-1のD)、これもA氏のアイデアである。また、A氏におけるアグリツーリズモの最大のこだわりは、1階に新築したサウナである(写真4-1のA)。標高が高いことから夏場でも寒さを感じることが多いため地域の木材を使用して造成したが、大きなガラスを張りサン・ジェネジオ村に広がる一面の牧草地と遠方の山々を見ることができるようになっている。A氏は「この

家からの眺めは素晴らしく、私はそれをとても誇りに思っている。それを十分にゲストにも感じて欲しかった。」と述べるのである。また、自分たちが過ごす母屋の1階もゲスト用の食堂に改修した。朝食は「普段のサン・ジェネジオの朝食」であり「私たちが食べているものとほとんど同じ」内容が提供される（写真 4-1 の B)。「冬場は食堂が少し冷えるので、ゲストルームまでトレイに乗せて運んでいる」というのも A 氏のアイデアである。アグリツーリズモでもサウナを併設する施設は少なく、時折村外でアグリツーリズモ経営を行う農家が見学に来るという。

（２）庭を活かした動線と 100%自家製の朝食を提供するアグリツーリズモの事例

アグリツーリズモ⑦（表 3-2）はルーター・ハンの格付けとしては星 3 のアグリツーリズモで、サン・ジェネジオ村では中価格帯のアグリツーリズモに属する（写真 4-2)。標高 800m に位置し、酪農とブドウの栽培を行いながらアグリツーリズモを経営しており、実質的な経営者は女性の G 氏（50 代、女性）である。G 氏は英語を話さないため外国人ゲストの対応は息子の R 氏（20 代）が担っており、アグリツーリズモ業務負担は G 氏と R 氏とで半々ということである。G 氏がアグリツーリズモの施設で大切にしているのは庭である。かねてから庭いじりが好きだった G 氏は庭の美しさや植物を尋ねられそれに応えることがとても喜ばしいと感じている。また庭からアグリツーリズモに続く道は、草原に建つ趣を大切にするため草の中に石畳を敷いており（写真 4-2 の E)、これは G 氏のアイデアを R 氏が改修して実現したものである。朝食は G 氏が作るが、庭で採れたベリーやアプリコットで作ったジャムとリンゴジュース、同じく庭でその季節にできや野菜と果物、小麦生産から自家製のパン、R 氏や夫が働く酪農小屋から運ばれた牛乳、鶏小屋で朝とれた卵と、自家製率が 100%に近い朝食となっている。ただし一部の食品として、バターは牛乳コーポラティブの製品を使っている（写真 4-2 の D)。

息子の R 氏は「母がゲストに出す朝食は、私達の農家としての生活がすべてつまった朝食」と誇らしげであった。ゲスト用の部屋はアパートメントで、1 つないし 2 つのベッドルームにキッチンを備えている。ベッドのヘッドボードは窓から眺めるドロミテの山並みに模した工夫がされている (写真 4-2 の A)。これは息子の R 氏のアイデアに G 氏が同意して作られたものである。「私たちは家から見えるサン・

ジェネジオの村の風景をとても誇りに思っている」とＧ氏とＲ氏は述べていた。

写真 4-2　アグリツーリズモ⑦の様子

A：ベッドルーム　B：牧場　C：アグリツーリズモ入口と庭への道

D：朝食　E：アグリツーリズモ外観と庭　（著者撮影　2017 年 9 月）

（３）自家製ジャムのサービスと花の装飾で工夫するアグリツーリズモの事例

アグリツーリズモ⑨（表 3-2）はルーター・ハンの格付けとしては星 3 つのアグリツーリズモで、サン・ジェネジオ村では中価格帯のアグリツーリズモに属する（写真 4-3）。標高 800m に位置し、リンゴやブドウの栽培を行いながら、アグリツーリズモを経営している。実質的な経営者は女性のＵ氏（30 代、女性）だが、2 人の未就学児童の育児が忙しく、経営は同居する義父母が手伝う。育児をしながらアグリツーリズモで食事を出すのは難しいため食事提供のサービスはしていない。その代わり部屋をキッチン付きのアパートメント・タイプにし、週 2 日敷地内で自家製パン、果物、野菜、卵、ジュース等を販売する店を義父が開けている

（写真 4-3 の A)。また、自家製ジャムはゲストへのウエルカム・サービスとして無料で提供している。ジャムのベリーや洋ナシ等の果物を敷地内で収穫する様子やジャムを市内の市場で販売する様子は写真に説明を付けて U 氏が冊子にまとめ、アパートメントに置いている。また、実質経営者の U 氏と義母が中心となり、アパートメントのバルコニーに季節の花の植木鉢を飾り付けている（写真 4-3 の E)。またアパートメントはゲスト用に改修が行われて内装は新しいが、通常の農家の部屋と同様に地域の木材を使用し、壁には十字架をかけている（写真 4-3 の F)。U 氏は「施設は新しいけれど、サン・ジェネジオの農家の家そのもの」と、改修において農家の家屋らしさを忘れない工夫をしたことを強調していた。

写真 4-3　アグリツーリズモ⑨の様子

A：敷地内でのパンや野菜の販売　B：自家用の家畜　C：部屋内のキッチン

D：アグリツーリズモ外観　E：ベランダに装飾された花　F：木材で造られた部屋

（著者撮影　2017 年 9 月）

（４）伝統的な農家の家屋や装飾にこだわるアグリツーリズモの事例

アグリツーリズモ⑫（表 3-2）はルーター・ハンの格付けとしては星 1 つのアグリツーリズモで、サン・ジェネジオ村では低価格帯のアグリツーリズモに属する（写真 4-4）。標高 800m に位置し、リンゴやブドウの栽培を行いながら、アグリツーリズモを経営している。実質的な経営者は女性の L 氏（50 代、女性）であり、アグリツーリズモでレストラン経営もしている。

写真 4-4　アグリツーリズモ⑫の様子

A：ダイニングルーム　B：アグリツーリズモ外観　C：馬の飼育

D：レストランでの夕食の一例　E：自家用の家畜

（著者撮影　2017 年 9 月）

L 氏夫婦は南チロル出身だがサン・ジェネジオ村外から来た移住農家の一代目で、400 年前から残る建物と周囲の農地を購入して農業を始め、ほどなくしてアグリツーリズモを開業した。アグリツーリズモは 400 年前の建物をそのまま使用しているが、ゲスト用の部屋とシャワールームは内部の改修を行っている。家屋と農地の購入をしているため、大掛かりな改修を行う経済的余裕は無いが、ゲストが利用するエリアについては少しでも快適にしたいと、夫と息子が中心となってセルフビルドで改修を進めている。L 氏は古い建物を活かし、「サン・ジェネジオ村の伝統がわかるような仕掛け」の工夫を強調する。ダイニングルームにはこの建物を購入した時からある、木製のマリア像と十字架に張り付けられたキリスト像のほか、南チロルのカトリックで聖なる鳥とされるオブジェなどが飾られている（写真 4-4 の A)。また、庭で採れる季節の花は春から秋は生花で、冬はドライフラワーで飾りつけを行い、緑豊かな地域の雰囲気を室内にもふんだんに取り入れる努力をしている。こうしたカトリックに関連する伝統的な装飾を古くても大切にして飾り、周囲の植物を室内に飾りつけることで、アグリツーリズモに農村らしい雰囲気を欠かさないようにしている。「古い施設をそのまま利用しているけれど、それがかえって本物の農家であるよう」な雰囲気づくりを L 氏は強調した。レストランの食事はイタリアとオーストリアの国境であるゆえに両国の素材が混ざった独特の南チロル料理を出している（写真 4-4 の D)。「あくまで私達がこの地域で食べてきたもの」にこだわり、南チロル料理以外のものは一切出さない。

これまで述べてきたサン・ジェネジオ村における 4 件のアグリツーリズモでは、農村女性が家の中で身に着けて来た技能や、生活で身の回りに存在した地域資源を活用して、アグリツーリズモ運営に生かしていることがわかる。アグリツーリズモ①では、ゲストの大半が乗馬目的の家族ということから、子どもの遊び場や、乗馬練習を見ることのできる小屋などを造成し、アグリツーリズモでの長期滞在を家族全員が飽きないような工夫をしている。また、アグリツーリズモ⑦では、最も大切にする庭を施設の中心とし、そこに草原らしさを失わないよう石畳でデザインされた道を引き込むなど、建物の外も回遊できるような工夫がされている。そしてアグリツーリズモ⑨は、朝食が出せない分、食材を販売したり朝食用のジャムをサ

ービスに出したり、バルコニーを花で飾り華やかな雰囲気を醸し出したり工夫をしている。さらに、アグリツーリズモ⑫では、古い施設に華やかさを与えるために一年中アグリツーリズモ内を花で飾り、伝統的な装飾品を大切に飾り続けることで農家らしい雰囲気作りに努めている。なお4つのアグリツーリズモで共通していた内容は、アグリツーリズモから見える南チロルの風景に高い誇りを持ち、それをゲストに見せたり情報発信したりしようとする工夫と、アグリツーリズモを伝統的な「農家らしく」見せる工夫である。このような工夫は、農村女性が家庭内で過ごしてきた生活から生まれた技術や気遣いの現れであり、農家としての伝統や誇りを発信する契機にもなっていると考えられる。

このように農村女性はアグリツーリズモ運営を通して、経営者として非常に高い能力を発揮していると言える。農業しか行ってこなかった時には、家族において経営者とは夫や父といった男性であったが、アグリツーリズモ経営が登場してからは女性にも経営者としての役割が家庭内に生まれてきたと考えられる。これは統合型ルーラルツーリズムにおいては経営人材としての内生性を示し、同時にやればできるという農村女性の自信に繋がり、農村女性の個人的なエンパワーメントを拡大させると考えられる。

2-2　家族間の役割の変化

ここではアグリツーリズモ開業後における家事と育児における家庭内の支援について、アンケート調査から概観する。家事の項目は「居住する家の掃除」、「衣類の洗濯」、「日用品の買い物」、「料理」の4項目、育児の項目は「子どもの学校等への送迎」、「子どもの遊び相手」、「子どもの教育」の3項目とした（表4-3）。

まず、家事についての支援状況である。「居住する家の掃除」においては「息子・娘」（21.3%）や「夫」（13.2%）などの支援が得られるようになったが、「支援なし」（59.8%）の割合も6割近くとなった。そして、「衣類の洗濯」において、「息子・娘」（9.0%）や「母・義母」（8.7%）などの支援が得られるようになったが、「支援なし」（78.1%）が8割近くとなった。さらに、「日用品の買い物」においては「夫」（30.6%）や「息子・娘」（12.3%）などの支援が得られるようになったが、「支援なし」（58.0%）が6割近くとなった。最後に、「料理」については

「母・義母」（15.3%）や「息子・娘」（15.3%）の支援が得られるようになったが、「支援なし」（57.7%）が 6 割近くとなった。

表 4-3　アグリツーリズモ開業後の家事・育児における支援状況（2017 年）

（n=333、複数回答）

家事と育児の内容		支援者割合（%）						支援なし（%）
		夫	父・義父	母・義母	息子・娘	兄弟・姉妹	その他	
家事	居住する家の掃除	13.2	0.3	6.0	21.3	2.1	7.8	59.8
	衣類の洗濯	2.4	0.0	8.7	9.0	0.9	1.8	78.1
	日用品の買物	30.6	1.5	3.0	12.3	0.6	0.6	58.0
	料理	13.2	0.6	15.3	15.3	0.6	3.0	57.7
育児	子どもの学校等の送迎	36.6	5.1	4.2	3.3	0.9	7.5	51.7
	子どもの遊び相手	37.5	7.8	17.4	11.4	4.5	8.7	41.7
	子どもの教育	62.8	6.3	9.6	4.5	2.1	3.0	31.8

（注）　数値は「家事と育児の内容」別に支援者数を全回答者数（n=333）で除して算出

50%以上を濃色、30%以上 50%未満を淡色で塗色

このような結果から、家事においてはいずれの項目も半数以上が「支援なし」と回答しており、とりわけ「衣類の洗濯」においては「支援なし」の割合が 8 割近くと極めて高い状況にあり、アグリツーリズモ開業後における家庭内からの家事支援が十分に受けられていないことがわかった。アグリツーリズモの経営は女性が中心になる傾向であることは先に述べたが、さもなれば家事負担が減少しない状況では女性の生活が多忙になることが推察される。ただし、「日用品の買い物」においては「夫」の支援が 3 割得ることができており、家事に慣れない男性も支援しやすい買い物では、「夫」が比較的積極的に支援していることが推察される。

次に、育児についての支援状況である。アグリツーリズモ開業後の家庭内の支援について、「子どもの学校等への送迎」、「子どもの遊び相手」、「子どもの教育」の 3 項目とした（表 4-3）。「子どもの学校等の送迎」は「夫」（36.6%）の支援が 3 割を超える割合で得られるようになった一方、「支援なし」（51.7%）も 5 割近くと

なった。また、「子どもの遊び相手」は「夫」（37.5%）の支援が 3 割を超える割合で得られるようになったが、「支援なし」（41.7%）が 4 割近くとなった。「子どもの教育」は「夫」（62.8%）の支援が 6 割を超えるという高い割合で得られるようになり、次いで「母・義母」（9.6%）や「父・義父」（6.3%）の支援も得られるようになっており、「支援なし」（31.8%）が 3 割程度の割合に留まった。この結果から、育児については家事に比較すると、アグリツーリズモ開業後に家庭内の支援が比較的得られるようになっていることがわかる。それは、家事における 4 つの項目において「支援なし」の割合は 6-8 割だったのに対し、育児における 3 つの項目は「支援なし」の割合が 3-5 割と低くなっているためである。また育児における支援の担い手としては、いずれの項目も最も多いのが「夫」となっており、アグリツーリズモ開業後には「夫」の育児支援が積極的になったことが伺われる。また、親世代においての支援は男性より女性の方が協力的であることも指摘できる。

このようにアグリツーリズモ開業後の支援としては、家事の項目において「支援なし」が 6-8 割に至り、育児において「支援なし」が 3-5 割に至る事実は、アグリツーリズモを開業しても家事や育児における家庭内の支援があまり得られていない女性が一定量存在することを示している。アグリツーリズモ運営に関わることで仕事量が増加した女性が、家事や育児における支援を十分に得られていないとすれば、生活が多忙化していることが推察される。

これまでに述べてきたアグリツーリズモ開業後の家事・育児における家族の支援は、内容によって支援の大きさは異なるものの、明らかに家族の役割分担に影響を与えたと言える。農村女性がアグリツーリズモ運営に関わることで、家庭内ネットワークにおける変化が起こったのであり、この変化は家庭内労働における補完性を示していると考えられる。

2-3 夫婦間の業務分担の変化

ここではインタビュー調査結果から得た、アグリツーリズモ運営農家のタイムスケジュールを見ながら、農家の家庭内における夫婦の過ごし方の状況を考察する。ここではサン・ジェネジオ村でアグリツーリズモの開業が 1980 年代と古いなかから、部屋と朝食のみを提供するアグリツーリズモ⑬と、部屋に朝食と夕食を提

供し、さらにレストラン営業を行っているアグリツーリズモ⑫の 2 軒を事例として、夫婦の家庭内の過ごし方を分析する。

アグリツーリズモ⑬はルーター・ハンの格付けとしては星 1 のアグリツーリズモで、サン・ジェネジオ村では低価格帯のアグリツーリズモに属する。リンゴと野菜類の栽培を行いながら、アグリツーリズモを経営している。実質的な経営者は女性の Z 氏（50 代、女性）である。1981 年にアグリツーリズモを開業し、サン・ジェネジオのアグリツーリズモでは最も古い開業で創業 30 年を超える。1981 年といえば、イタリア第 730 号法（通称アグリツーリズモ法）も制定されていない時期で、農家がそれぞれ独自に模索しながら観光業に参入していった時期である。こうした時期にアグリツーリズモ⑬では、妻の意見で開業を決断した。家族構成は夫婦と 2 人の息子の 4 人家族となっている。経営する家族は伝統的な木造の建物に住んでおり、建物における一部の部屋を宿泊客用に充てている、いわゆる「貸部屋タイプ」のアグリツーリズモを経営する。宿泊者向けの部屋数は 3 室である。宿泊客の要望に応じて朝食の提供を行っているが、要望があれば夕食も提供する。

アグリアグリツーリズモ⑬における開業前と開業後の変化として、まず労働時間の変化がある。夫は開業前後ともに農業に当てる時間が 8 時間、家事に当てる時間が 1 時間と変化がなかった（表 4-4）。一方、妻は開業前には農業に当てる時間が 6 時間、家事に当てる時間が 6.5 時間だったものが、開業後には農業に当てる時間が 3 時間、家事に当てる時間が 3.5 時間、さらに観光業に当てる時間が 7.5 時間と大きな変化を見せている（表 4-4）。妻は開業前に当てていた午前と夕方の農業の時間を、開業後には観光業に当てるようになった。また、家事時間や昼食や夕食といった自分の時間を減らしていることもわかる。

このようにアグリツーリズモ⑬では開業により、妻の生活は夫と比較すると大きく変化していることがわかる。また観光業の時間として、宿泊するゲストの対応のほかに、「インターネット」という項目が追加されており、これは予約が入ったゲストとの電子メールでのやり取りや、インターネット予約サイト上での操作などが含まれ、これまでに無かった新しいデスクワークという仕事が増加している。

表 4-4　アグリツーリズモ⑬における開業前後の日課の変化（夏季）

<table>
<tr><th rowspan="2">時刻</th><th colspan="2">妻</th><th rowspan="2">夫</th></tr>
<tr><th>開業前</th><th>開業後</th></tr>
<tr><td>5:00</td><td>起床</td><td>起床</td><td rowspan="2">就寝</td></tr>
<tr><td>6:00</td><td>朝食</td><td>朝食</td></tr>
<tr><td>7:00</td><td rowspan="2">家事</td><td>朝食準備</td><td>起床</td></tr>
<tr><td>8:00</td><td rowspan="2">朝食の提供</td><td>朝食</td></tr>
<tr><td>9:00</td><td rowspan="2">野菜の収穫</td><td rowspan="3">野菜の収穫</td></tr>
<tr><td>10:00</td><td>皿洗い</td></tr>
<tr><td>11:00</td><td>昼食の支度</td><td>昼食の支度</td></tr>
<tr><td>12:00</td><td>昼食</td><td>昼食，アイロン※</td><td>昼食</td></tr>
<tr><td>13:00</td><td>洗濯とたたみ*</td><td>皿洗い</td><td>住居周りの清掃</td></tr>
<tr><td>14:00</td><td rowspan="2">野菜の収穫</td><td rowspan="3">野菜の収穫</td><td rowspan="2">野菜の収穫</td></tr>
<tr><td>15:00</td></tr>
<tr><td>16:00</td><td rowspan="2">野菜の洗浄</td><td rowspan="2">野菜の洗浄</td></tr>
<tr><td>17:00</td><td rowspan="2">夕食準備</td></tr>
<tr><td>18:00</td><td>夕食の準備</td><td>市場出荷準備</td></tr>
<tr><td>19:00</td><td>夕食、アイロン</td><td>夕食、サーブ※</td><td>夕食</td></tr>
<tr><td>20:00</td><td>家事</td><td>皿洗い、整頓</td><td rowspan="3">自由時間</td></tr>
<tr><td>21:00</td><td rowspan="2">自由時間</td><td>インターネット</td></tr>
<tr><td>22:00</td><td>自由時間</td></tr>
<tr><td>23:00</td><td rowspan="6">就寝</td><td rowspan="6">就寝</td><td rowspan="6">就寝</td></tr>
<tr><td>0:00</td></tr>
<tr><td>1:00</td></tr>
<tr><td>2:00</td></tr>
<tr><td>3:00</td></tr>
<tr><td>4:00</td></tr>
</table>

淡色は農業、濃色は観光業を示す。

1 時間の間に 2 つの作業が入る場合はそれぞれを 0.5 時間と見なす

なお、インタビュー内容から補足すると、アグリツーリズモ⑬では宿泊者への食事やコミュニケーションなどは英語ができる息子が手伝っており、妻のみが観光業を担当しているわけではない。また、開業後は、建物の清掃においてアルバイトを雇用して家事を補ってもらっている。それにも関わらず観光業の時間が大幅に増

加しているのは、実質的な経営を担っている表れと言える。実際、妻の生活は開業により多忙になった状況にあるが、インタビューに対応する口調からは、アグリツーリズモの開業が妻の生活を忙しくしていることに対する不満はなく、むしろ妻が家族のなかで経済的・精神的に自立していることに喜びを感じている様子が伺えた。

アグリツーリズモ⑫はルーター・ハンの格付けとしては星 1 のアグリツーリズモで、サン・ジェネジオ村では低価格帯のアグリツーリズモに属する。標高 800m に位置し、リンゴやブドウの栽培を行いながら、アグリツーリズモを経営している。実質的な経営者は女性の L 氏（50 代、女性）であり、アグリツーリズモでレストラン経営もしている。サン・ジェネジオ村でレストラン経営をしているアグリツーリズモは 5 軒で、そのうちの 1 軒である。アグリツーリズモ⑫へのインタビューでは、サン・ジェネジオ村で農業を開始したとほぼ同時にアグリツーリズモの開業準備に入ったため、開業前後の変化を見ることが難しく、開業後の状況だけ回答を得ている。L 氏夫婦は 1983 年に結婚し、1986 年にこの地に家屋と農地を取得して移り住んだ。同時にアグリツーリズモのライセンス取得準備を行い、1987 年にはライセンスを取得して、すぐにアグリツーリズモを開業した。夫が農業の経営者、妻がアグリツーリズモの経営者という役割分担ではあるが、農業もアグリツーリズモもお互いに手伝っている。夫は農業に 7-9 時間を当て（表 4-5 の淡色部分）、観光業にも 5 時間を当て、妻のアグリツーリズモ運営を手伝っている（表 4-5）。また、夫は時々農業の時間を削り、アグリツーリズモに必要な施設改修や、日用品の買物といった家事に当てている。妻は観光業に 9 時間を当て、農業は手伝っても 1 時間程度で、ほぼ観光業専業になっていることがわかる。一方で、妻は家族の食事や洗濯などの家事に 7 時間を当てており、多忙な生活を送っている状況が読み取れる。

アグリツーリズモ⑬とアグリツーリズモ⑫の事例からは、アグリツーリズモ開業においては妻が観光業に多くの時間を割く一方、夫が何らかの家事を短い時間ではあるが引き受けていることがわかった。しかしながら、家事時間を比較すれば、女性の方が長いこともわかった。また、夫はゲストへの食事提供やアグリツーリズモ施設の改修などで観光業を担っている状況でもあった。アグリツーリズモ運営に

関わる農家の夫婦の役割分担は、開業後に夫が観光業の一部を担い、家事を支援するようになってきている状況も見て取れるが、運営の中心を担う女性が多忙な生活になってきている状況にあった。これらのアグリツーリズモでは、観光業によりパソコン操作という新たなデスクワークの時間が増加したこともわかった。

このように、アグリツーリズモ開業後の家庭内ネットワークの変化は、夫婦の過ごし方に大きな変化を与えた。これは夫婦間の労働力の補完性を示していると考えられる。

表 4-5　アグリツーリズモ⑫における開業後の日課（夏季）

時刻	夫	妻
5:00	起床	起床
6:00	農業	食事の準備
7:00		子どもの送り出し
8:00	朝食の提供	朝食の提供
9:00		
10:00	農業	家事（洗濯など）
11:00		
12:00		昼食準備
13:00	昼食	昼食
14:00	農業	農業または自由時間
15:00		宿泊客チェックイン対応
16:00	農業または施設改修、買物	
17:00		子どもの帰宅対応
18:00	自由時間	家族の夕食準備、夕食
19:00	夕食	レストラン開店
20:00	夕食の提供	夕食の調理、提供
21:00		
22:00		
23:00	自由時間	レストラン閉店
0:00	就寝	就寝
1:00		
2:00		
3:00		
4:00		

淡色は農業、濃色は観光業を示す。

2-4 子ども世代への影響

ここで親がアグリツーリズモ経営を行っている農家の子ども、つまり次世代への影響についてアグリツーリズモ⑫の事例を用いて考察する。アグリツーリズモ⑫には 21 歳の長男と 19 歳の次女がいる。次女は 2016 年に高校を卒業し、インタビュー実施時は就職活動中であり、IT 企業や製薬会社などへ面接に行って、県内での就職を希望している。彼女は、2016 年にインタビューを実施した際には、できればオーストリアかドイツへの留学をしたいと言っていたが、意識の変化があったようであった。2016 年に述べた内容は次のようなことであった。

私は高校があまり好きでない。教師は最悪だと思う。私の成績は悪くない方だし、勉強だって嫌いではない。ただ実際、同級生には移民が増えてきて、特に彼らは勉強に不熱心で困る。勉強する雰囲気が生まれないのは困る。…将来はドイツ語圏で勉強をして就職をしたい。イタリア人は怠惰で一緒に仕事をする気持ちにはなれないから。でも留学にはお金がかかるからできるかはわからない。いつかできれば良いのかもしれない。ただ私は馬と山のある南チロルの生活は好きだ。ここの生活を離れるのは少し寂しいかもしれない。

控えめであるが聡明な雰囲気の次女には、将来の選択として留学が適していると考えられたが、翌年に同じように将来の質問をすると、全く異なる回答が得られた。

やはり私は馬と山のある南チロルの生活が好きだと思う。だからまずはここで就職しようと思う。南チロルでの就職は困らない。(大学を出ていなくても）おそらく就職はできるだろう。ここは他のイタリア国内の地域ほど経済は悪くないから。半年前にボーイフレンドができた。彼は同じ村の人で幼稚園の幼馴染である。高校は一緒ではなかった。お互いの趣味は乗馬で、お互いの馬に乗りながらデートをする。彼は農家として働き、すでに忙しいので会うのは夕方以降だが、家に近いのでお互いの家を行き来しながら会っている。私はこういう生活も悪くないと思ったし、今はとても幸せだ。

若い女性が地元にボーイフレンドができたので、留学希望を地元の就職希望に変更したと言えばそれまでだが、インタビューではそれだけではないという感触を得た。彼女はかねてからドロミテや周囲の湖などの自然、飼育を担当する 2 頭の馬のことなど、南チロルの生活を誇らしげに語り、いかにここの生活が素晴らしいかを語っていた。ただ将来ここでその生活を続けて行くことができるのか、実感がわかなかったものが、ボーイフレンドができたことで、そのイメージが湧いたように感じられた。彼女はアグリツーリズモを運営する母親の背中を見て育ち、また家族内で最もアグリツーリズモの手伝いを行っていた。理由は英語が堪能だったということもあるが、「遠い地域から来た人と話すのが好き」という好奇心からでもあった。南チロルの生活がいかに素晴らしいかについては、母親がゲストに常に語っている内容であり、彼女もそれを聞いて育った。このような家庭環境から、彼女は自然に南チロルという自分の育った地域に強い愛着を持つようになったと考えられる。

このように、アグリツーリズモの運営は、その家族の子ども世代である次世代へ、地域への愛着心の再認識という点で影響を与えると考えられる。そして、次世代もまたこの地域で生活していこうと考える時、次世代の個人的なエンパワーメントに影響を与えていると考えられる。

3　既存のネットワークへの関与の深化

3-1 農業ネットワーク

集落内にはこれまで、農業の担い手が集まって農業の状況やそれを取り巻く様々な事情について話し合う農業ネットワークの場が存在していた。こうした農業ネットワークはいつから存在しているのか、地域住民が把握できないほど歴史は古く、むしろ地域に農業が根付いた頃から自然発生的に生まれてきたものとも考えられる。それらは 20 世紀初頭に南チロル農民連合が設立されたことで、南チロルという県内で組織化されたが、協議の場はあくまで地域主導で開催されている。傾斜地の多い南チロルの集落では、農業機械が入るようになったのは 1950 年代以降であり、それまでの農作業は手で行われていた。リンゴやブドウの収穫期には多数の担い手が必要となり家族や親戚が総出で手伝ったが、それだけで人手は十分ではなく、集落

内の近隣農家からの支援も不可欠であったため、こうした担い手を集落内で融通することは地域の協議の場で決められることが必要であった。現在も、秋のブドウの収穫期には、近隣農家の支援を得て収穫を行う風景が良く見られる。ブドウは収穫すると痛みが早いが、ワイン加工は鮮度の高いブドウを多量かつ一時に加工開始する必要があるため、収穫もまた一時に終了される必要がある。そのため一時に多くの人手が必要となり、その融通をどうするかについて協議が必要となったのである。こうした集落内の農業における協議の場は、農業の中心的な担い手である男性が参加する場であり男性中心のネットワークであったと言える。

一方、農村女性が集まる非公式な場も存在していたが、これは集落で公式に行われる農業に関する協議の場に参加しない農村女性間の意見交換を図るもので、地域の農業に関する経営的決定権のあるものではなかった。こうした非公式な集落内の農村女性コミュニティを組織的に形成していったのが、1970 年代に活動を開始した南チロル農村女性協会である。この南チロル農村女性協会は 15,000 人を超える農村女性が登録している。南チロルには約 54,000 人の農業従事者がいるが、半数以上が男性と想定されるならば、残りの女性の多くがこの南チロル農村女性協会に登録していることになる。南チロル農村女性協会は県単位で存在する農村女性組織としてはイタリア最大であるが、実際にその組織は多数の集落またはそれ以下の単位ごとにある支部から形成されている。南チロル農村女性協会は南チロルを Bozan、Meran、Unterland、Eisacktal、Pustertal、Vinschgau の 6 地域に分けて支部を置き、さらに Bozan に 23、Meran に 29、Unterland に 12、Eisacktal に 35、Pustertal に 26、Vinschgau に 28 の地域部会を持つ。こうした地域部会はかねてからあった農村女性の非公式なネットワークを公的に緩やかに組織化しただけのものであったが、南チロル農村女性協会としての活動が 30 年を超えた現在では、集落における農村女性組織という色合いとともに、南チロル農村女性協会の地域部会という色合いも合わせ持つようになってきている。こうした地域の農村女性のネットワークだが、農業に関する意見交換のみでなく、後発的に加わった観光業や、生活および趣味におけるネットワークを生み出す土台になっていると考えられる。

農村女性達がアグリツーリズモ運営を通して、既存の農業ネットワークに組み込まれていったことは、農村への社会参加の機会が拡大したことを意味しており、農

村女性の組織的なエンパワーメントを示していると考えられるのである。

3-2 教会ネットワーク

集落における農業ネットワークを強固にしてきた要素の一つには、集落に存在するカトリック教会の存在が大きい。第 2 章で述べた通り、南チロルにおける自治権獲得において農村住民にながらく寄り添ってきたのはカトリック教会であり、南チロル最大の政党である南チロル人民党や､南チロル農民連合とも深い繋がりがある。また、集落における催事の多くは教会やその前の広場で行われていた。現在、サン・ジェネジオ村では毎週日曜日に礼拝が行われ、熱心な信者の一部は参列者に配るパンを焼いて用意し持って行き、また礼拝後には教会前の広場にあるカフェに住民らが集まってきて会話をする。アグリツーリズモ⑫の次女（20 代、女性）は「私達のような若い世代は教会にはあまり行かないし、伝統的な行事にはそれほど興味もない。」と言っており、若い世代の教会離れは確かに存在しているとも言えるが、それでも週末の教会にはかなりの人数が集い盛会な様子が見られ、教会を核とした集落内のネットワークは現存していると言えよう。

集落では催事において住民は正装して参加する。南チロルの正装は各家庭において手縫いで作られ、その作り方は各家庭の女性間で伝承されてきたものである。正装といっても南チロル県内で一様ではなく、集落ごとに色やデザインが異なっている。正装には公式な場で使用するものと、そうでない場で使用するものと 2 種類があり、現在でも各家庭でこの衣装を手縫いで作成している。この衣装はカトリック教会関連の催事の一部と、南チロル農民連合や南チロル農村女性協会の主催する伝統的な会議などで着用されている。衣装の着用は、集落としての、また南チロルとしてのアイデンティティを維持させる役目を果たしているとも言える。こうした衣装は今や、観光資源としても重要な役割を果たしている。集落ごとに異なる華やかな衣装が頻繁に目につくことで、観光客は南チロルに伝統と文化が継承されていると感じることができる。こうした非日常的な体験は南チロルの観光地としての評価を上げることに繋がる。実際、南チロルの集落で伝統的な衣装を観光客向けに見せる機会を作っているわけではない。しかしながら週末の教会や集落の祭などはコムーネ内のより小さな集落単位で行われ、衣装を身にまとう機会は多く、観光客も伝

統的な衣装を着た住民に度々出くわすのである。時には珍しがって観光客が住民に話しかけたり、記念撮影を求めことがあるが、衣装を纏う住民の多くはむしろ誇らしげに説明をしたり写真撮影に応じたりしているのである。

伝統的な教会ネットワークには、農村女性はもともと組み込まれていたが、催事やそれに使用する衣装を観光的な側面から見せようとする姿勢が生まれたことは、ネットワークへの関わり方が変化したとも考えられる。これまで地域の住民としてある意味受動的に関わってきたネットワークに、能動的に関わるようになったとも言って良い。また、こうした農村女性の活動が、観光客を通して伝統文化を集落内に再認識させているならば、教会ネットワークの強度を高めると言う意味で、農村女性の貢献が生まれていると考えるのである。農村女性が教会ネットワークの強度に関わるとすれば､それは地域の社会･文化的背景との関わりという意味において、埋め込みを示していると考えられる。

3-3 近隣住民ネットワーク

インタビュー調査によれば、サン・ジェネジオ村には様々な生活の助け合いのネットワークが存在していると言う。例えば、アグリツーリズモ⑥を事例として説明する。アグリツーリズモ⑥は 40 代の夫婦により経営され、彼らには現在小学校に通う 2 人の子供がいる。妻がオーストリア、夫がイタリア出身であり、オーストリアで夫が仕事をしている時に知り合って結婚した。子供は都市部ではなく環境の良い地方で育てる方針であり、居住地として互いの実家へアクセスしやすい場所を探したところ、南チロルのサン・ジェネジオ村になったとのことであった。サン・ジェネジオ村のアグリツーリズモ経営農家の多くは地域に長く居住する農家であるが、アグリツーリズモ⑥はそのなかでも少数派の移住者組[17]である。夫が農業を担い、妻がサン・ジェネジオに唯一存在する小学校で教師をしている。アグリツーリズモ経営においては主に夫が観光客対応をするが、料理は妻の仕事であり、アグリツーリズモ経営における夫婦の業務負担は半々ということである。子供たちは母親の勤

[17] 南チロルでは農地継承は親族の代表者が一括で行うことが定められているが、後継者不在により耕作が放棄されるなど農業に使用されなくなっている土地については県外者でも購入が可能である。アグリツーリズモ⑥を経営する夫婦は県内不動産業者を介して土地と家屋を購入したとのことであった。

務する小学校に通っているが、通常帰宅は母親の方が子ども達より遅くなる。早く帰宅する子どもの対応は通常は夫が担うが、農業やアグリツーリズモが忙しかったり、夫が観光客のハイキング・ガイドなどで外出していたりする時には、子ども達は小学校同級生の保護者の家で預かってもらうこともあると言う。また。サン・ジェネジオ村には図書館が存在するが、週 3 日しか開館しないため、常に本を借りに行けると言う状況にはない。本を読むには市街地まで出て書店で購入するか、市街地の図書館内で閲覧しなければならない。そこで、かねてから本の貸し借りはサン・ジェネジオの集落内の隣人や知人の間で行われてきたという。アグリツーリズモ⑥の妻によれば、「サン・ジェネジオ村にはボランティアの精神が根付いており、それぞれの世代が様々な役割をボランティアとして担っている」と述べるのである。

またアグリツーリズモ①には 6 人の子供がいる。年齢の高い上 3 人の子供は 20 歳前後で手が離れつつあるが、年齢の低い下 3 人の子供はサン・ジェネジオの小学校に通う。このアグリツーリズモでは妻が実質経営者であり、アグリツーリズモの繁忙期は多忙である。サン・ジェネジオの小学校はスクール・バスで送迎をしているが、小学校から別の場所へ直接行く場合は親が車で迎える必要がある。それができない場合は、小学校同級生の保護者や近隣の住民へ依頼して送迎を頼むことも多いと言う。このように様々な場面で集落内の互いの生活を支えるための互助的ネットワークがサン・ジェネジオ村には存在していると言える。

こうした農村集落の互助精神が根付いている背景には、キリスト教信仰の影響もあると考えられるが、それ以上に北イタリアがコーポラティブの発祥地である点にも繋がると考えられるのである。戦後に仕事の無い多数の兵士らが帰還し、彼らに職を与える目的で発祥したコーポラティブであるが、今や南チロルにおけるコーポラティブは、第 2 章で述べた農産物の流通組織のみではなく、教育、福祉、交通、金融など多岐に亘る分野に存在している。コーポラティブがいち早く発祥し根付いた南チロルでは、集落の住民による互助精神はむしろ当たり前のものとして地域に存在していたとも考えられる。そしてこうした互助的機能は、アグリツーリズモ経営を行う農家においては以前にも増して重要性を高めていると考えられる。

このようにアグリツーリズモ運営に関わる農村女性は、これまで以上に近隣住民ネットワークに関わるようになったと考えられる。近隣住民ネットワークで得ら

れるのは家事や育児を軽減するための互助機能であり、そういった意味では労働力の補完性を示していると考えられるのである。

本章では、集落内における、南チロルの農村女性のルーラルツーリズムを通したネットワークの形成過程と目的、ネットワークで農村女性が得た役割について明らかにした。第 5 章では、南チロルのルーラルツーリズムの農村女性における役割が、ネットワークの拡大とともにどのように変化したのか、統合型ルーラルツーリズムの視点を用いて考察する。

第 5 章　南チロルのルーラルツーリズムにおける農村女性の役割

本章では、南チロルのルーラルツーリズムにおける農村女性の役割を、統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴を応用して構築した分析の視点を用いて考察する。分析の視点は Barcus（2013）の提示したネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み、持続性を基盤とし（表 1-1)、これに農村女性を分析するための視点を加えて構築されている（表 1-2、1-3)。本研究ではこの 7 つの特徴のなかでも、ネットワークと規模を重要な特徴として扱うことは第 1 章で説明した通りである。これまで第 3 章、第 4 章において、規模を県内と集落内とし、農村女性がルーラルツーリズムに関わることで生まれたネットワークについて説明してきた。本章では、農村女性がルーラルツーリズムを契機にどのようにネットワークを拡大させ、役割を変化させていったのか、統合型ルーラルツーリズムの内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み、持続性の視点を使用して分析する。

1 ルーラルツーリズムを契機としたネットワークの拡大

1-1 アグリツーリズモを運営する農村女性のネットワーク関与の傾向

ここではサン・ジェネジオ村でアグリツーリズモ運営に関わる農村女性が、具体的にどのようなネットワークへ関わるのかを示し、農村女性の所属が多いネットワークの状況、複数のネットワークに関わる農村女性の傾向、ネットワーク間の関連等について分析する。

表 5-1 は、サン・ジェネジオ村でアグリツーリズモ運営を行う農村女性が具体的にどのネットワークに関与したかを示している。これまでネットワークとして県内に 8、集落内に 8（家庭内ネットワークはひとまとまりとする）の存在を指摘してきた。

表 5-1 サン・ジェネジオ村の農村女性とネットワークの関わり

アグリツーリズモ No.	県内ネットワーク								集落内ネットワーク											
																	家庭内			
	経済ネットワークの存在感 ※1	海外ゲスト	AT運営のための教育	地域資源の観光資源化	AT運営者同士	農産物加工品生産直売 ※2	次世代の農村教育	農産物メッセンジャー	AT運営者同士	AT/非AT	ATレストラン	農業	近隣住民	趣味	既存観光業者	教会	家族観の役割変化	経営者としての存在感	夫婦間の役割変化	子ども世代への影響
組織的・自発的	自	自	組	組	自	組	組	組	自	自	自	組	自	自	組	組	自	自	自	自
新規・既存	既	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	既	既	新	既	既	新	新	新	新
⑫(17)	■	■	■	■	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
⑦(13)	■	■	■		■	■	■	■	■			■		■	■	■	■			■
⑬(12)		■	■	■	■	■		■	■	■		■			■	■	■	■		
①(11)	■	■	■	■	■			■	■	■		■	■		■			■		
⑧(10)	■			■		■		■	■	■		■			■	■	■	■		
③(9)	■		■			■		■		■	■	■			■		■		■	
⑥(9)	■	■		■		■		■				■	■		■		■		■	
②(8)	■		■	■		■		■		■	■	■			■					
⑨(8)	■	■	■		■	■		■				■	■		■					
④(7)			■	■		■		■		■		■			■		■			
⑪(6)	■		■		■			■		■		■			■					
⑤(4)				■		■		■				■			■					
⑩(4)	■					■		■				■			■					

■：ネットワークへの関与が認められる　■：ネットワークの関与が推察される

（注）※1　観光収入が 30%を超える（赤）　※2　生産/販売を実施（赤）販売のみ実施（黄）

アグリツーリズモ番号の後の（　）は所属するネットワーク数を示す

これらのネットワークには、農村女性がルーラルツーリズムに関与することで新たに生まれた新規ネットワークと、ルーラルツーリズム登場以前から存在し、ルーラルツーリズム以後に農村女性が新たに関与を強めた既存ネットワークがあり、また、ネットワークには組織的に形成されたものと、個人が自発的に形成したものがあり、性質の異なるネットワークが混在していることに留意する必要がある。表 5-1 ではこうした性質を区別しているが、県内では農業組織などの支援を受けた組織的なネットワークが、また、集落内では新たに自発的に形成されたネットワークが多いことがわかる。そして、全体的に既存より新規で形成されたネットワークが多いことも指摘できる。

表 5-1 からは、インタビューを行った全ての農村女性が、何かしらのネットワークに関与しており、アグリツーリズモの開業はネットワークへの関与が必然となることがわかる。さらに、表 5-1 から読み取れることとして 3 点を挙げておく。第一に、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性は高い割合で経済ネットワークに所属しており、アグリツーリズモ運営が農家収入に大きな影響を与えたと言える。なかでもアグリツーリズモ運営のための教育ネットワーク、アグリツーリズモ運営者同士のネットワーク、農産物加工品生産直売ネットワークに所属する農村女性は、経済ネットワークにおける存在感を高めている傾向が伺える。

第二に、複数のネットワークに所属している農村女性ほど、アグリツーリズモ運営による経済効果を上げ、運営に関する教育を熱心に受け、運営者同士の人脈を構築しているということが言える。表 5-1 によれば、アグリツーリズモ①⑫⑬のようにネットワークに多く所属する農村女性は、県内と集落内の両方においてアグリツーリズモ運営者同士のネットワークに所属しており、また、県内ではアグリツーリズモ運営のための教育ネットワーク、地域資源の観光化ネットワークに所属し、集落内ではアグリツーリズモと非アグリツーリズモ、農業、既存観光業者といったネットワークに所属している。こうした複数のネットワークに所属する農村女性の家庭では、アグリツーリズモ運営を行う農村女性のために家族間の役割分担が変化する傾向にあり、結果として経営者としての存在感が高まっているということも言える。

第三に、サン・ジェネジオ村でアグリツーリズモ運営を行う農村女性は、アグリツーリズモという観光業を通して農業に貢献していると言える。表 5-1 によれば、アグリツーリズモ⑦⑧⑬のように、県内で農産物加工品の生産直売ネットワークに所属する農村女性は、農産物の販路拡大に貢献し、集落内で農業ネットワークに強く関わって農村での社会参画を強めていることがわかるためである。

こうしたサン・ジェネジオ村の事例から、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性は、多くの場合において経済的な存在感を強めており、なかでも複数のネットワークに所属する農村女性ほど積極的にアグリツーリズモを運営していると言える。また、農村女性による積極的なアグリツーリズモ運営は農産物の販路拡大を通して農業に影響を与えるのみでなく、農村女性の社会参画も促していると言える。

1-2 ネットワークの拡大における類型区分

ここでは農村女性によるネットワークの形成や組み込みの過程で起きた、ネットワークの拡大における 2 つのパターンを、県内と集落内の規模別に示す。1 つは県内において、アグリツーリズモ運営のための教育のネットワークを契機としてネットワークが拡大した類型であり、もう 1 つは集落内でアグリツーリズモとレストランのネットワークを契機としてネットワークが拡大した類型である。これらの類型はサン・ジェネジオ村のアグリツーリズモ⑦と⑫を例としており、農村女性が強く関与するネットワークを中心に示している。

1-2-1　県内におけるアグリツーリズモ運営のための教育ネットワークを契機としたネットワークの拡大

県内におけるネットワークの拡大は、アグリツーリズモ運営のための教育ネットワークが契機となって起こるパターンが挙げられる。具体的にサン・ジェネジオ村のアグリツーリズモ⑦を例に挙げて示す（図 5-1）。

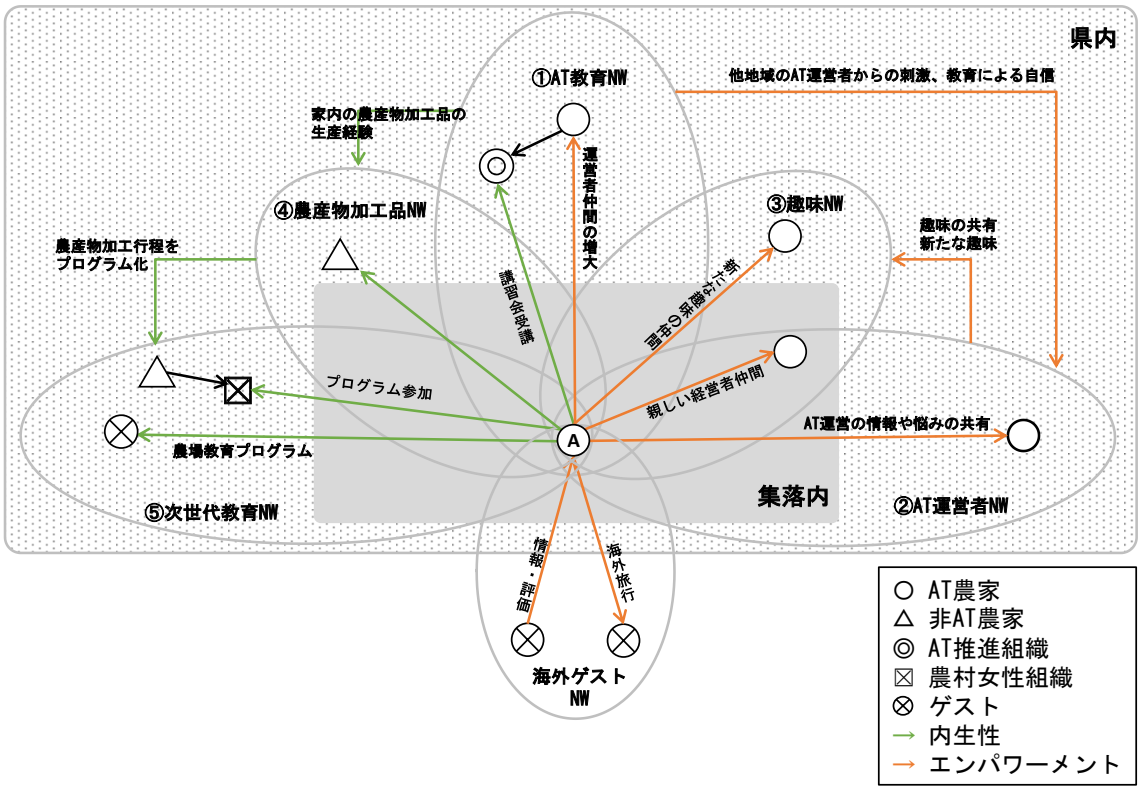

図 5-1 アグリツーリズモ運営のための教育による県内ネットワークの拡大

（注）AT=アグリツーリズモ　NW=ネットワーク

実質経営者であるＧ氏（50 代）は、家族で相談し 2007 年にアグリツーリズモを開業した。サン・ジェネジオ村のアグリツーリズモにおいて、次世代教育プログラム「農場の学校」を手掛ける唯一のアグリツーリズモである。運営関係者に義務付けられているアグリツーリズモ基本講習に夫の受講に次いで受講し、経営の基本的内容を習得するのみでなく集落を超えた県内における多くのアグリツーリズモ運営を行う女性の友人を得た。そのうち何人かとは大変親しくなり、お互いの家を行き来してアグリツーリズモのサービスについて話し合ったり、時には気晴らしとして趣味に誘い合ったりするようになった。このようにして、アグリツーリズモ運営者への教育ネットワークに参加することで（図 5-1①）、アグリツーリズモ運営者同士のネットワークに組み込まれる機会を得た（図 5-1②）。親しくなったアグリツーリズモ運営者とは、互いの趣味に参加するようになり、趣味のネットワークにも発展した（図 5-1③）。Ｇ氏はアグリツーリズモ運営者同士のネットワークを活用して得た知識をヒントに、新たにアグリツーリズモ運営に関する応用的な講習を受講して、ジャムやオリジナル・ロゴ入りのエプロンを生産しゲストに土産品として販売するようになった。こうして農産物加工品生産直売のネットワークにも加わるようになった（図 5-1④）。アグリツーリズモを開業してから後継ぎである長男が運営の手伝いをするようになったが、長男がカトリック系青少年育成活動団体でボランティアとして活動していた経験から、農村女性協会が推進していた次世代教育プログラムである「農場の学校」のメニューを作ってみないかと持ち掛けられ、一緒に開始することになった。こうして次世代教育ネットワークにも加わるようになった（図 5-1⑤）。「農場の学校」はアグリツーリズモを拠点として長男が南チロル県内小学生の受入れをし、Ｇ氏はその支援を行うが、プログラムの内容は牛乳からバターへの加工などであり、農産物加工品生産の経験を活かしている。また、Ｇ氏は海外ゲストとの関係を大切にし、アグリツーリズモに対するゲストの評価が上がることを意識して運営に当たっている。親しくなったゲストのいる国へ海外旅行をしたこともある。こうしたことからＧ氏は海外ゲストとのネットワーク（図 5-1⑥）を大切にしている。Ｇ氏は英語を話すことができないが、海外ゲストを重視するため世界展開を行う宿泊予約サイトにも登録している。ゲストから、Ｇ氏が大切に管理する庭、ほぼ 100%自家製の朝食、周辺の山並みの形に切ったベッ

ドボードなど工夫がされている部屋など、満足の声が上がるたびに自分に自信が生まれ、もっと勉強してアグリツーリズモを運営しようという気持ちになるのだと言う。G氏は、今後はアグリツーリズモの応用的講習に参加してガーデニングの勉強をする予定である。

農村女性がアグリツーリズモ運営への教育ネットワークへ所属する当初の目的は運営知識の習得だが、所属するとアグリツーリズモ運営に奮闘する自分と似た境遇の女性が集落外に多数存在することを知り、刺激を受けることになる。また、農村女性のかつての生活が家庭中心で、集落外の人々との接点を多く持たなかったことを考えると、アグリツーリズモ運営のための教育ネットワークへの所属は農村女性に新しい世界を提供する。こうした他地域の農村女性からの刺激や、新しい世界との出会いは、農村女性個人のエンパワーメントに繋がる。このエンパワーメントがきっかけとなり、次第に農村女性はアグリツーリズモ運営者の繋がりを重視するようになり、アグリツーリズモ運営者同士のネットワークへ組み込まれていく。アグリツーリズモ運営のための教育を重視する農村女性は学びに積極的であり、その後も継続的にアグリツーリズモ運営に関する教育を受けネットワークへの関与を強めるため、結果としてアグリツーリズモ運営者同士のネットワークへの関与も強まる。こうして双方のネットワークにはエンパワーメントを介して強い繋がりが生まれる。アグリツーリズモ⑦では、アグリツーリズモ運営のための教育を契機に農産物加工品ネットワークや次世代教育ネットワークへの関与が進んだが、これは農村女性が家内で農産物加工を行っていた経験を活かすと言う内生性が影響している。

つまりアグリツーリズモ運営のための教育を契機としたネットワークの広がりは、運営者同士や趣味のネットワークへエンパワーメントが、農産物加工品や次世代教育のネットワークへは内生性が影響している傾向が見られるのである。また、規模別にアグリツーリズモ運営のための教育を契機としたネットワークの広がりを見ると、集落内より県内において拡張している。アグリツーリズモ運営への教育ネットワークに所属した農村女性は視野が拡大するため、所属するネットワークには集落より県内が重視されることがわかる。

1-2-2　集落内におけるアグリツーリズモとレストランのネットワークを契機としたネットワークの拡大

集落内におけるネットワークの拡張と連鎖は、アグリツーリズモとレストランのネットワークが契機となって起こるパターンが挙げられる。具体的にサン・ジェネジオ村のアグリツーリズモ⑫の例で示す（図 5-2）。

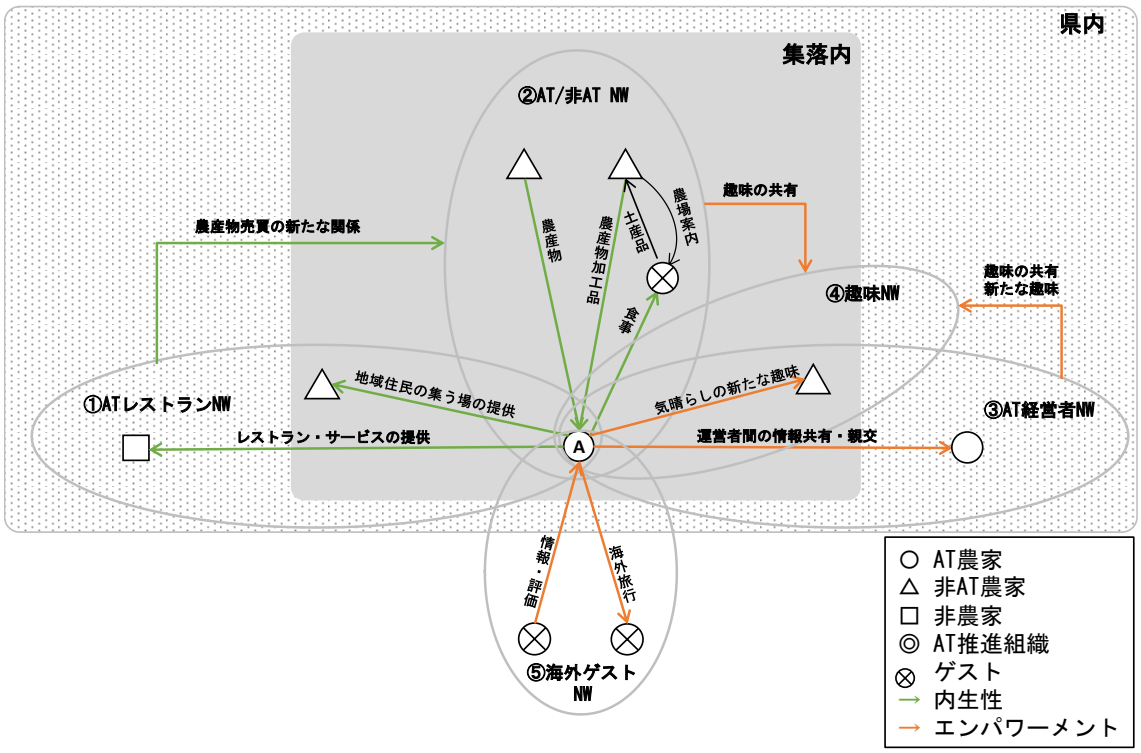

図 5-2 アグリツーリズモのレストランによる集落内ネットワークの拡張

（注）AT=アグリツーリズモ　NW=ネットワーク

アグリツーリズモの実質的経営者であるＬ氏（50 代）は、夫に提案して 1987 年にアグリツーリズモを開業した。サン・ジェネジオ村のアグリツーリズモでは最も熱心にレストラン経営を行うアグリツーリズモである。Ｌ氏は開業当初からゲストへ朝食提供のサービスを行っていたが、間もなく夕食も提供することにし、同時にアグリツーリズモのダイニングルームを一般客へも開放して、レストラン営業を開始した。もともとサン・ジェネジオ村にはレストランは少なかったことから、観光客よりも地域住民が利用するようになり、集落において住民が集う場を創出することになった。このようにしてアグリツーリズモとレストランによるネットワーク

に関与することになった（図 5-2①）。また、朝食や夕食で提供する食事は県規定により 80%以上の県産品（うち 30%の自家生産品）を使用しなければならないが、L 氏はリンゴやブドウの作物栽培農家ですべてを賄いきれないため、近隣の農家へ頼ることになった。L 氏には近郊農家にN氏（40 代）という娘の年齢が近いことで知り得た友人がおり、彼女は養蜂農家をしていたので、蜂蜜の直売を依頼した。お互いの関係性はこれまでの顔見知り程度の知人からビジネスパートナーへと変化した。こうして、アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワークが生まれた（図 5-2②）。2 人は南チロル農村女性協会のサン・ジェネジオ地域会でもよく顔を合わせることもあってさらに親交を深め、趣味のダンスを一緒に行ったり、週末に家族同士でカードゲームを行うために集まったりするようになり、趣味のネットワークが形成された（図 5-2④）。N 氏は L 氏のアグリツーリズモへ蜂蜜を販売してから、L 氏のゲストが土産品として直接ゲストが購入に訪れるようになった。N 氏にとってゲストへ直接販売するのは利益率も高く歓迎できることであった。さらに、L 氏のゲストは養蜂についての製法や農場の質問をしてきたので、N 氏は夫も誘って時折農場案内をするようになった。N 氏はアグリツーリズモを開業するつもりはないが、観光客の土産品購入や農場案内の要望には積極的に対応している。さらに、L 氏のアグリツーリズモでも、アグリツーリズモ基本講習や応用的講習には夫婦それぞれが参加しており、これによりアグリツーリズモ経営者仲間の友人を県内に多く持ち、アグリツーリズモ運営者同士のネットワークに組み込まれている（図 5-2③）。L 氏は海外旅行が好きで、海外ゲストとの交流を深め、相手の国に海外旅行をしたり、旅行先選定の情報を得たりしている。こうして、海外ゲストとのネットワークにも所属しているのである（図 5-2⑤）。その後 L 氏が経営するレストランは評判を呼び、それまで行っていなかったランチの営業を始め、その後バーの開業や、集落を超えた県内からの貸し切りパーティーの要望も入るようになった。自分のレストラン経営が上手く行ったことに自信を得た L 氏は、夫と息子に相談してレストランの改修を行い、レストランのスペースを拡大し、バーカウンターも併設して、貸し切りパーティーにも対応できるようにした。現在はランチタイムも営業を行い、L 氏はレストラン経営に更なる意欲を持っている。

アグリツーリズモ⑫はアグリツーリズモとレストランのネットワークを契機として、アグリツーリズモと非アグリツーリズモという農家間のネットワークの形成を促した。このネットワークには自家生産できない農産物を購入するという内生性が強く影響している。また、アグリツーリズモと非アグリツーリズモのネットワークで親しくなった者同士が趣味のネットワークを構築し、家族間での付き合いに広がるなど、地域コミュニティの活性化にも貢献していると言える。これは農村女性のエンパワーメントにも繋がっている。また、アグリツーリズモ⑫のレストランは集落内のローカル・ビジネスとして成功し、地域住民の集いの場を形成している。これも農村女性の調理経験という内生性が活かされている。そして、レストラン経営が軌道に乗るにつれ、農村女性のエンパワーメントも増加するのである。さらに、アグリツーリズモのレストランによるネットワークの規模別の広がりは、集落内で拡大する傾向にある。アグリツーリズモとレストランによるネットワークに強く関わる農村女性は、自分のレストランを拠点として活動するため、県内より集落内のネットワークを重視する傾向にあると言える。

2 ネットワークの拡大と農村女性の役割の変化

2-1　県内

ルーラルツーリズムに関与した農村女性が形成あるいは組み込まれたネットワークは、農村女性の活動を介して拡張や連鎖を見せており、県内ではその状況を時系列に見ることができる。ここでは県内ネットワークの広がりの過程を見ながら、農村女性がどのような役割を果たしたのか、それらの役割が統合型ルーラルツーリズムにおいてどのような特徴を示しているのかを分析する（表 5-2）。

南チロルのルーラルツーリズムの萌芽と同時期に生まれたのが農産物のメッセンジャーとしてのネットワークである。南チロルのルーラルツーリズムは 1960 年代に南チロル農民連合とカトリック教会によって紹介され（Tommasini, 2013b）、1970 年代に南チロルが自治県と国から認められた後、農家民宿の法整備が徐々に進むなかで萌芽した。1970 年代に誕生した南チロルの農家民宿は現在のアグリツーリズモとは異なり、遠地の親戚などを宿泊させるもので、国や県の法規もないままに運営されていた。

表 5-2 ネットワークにおける農村女性の役割とそれらが示す内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み

規模	ネットワーク		農村女性の役割	内生性			補完性		エンパワーメント		定着性
				地域資源の活用	人材としての潜在性	教育状況の向上	農業と観光業における経済力	農業と観光業における労働力	個人の価値観・意識の変化/誇りの増加/	集団・組織を取り巻く社会環境の変化	社会文化的背景との関わり
県内	農産メッセンジャー		・農産物の安心・安全に関する情報発信		家庭内生活経験						
県内	農産物加工品生産直売		・農産物加工品の生産 ・農産物加工品の観光客への販売	農産物生産			農産物等直売収入			女性の生産/販売の支援	♠♥
県内	地域資源の観光資源化		・農家らしい体験アクティビティの開発 ・体験アクティビティの観光客への販売	体験プログラム開発			体験アクティビティ販売収入		地域資源の再認識	体験プログラム宣伝	♠
県内	次世代の農村教育		・次世代の県内消費者の育成 ・農業後継者の育成	農場活用による教育プログラム			次世代消費者の育成・創出	次世代農業後継者の育成			♥
県内	AT運営のための教育		・アグリツーリズモ運営ノウハウの習得 ・アグリツーリズモ運営者間の交流			講習会参加			講習会参加者間の研鑽・交流		♠
県内	AT運営者同士		・アグリツーリズモ運営の情報交換 ・新たな友人の獲得・交流範囲の拡大		コミュニケーション力				AT運営者同士の交流		♠
県内	海外ゲスト		・海外の友人の獲得 ・新たな視野の広がり		コミュニケーション力		海外旅行消費		視野の広がり/評価から得る誇り		
県内	経済ネットワークの存在感		・アグリツーリズモの実質的な経営者				観光収入増加				
集落内	AT/非AT		・周辺農家からの農産物購入	近隣農家の農産物・農産物加工品			近隣農家の農産物購入		非AT農家の観光業参入意欲		
集落内	ATレストラン		・近隣住民が集う場の形成 ・レストランの実質的な経営者		家庭内の料理経験		レストラン収入		経営で得た自信/更なる意欲		
集落内	趣味		・新たな趣味の創出・趣味の定期化 ・趣味の友人・家族との共有				趣味費支出		新たな趣味で得る価値観		
集落内	AT運営者同士		・集落内のアグリツーリズモ運営者間の繋がり		コミュニケーション力				経営者の認識/視野の広がり		♠
集落内	既存観光業者		・新たな社会参画の機会の獲得							AT代表としての参加	◆
集落内	家庭内ネットワーク	経営者としての存在感	・農家における稼ぎ手としての存在感		家庭内の会計管理経験		農家収入増加				
集落内	家庭内ネットワーク	家族観の役割変化	・経営者としての存在感・家事育児の支援の獲得					家族労働力			
集落内	家庭内ネットワーク	夫婦間の役割変化	・経営者としての存在感・新たな仕事の獲得					夫の家事育児参加			
集落内	家庭内ネットワーク	子ども世代への影響	・子ども世代の価値観への影響		家庭内生活経験				地域の愛着心の増大		
集落内	農業		・アグリツーリズモ協議会への参加 （農村社会への参画機会の獲得）							アグリツーリズモ協議会	
集落内	教会		・祭・催事に使用する伝統衣装の創作意欲等への影響								✠
集落内	近隣住民		・育児家事支援における互助機能への更なる関わり					近隣住民の支援			✠

（注）○：現在示している　△：将来示すと考えられる　♠：ルーター・ハンが支援　♥：南チロル農村女性協会が支援　◆：南チロル観光協会が支援　✠：教会の影響

山間部の農村は道路が未整備で来訪の便が悪く、農家民宿といっても数は少なく、農家民宿の運営を契機としたネットワークは生まれるほどではなかった。この状況が変化するのが、1985年の国法第730号法(通称アグリツーリズモ法)を受けての県としてのアグリツーリズモ法規の整備と、同時期に起こった狂牛病や鳥インフルエンザを背景とした農作物への社会的不信感の高まりである。この農作物の社会的不信感を払拭するため、農村女性は農作物の安全性を伝える活動を行うことにより、農産物のメッセンジャーとしてのネットワークが生まれた。このネットワークの構築の背景には、南チロル農村女性協会や南チロル農民連合の組織的支援があった。農村女性は農産物の安全性を伝える活動を通して、自分達の役割を認識し、活動の実績から自信を得た。農産物メッセンジャーの活動から得られた自信は、後のルーラルツーリズムの関与において、農村女性の積極的な関わりを可能にしたと考えられる。農産物のメッセンジャーとしてのネットワークの担い手の中心は、まだ観光業に関わったことのない農村女性個人であり、彼女達の活動を支える組織として南チロル農民連合やその地域支部、傘下組織の南チロル農村女性協会が存在した。こうして農産物メッセンジャーのネットワークにおける農村女性は、これまで家庭生活を送る上で得た経験をもとにして、農産物の安全性に関する情報発信の役割を担い、また活動を通して社会参加を深めた。農産物メッセンジャーのネットワークは、女性が家内での生活経験という内生性を活かし、社会参画という個人のエンパワーメントを示すものであった。

農産物のメッセンジャーとしてのネットワークから、今度は農村女性が農産物を販売し宣伝するという一歩踏み込んだ形で、農産物加工品生産直売のネットワークと地域資源の観光化のネットワークが発生する。ネットワーク発生の背景は次のようになる。1992年に南チロルにおける自治確立へ向けた紛争が終結すると、アグリツーリズモの法整備が進んだ。1996年から南チロルとしてのアグリツーリズモの制度設計がなされ、施設やサービスの基準が明確化され、1999年にはアグリツーリズモを含む南チロルのルーラルツーリズム全体を推進する組織として、南チロル農民連合傘下にルーター・ハンが設立された。アグリ

ツーリズモの広報や予約はルーター・ハンが担うとしたことから、多くの農家でアグリツーリズモ開業に弾みがついた。アグリツーリズモが開業し、ゲストを受け入れるようになると、ゲストから農産物や農産物加工品を土産品として購入する要望が生まれてきて、これに対応すべく農村女性らはジャム、果実飲料、チーズなどの農産物加工品を生産するようになっていった。当初は農村女性が自宅用に生産していたものを、観光客向けに作るようになったため、その担い手は農村女性が主体となった。農産物加工品を自宅用から販売用に品質を向上させる必要があるため、生産方法や販売方法についてルーター・ハンがセミナーを開催して支援した。こうして農村女性中心に農産物加工品生産直売のネットワークが誕生していったのである。このネットワークの担い手の中心は、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性のみでなく、アグリツーリズモの開業を行っていない農家の女性も含まれ、またその活動を支援する組織としてルーター・ハンも組み込まれた。こうして農産物加工品生産直売ネットワークを形成した農村女性は、それまで家庭用にジャムや果実飲料などを生産した経験を生かして、農産物加工品の生産と観光客へ直売を行い、また観光資源の一部と言える土産品を創出する役割を担った。この農産物加工品生産直売ネットワークは、自宅用の農産物加工品を生産するという内生性と、それにより新たな経済手段を得るという補完性を示している。

こうしてアグリツーリズモ農家が、ゲストが農産物加工品に土産品としての価値を感じることを認識したことで、農産物の育成方法や農産物加工品の製造工程にも観光資源としての価値があると考え、自宅周辺にある多様な資源を活用して観光客向けの体験プログラムを構築していった。これは県のアグリツーリズモ規定に、農家らしい体験プログラムをゲストに提供していることを奨励していることも影響した。体験プログラムは乗馬やハイキングなどのスポーツ・アクティビティと、料理や庭の案内などアグリツーリズモ施設を中心としたアクティビティがあったが、後者のアグリツーリズモ施設を中心とするアクティビティの多くは農村女性がゲストの対応を行った。こうして地域資源の観光化によるネットワークが生まれ、その中心的な担い手はアグリツーリズモ運営に

関わる農村女性個人となったが、次第にアグリツーリズモ運営は行わないが体験プログラムのみ提供する農家も現れ、観光業に関わらない農家も含まれることとなった。さらに、地域資源の観光化によるネットワークには体験プログラムを宣伝する組織として南チロル農村女性協会が、観光客へ体験プログラムを直接紹介する組織として南チロル観光局が生まれた。こうして、地域資源の観光資源化ネットワークにおける農村女性は、それまでの伝統的生活で養った庭の管理や小型家畜の飼育、また伝統料理の調理経験などを活かして、農家らしい体験プログラムの開発や販売を行う役割を担った。

地域資源の観光化によるネットワークは、後に次世代教育ネットワークを生み出した。農村女性により生み出された体験プログラムは、農村女性協会が「私達の手から」というブランドを構築して体験プログラムをまとめて冊子化とウェブサイト化し、ルーター・ハンや南チロル観光局と情報共有をするようになった。そこで南チロル農村女性協会は体験プログラムの冊子化と同時に、次世代教育および次世代消費者の創出を目的に、県内小学校向けの農村教育プログラムである「農場の学校」を掲載し、受け入れ先の農村女性を多数紹介した。こうして地域資源を観光資源化するネットワークと同時に、次世代教育ネットワークが誕生したのである。このネットワークはアグリツーリズモの運営の有無に関わらず、農村女性個人およびその家族が中心であり、プログラムの紹介役の組織として南チロル農村女性協会、プログラムの導入先として南チロル県内の学校が含まれている。こうして次世代の農村教育ネットワークを形成した農村女性は、次世代の県内消費者の育成や農業後継者の育成の役割を担うだけでなく、担い手を農村女性から男性や親世代、次世代などへ拡大する役割を担った。地域資源の観光化によるネットワークは、地域資源の活用という内生性と、新たな経済手段としての補完性を示している。

その後、形成されたのは、アグリツーリズモ運営への教育によるネットワークとアグリツーリズモ運営者同士のネットワークである。アグリツーリズモ開業においては、県法の定めでアグリツーリズモ基礎講習を受講することが義務付けられ、その後、より発展的な講習を任意で受講することが可能となった。こ

のアグリツーリズモ運営のための教育機会は、運営者同士のネットワークを構築する契機になったと言える。基礎講習が 3 ヶ月間と長く、1 日当たりの拘束時間も長いため、アグリツーリズモ運営の基本的知識のみならず、参加者同士の親睦が生まれる。さらに、参加者の多くはこれからアグリツーリズモを開業する初心者であり知識も少なく不安も多いと思われる。こうした状況を最初に共有するのがアグリツーリズモ運営への教育によるネットワークなのであった。アグリツーリズモ運営への教育ネットワークでは、初期のアグリツーリズモ運営に関わる者を中心に、運営の疑問点やアイデアの共有などがなされていった。そして、このネットワークの中心的な担い手は、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性であった。こうしてアグリツーリズモ運営のための教育ネットワークにおける農村女性は、アグリツーリズモ運営ノウハウの習得やアグリツーリズモ運営者間の交流の役割を担った。アグリツーリズモ運営のための教育ネットワークは、教育や職業訓練を向上させるという内生性と、知識や技術の習得による個人エンパワーメントを示している。

そして、アグリツーリズモ運営への教育によるネットワークは、継続的なアグリツーリズモ運営者同士の関わりを生み出し、アグリツーリズモ運営者同士のネットワークを生み出した。アグリツーリズモを開業した農村女性同士がお互いのアグリツーリズモを訪ねて運営の問題を共有するのみでなく、新たな友人として互いの趣味を共有するなど、農村女性の交流の範囲が拡大するきっかけにもなっていった。このアグリツーリズモ運営者同士のネットワークの中心的な担い手は、アグリツーリズモ運営への教育によるネットワーク同様、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性個人であった。こうして、アグリツーリズモ運営を行う農村女性はアグリツーリズモ運営者同士のネットワークを形成し、アグリツーリズモ運営の情報交換を行い、新たな友人を得て交流範囲を拡大させた。アグリツーリズモ運営者同士のネットワークは、他地域の運営者との購交流による個人のエンパワーメントを示していると考えられる。

また、アグリツーリズモを運営する女性のなかには、海外ゲストとの関係性を深め、海外ゲストとのネットワークを構築する者もいた。海外ゲストとのネ

ットワークにおける農村女性は、海外の友人を獲得することで新たな視野の広がりを得たと言える。また、南チロルにおける既存の経済ネットワークにおいて、農村女性らはアグリツーリズモの実質的な経営者として存在感を高めることにもなっていった。海外ゲストとのネットワークは、農村女性の視野の拡大に繋がり、個人のエンパワーメントを示すのみでなく、アグリツーリズモで得た収益で海外旅行にでかけるという経済的な補完性も示している。

2-2 集落内

ルーラルツーリズムに関与した農村女性が形成し、組み込まれたネットワークは、集落内においても広がりをある程度時系列に見ることができる。こうした集落内ネットワークの広がりを見ながら、農村女性がどのような役割を果たし、統合型ルーラルツーリズムにおけるどのような特徴を示したのか考察したい。

アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワークは、アグリツーリズモ農家がゲストに提供する食事において地域産品として足りない食材を調達するために非アグリツーリズモ農家を頼ることに始まった。非アグリツーリズモ農家は、農作物や農作物加工品をコーポラティブを経由せずにアグリツーリズモへ直接販売できるようになるという利点から、集落においても近隣農家の規模で広がった。アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワークにおける中心的な担い手は、アグリツーリズモで食事を提供する農村女性個人と、非アグリツーリズモ農家の女性個人であり、彼女らの間柄は友人、知人、隣人などもともと馴染みの関係でもあった。こうして、アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワークにおける農村女性は、周辺農家からの農産物購入の役割を担う。

次にアグリツーリズモとレストランによるネットワークは、アグリツーリズモがゲスト向けに始めたレストランを一般客にも営業することで、近隣住民がレストランに集まるようになって生まれたネットワークである。南チロルの農村の多くは山間部に位置しており、もともとレストランは少なかった。こうし

たことからアグリツーリズモに併設されたレストランは、ゲストのみでなく近隣住民の需要も生んだ。アグリツーリズモとレストランによるネットワークの中心的な担い手は、アグリツーリズモを経営し料理を作る農村女性個人であり、ここに集う近隣の農家や非農家である。こうして、アグリツーリズモとレストランのネットワークにおける農村女性は、近隣住民が集う場を形成し、またレストランの実質的な経営者としての役割を担った。

アグリツーリズモ運営者同士のネットワークは、県内でも存在したが、集落内でも存在している。アグリツーリズモ農家の実質的経営者である農村女性同士が、集落内で気軽に互いに行き来しながら経営の問題や課題を共有したり、アイデアを出し合ったりすることから生まれた。このアグリツーリズモ運営者同士のネットワークの担い手は、当然ながらアグリツーリズモの実質的経営を任されている女性達である。なお、集落内にはすでに既存観光業者のネットワークが、アグリツーリズモが登場する前からあり、ホテルやレストランといった業種の代表者で構成されていた。そこに、アグリツーリズモ農家の実質経営者が加わることになり、農村女性が組み込まれることになった。こうして、アグリツーリズモ運営者同士のネットワークでは、集落内のアグリツーリズモ運営者間をつなげる役割を担い、既存観光業者のネットワークの農村女性が、新たな社会参画の機会を獲得した。

アグリツーリズモ運営者同士のネットワークは、集落内においては趣味も共有することになり、趣味のネットワークに広がっていった。趣味のネットワークは、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性が、健康増進やストレス発散を目的にこれまでの趣味を定期化したり新たな趣味を開始したりしたことから発生する。このネットワークの中心的な担い手はアグリツーリズモの実質的経営者の農村女性であるが、彼女らが趣味を行う上では周囲の友人、隣人、家族を巻き込んでいったことが想像されるのである。こうして趣味のネットワークにおける農村女性は、新たな趣味の創出や趣味の定期化を行い、趣味を友人や家族と共有する役割を担う。

家庭内ネットワークは農家単体を対象にしており、これまでに述べてきたネットワークとは規模が小さく、担い手も家族に限られていることから、ネットワークと言っても特異な扱いになる。アグリツーリズモ運営において、実質的経営者が女性となることで、これまで家事や育児を中心的に担ってきた女性の役割が変化し、それに伴い家族の過ごし方や考え方へ変化を与えた。まず、家族間の役割分担について、夫は家事や育児を手伝い、同居する家族も成人に近い子ども世代や母親らが同様に支援を行うようになった。次に、夫婦間の過ごし方が、妻のアグリツーリズモに関与する時間が増加し、ゲストの予約対応などのデスクワークなどを増加させるとともに、夫においては家事などの時間に加えアグリツーリズモの改修などの時間が増加するという変化が見られた。さらに、次世代への影響も現れた。アグリツーリズモ経営の中で育った子どもは、親のアグリツーリズモで働く姿やゲストとの交流を通して、改めて自分の家に対する誇りに目覚め、将来への考え方にも影響を与えるといったことも起きていた。こうして家庭内ネットワークにおける農村女性は、経営者としての存在感から農家における稼ぎ手としての存在感を増した。また、経営者としての存在感によって、家族間の役割が変化し、家事育児の支援を獲得した。そして、夫婦間の業務分担も変化した。これも経営者としての存在感によるもので、経営を通して仕事の幅が増えた。さらに、子ども世代への影響もあり、アグリツーリズモで働く農村女性を見て子ども世代の価値観が変化した。

アグリツーリズモ運営による新たなネットワークは、集落内にあった農業ネットワーク、教会ネットワーク、近隣住民ネットワークといった既存のネットワークへ影響を与えた。農業ネットワークは、農業における共同作業のあり方を話し合うための集落内に存在した古いネットワークであるが、農村における様々な問題を話し合う協議の場としても機能していた。協議の中心は農業の中心であった男性であったので、妻である女性達は婦人会を非公式に形成して情報を共有した。アグリーリズモが集落に登場すると、婦人会のなかにはアグリツーリズモ運営者も混ざるようになり、自然とアグリツーリズモ関係者との結び付きを生むようになった。こうした農業ネットワークは、それまでの農業の

担い手中心のネットワークから、観光業の担い手も自然と含むようになっていった。こうして、農業ネットワークにおける農村女性は、アグリツーリズモ協議会への参加という農村社会への参画機会を獲得した。

一方、教会ネットワークは、熱心なカトリック信者の多い南チロルでは、歴史的にもっとも古く権威あるネットワークであったと言える。集落の祭りや儀式は教会中心に行われていたし、住民は毎週日曜に教会に集まり礼拝を行っていた。アグリツーリズモの登場以前の小さな農村の多くは観光化されておらず、教会は集落の住民のための閉鎖的なネットワークだった。しかしながら、アグリツーリズモが登場し、農村に観光客が訪れるようになると、変化が起こった。教会で行われる祭事では華やかな伝統衣装を着た住民が集まることもしばしばで、その光景は南チロルの農村の伝統文化を象徴するものとして一部の観光客を魅了した。集落の住民も、南チロルの歴史を発信する契機と捉えて、観光客に対して比較的寛容な態度を見せた。教会ネットワークの構成メンバーはカトリック教会関係者と集落の住民であることには違いないが、観光客の視線を意識するようになってきていると推察される。このように、アグリツーリズモの登場は伝統的なネットワークにも影響を及ぼした。農村女性は、祭、催事に使用する伝統衣装をこれまで以上に丁寧に制作するなど、意欲的に教会ネットワークに関わるようになった。

また近隣住民ネットワークとの結び付きも生まれた。アグリツーリズモを運営する農家では女性が多忙になり、家事育児にかける時間が減っており、その分近隣住民に子どもの送迎を依頼するなど、これまでの互助的機能に頼らざるを得ない環境に置かれたためであった。近隣住民ネットワークは、集落内のより狭い居住エリアという規模における、アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家、非農家が中心的なメンバーであった。こうして近隣住民ネットワークでは、育児家事支援における互助機能への更なる関わりが見られた。

このようにして農村女性は、集落内ネットワークの広がりや拡張において大きな関与を果たすとともに、ネットワークにおいて多様かつ中心的な役割を担った。

3 ルーラルツーリズムの内生性、補完性、エンパワーメント

これまで述べた通り、農村女性はルーラルツーリズムに関与することで新たな役割を果たし、県内と集落内という規模別に多様なネットワークを形成し、組み込まれてきた。統合型ルーラルツーリズムの概念を提唱した Saxena & Ilbery（2008）は統合型ルーラルツーリズムを「社会的・文化的・経済的・環境的な資源の間に強力なネットワークをもたらす」と述べ、ネットワークの重要性を強調した。Saxena & Ilbery（2008）の概念を受けて、Barcus（2013）は統合型ルーラルツーリズムの 7 つの特徴を明示し、ネットワークを最も重要な特徴とした。このネットワークという特徴については、南チロルにおける農村女性がルーラルツーリズムへの関与を通して複数のネットワークの形成し、組み込まれ、ネットワーク間の結び付きにも重要な役割を果たしたことを述べた通り、特徴を十分に説明できたと考える。そこで次に、農村女性がルーラルツーリズムを通して新たな役割を得て、ネットワークの形成や組み込みがなされるなか、統合型ルーラルツーリズムの内生性、補完性、エンパワーメントをどのように示したのかについて考察する。

図 5-3 は県内、集落内において農村女性が形成あるいは組み込まれたネットワークの広がりの様子と、ネットワークが示す内生性、エンパワーメント、補完性、埋め込みを図示している。まず、ネットワークの広がりの様子を規模別に分析する。ネットワークの広がりを見ると、県内におけるネットワークは、1980 年代後半から 2000 年代にかけて、新規の組織支援型ネットワークが農業的な領域から観光業的な領域へ広がり、2010 年代になって新規の自発型ネットワークが観光業的な領域に広がった。県内のネットワークは、南チロル農民連合などの農業組織が農業維持を目的に、アグリツーリズモという補完的位置付けの観光産業の導入を支援した経緯から、農村女性が関わるようになったという背景があった。一方、集落内では、新規の自発型のネットワークが 1990 年代後半以降に農業的領域と観光業的領域の双方でほぼ同時期に形成され、互いに強い結び付きを持つ一方、1980 年代から存在していた既存のネットワークとの関係性も深めていった。

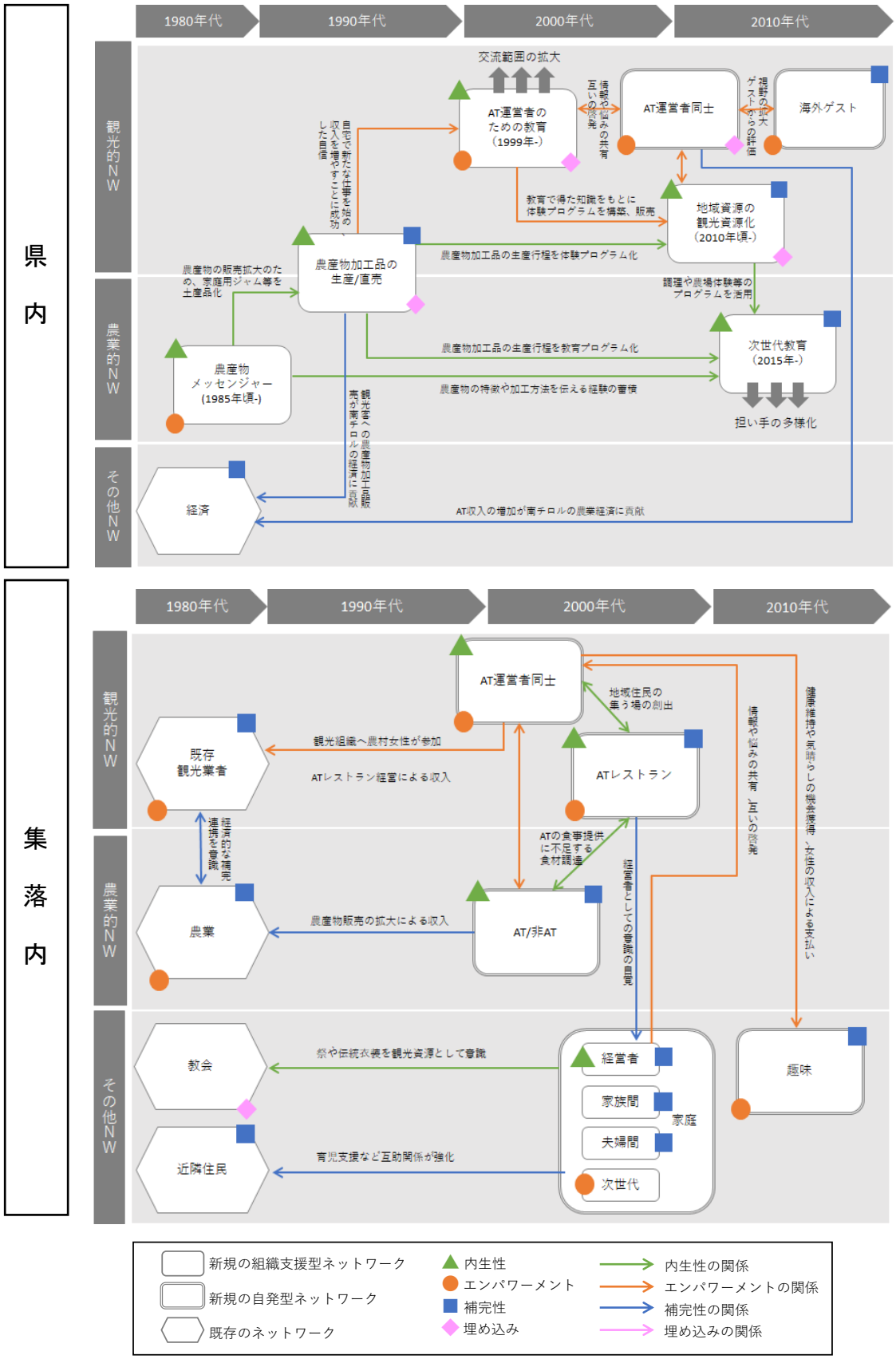

図 5-3　ネットワークが示す内生性、エンパワーメント、補完性、埋め込み

集落内ネットワークは、農村女性が県内のアグリツーリズモ促進の動きに連動しながらアグリツーリズモを開業し、その後アグリツーリズモ内にレストランを開業したり、非アグリツーリズモ農家と農産物売買の関係を構築したりするようになったという背景がある。

次に、ネットワークが示す内生性、補完性、エンパワーメントについてである。県内では農業的ネットワークが農村女性の内生性を示す一方、観光業ネットワークにおいてはエンパワーメントを示す傾向がある。Barcus（2013）は内生性を、農村女性における「地域資源の活用方法」、「人材としての潜在性」、「教育の状況」とした。「地域資源の活用方法」という点では、農村女性がこれまで生活してきた身の回りにある料理、植栽、庭、家庭用菜園、家屋内外の伝統的装飾、といった地域資源の活用であり、農産物加工品生産直売ネットワークやその影響を受け形成に至った地域資源の観光資源化ネットワーク、次世代教育ネットワークが示している。これらは農村女性が過去に「家内的」な生活にあったからこそ形成されたネットワークであり、そうした意味で農村女性には「人材としての潜在性」があったと言える。また南チロル農民連合傘下のルーター・ハンによるアグリツーリズモ経営のための教育プログラムは、農村女性の「教育の状況」を好転させることとなり、「人材の潜在性」をより引き出すことになったと考えられる。このように、ルーラルツーリズムにおける農村女性の分析においては、内生性が強く示されることがわかる。内生性は農業的なネットワーク全般で示され、農業的なネットワークは観光業的なネットワークに広がりを見せ、観光業的なネットワークにおいてはエンパワーメントが示されている。すなわち内生性とエンパワーメントは強い繋がりがあると考えられる。

Barcus（2013）は、エンパワーメントを個人と組織における「意識、価値観の変化」、「誇りの増加」とした。アグリツーリズモ運営のための教育ネットワークでは、ネットワークの形成過程で農村女性が教育を受けて自身の知識や技術が向上し、それをアグリツーリズモ運営に反映できる喜びを得ている農村女性の様子が見られた。また、アグリツーリズモ運営者ネットワークでは実質経営者同士の問題や課題の共有を経て、再びアグリツーリズモ経営を前向きに行お

うとする農村女性も存在した。こうしたネットワークは農村女性の「意識、価値観」を変化させ、自信への「誇りの増加」を示していると考えられるのである。また、アグリツーリズモ運営に関与する農村女性へのアンケート結果からは、「成し遂げたことへの誇りが増した」、「自己実現の機会が増した」、「経営技術が向上した」といったエンパワーメント拡大に関連する項目において「そう思う」「ややそう思う」の合計が 8 割を超える高い結果となったことからも、アグリツーリズモ運営に関与した農村女性のエンパワーメントは増大したと考えられるのである。また集落における既存の農業ネットワークへの組み込みは、これまで男性中心だったネットワークへ参加するという意味で社会参画の拡大でもあり、さらに海外ゲストとのネットワークも新たな交流による視野の拡大という意味で、エンパワーメントに関連していると考えられる。このように農村女性のネットワークにおいては、農業的な領域のネットワークからは内生性が、観光業的なネットワークからエンパワーメントが示され、またこの内生性とエンパワーメントには相互に影響し合うことがわかる。

図 5-3 によると、補完性は集落内のネットワークにおいて主に 2000 年代以降に顕著に示されている。Barcus（2013）は、補完性を「農業と労働」における経済力と労働力に分けている。まず、経済力であるが、南チロルでアグリツーリズモ経営を行う農村女性の大半が実質的経営者で、かつ農家収入における観光収入の割合が高いという事実から、農村女性がアグリツーリズモ経営に積極的に関与していることがわかる。また、観光客へ土産品として農産物加工品の販売も行うことで、農村女性の県内に経済的な存在感は高いと考えられる。さらに、アグリツーリズモ経営を行う農村女性は、アグリツーリズモで得た収入を新たな趣味に充て消費することもあり、消費者としての存在感も高まっている。労働力という意味では、アグリツーリズモ運営農家が食事提供に不足する農産物等を非アグリツーリズモ農家から購入したり、農村女性がアグリツーリズモ経営で多忙になった分、家族が育児や家事を支援したり、近隣住民ネットワークにより頼るようになったりするという点で、労働力の補完性が見られるのである。このように南チロルの農村女性はルーラルツーリズムへの関与を通して、

補完性という特徴も十分に示している。

これまで農村女性の活動が統合型ルーラルツーリズムの特徴をいかに示しているか南チロルを例に述べてきたが、これらの特徴における関係について指摘しておく。まず、内生性という特徴は、統合型ルーラルツーリズムにおいて農村女性を分析対象にする場合、強い特徴として示される。また、内生性を示す活動を行う農村女性ほど、複数のネットワークに関与しているとも言える。例えば、アグリツーリズモ経営においてレストランを運営し、農産物加工品を生産して販売し、体験プログラムを開発して販売すれば、それだけの数のネットワークに参加するようになり、ネットワーク間の結び付け役にも至る場合がある。農村女性の活動により形成されたネットワークの多くは、組織的なピラミッド構造ではなく、ネットワーク内で個人や組織が平面的に繋がる構造で、積極的に活動する農村女性がネットワークの長になることは見られないが、ネットワーク内での発言権などを強めていることが推察される。さらに、内生性という特徴は、エンパワーメントとも深い関わりがあると言える。これは内生性が示されれば、エンパワーメントも同様に示し、またその逆もあると考えられる。例えば、アグリツーリズモ教育を受けるほどに経営に対して積極的になり、アグリツーリズモ経営に関わる農村女性同士で悩みを共有すれば、再度地域資源を見直して新しい体験プログラムを構築してみよう、ということが起こる。したがって、統合型ルーラルツーリズムを農村女性の視点で見ていく場合は内生性が強い特徴として現れ、内生性はネットワークやエンパワーメントという特徴とも深い関わりを持つと考えられる。

4 ルーラルツーリズムの埋め込み、持続性

農村女性のルーラルツーリズムへの関与を通して、統合型ルーラルツーリズムの特徴を見ていく場合、埋め込みと持続性はこれまで述べてきた 5 つの特徴とは扱いが異なってくると考えられる。つまり、埋め込みと持続性はこれまでの 5 つの特徴すべてが総じて示された上で、全体を通して述べられる特徴であると考えられるためである。埋め込みについて著者は Barcus（2013）の記述を

参考に分析軸を、南チロルとの「社会・文化的背景との関わり」とした。まず、県内のネットワークで見ると、農村女性がアグリツーリズモ運営に関わる上で形成した農産物メッセンジャーと地域資源の観光化のネットワークには、南チロル農村女性協会が支援組織として組み込まれ、また、農産物加工品生産直売とアグリツーリズモ運営のための教育のネットワークにおいては、南チロル農民連合傘下のルーター・ハンが支援組織として組み込まれていた。これらは農村住民の生活および社会的地域の向上を目的として 1916 年に設立された南チロル農民連合を母体とする組織である。1919 年にオーストリアからイタリアになった南チロルはその後、周辺国の統治に翻弄され独立機運の高まる時期も迎えたが、その歴史の中で南チロル農民連合は、南チロルとしてのアイデンティティを持続するため農村住民が都市へ流出しないよう長い間農村住民を支援してきた。こうした経緯から南チロル農民連合は、現在でも農村住民が最も信頼する組織である。こうした組織の支援を受けてきたというのが、南チロルの農村における社会・文化的背景を形成していると言える。したがって、南チロルのルーラルツーリズムの埋め込みは、南チロルのアイデンティティを持続するための社会・文化的背景、その根本にある高い自治意識が大きく影響したと言える。こうした埋め込みの説明は、これまでのネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメントが示されないと説明できない。

また、持続性は Barcus（2013）によれば「統合型ルーラルツーリズムは持続可能な開発の概念と重なる考え方」で「正確な定義を厳密にするのではなく、問題の焦点を議論するための有用な概念」としており、それを具体的な特徴として明示するのではなく、あくまで概念として置く特徴としている。つまり、残りの 6 つの統合型ルーラルツーリズムの特徴が示されて初めて、示すことのできる特徴であると考えられる。南チロルにおけるルーラルツーリズムへの農村女性の関わりや果たした役割からは、これまでの 6 つの特徴（ネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み）を十分に示すことができたと考えており、したがって持続性においても示すことができると言える。

第 6 章　結論

南チロルのルーラルツーリズムは農村女性の活動を通して、統合型ルーラルツーリズムを形成した。農村女性はルーラルツーリズムにおいて多様なネットワークを新たに形成したり、既存のネットワークに組み込まれたりする過程で、ルーラルツーリズムの登場前には無かった新たな役割を生み出した。農村女性が新たな役割を担うことで、南チロルのルーラルツーリズムが発展しただけではなく、生業である農業、集落社会、家庭にも影響が及んだ。本研究では農村女性の役割が、統合型ルーラルツーリズムの特徴であるネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み、持続性の全てを満たし、南チロルのルーラルツーリズムが、社会的・経済的な効果を住民に十分還元するという、統合型ツーリズムであることを証明したと言える。

ここでは結論として、統合型ルーラルツーリズム形成における農村女性の役割をまとめた上で、南チロルの農村女性の分析から見えてきた統合型ルーラルツーリズムの理論上の問題点および再構築の方向性について指摘する。

1 統合型ルーラルツーリズム形成における農村女性の役割の変化

統合型ルーラルツーリズムでは、地域住民が主体となって積極的に外部と繋がりながらルーラルツーリズムを展開すること、またルーラルツーリズムによる社会的・経済的効果が地域住民に十分還元されることが重要とされている。これに対する南チロルの農村女性が貢献した内容を指摘する。

まず、地域住民が主体となって積極的に外部と繋がりながらルーラルツーリズムを展開する点について 2 点を述べることができる。第 1 に、農村女性はルーラルツーリズムへの関わりを通して、県内・集落内という規模において、多様なネットワークを形成してきた。これらのネットワークの形成・組み込みが行われる過程で、農村女性はアグリツーリズモ運営者という役割を得て、アグリ

ツーリズモ運営者同士のネットワークというルーラルツーリズムに直接関連するネットワークを形成するのみでなく、農産物加工品を観光客へ生産・直売するという役割を得て、農業に関連するネットワークを形成したり、南チロルの次世代へ農場教育を行う役割を得て、教育に関連するネットワークなどを形成したりした。このように、農村女性はルーラルツーリズムの枠を超えた役割を得て、ネットワークの形成や組み込みが行われていったと言える。そして、農村女性はネットワーク間の結び付きにおいても重要な役割を果たしたと言える。研究を開始した当初の想定では、農村女性がルーラルツーリズムの発展に強く影響したのではないかという結論を予想していたが、農村女性の活動の影響がルーラルツーリズムの枠を超えてなされたという点については、研究の過程で発見された新たな結果であり、本研究の成果の 1 つと言える。第 2 に、農村女性におけるルーラルツーリズムへの関与は、農村女性の既存の価値観や意識を変化させ、時には地域への愛着心を再認識させ、時には次世代の価値観や意識にも影響を与えたということである。とくに、アグリツーリズモ運営に関わった農村女性は、運営を通した達成感、経営技術の向上、自己実現を強く認識し、経済的自立や女性の意見が尊重される社会環境も感じるようになった。また、アグリツーリズモ運営に積極的に関わった農村女性を持つ家族においても、価値観や意識に変化が見られる場合も存在した。

次に、ルーラルツーリズムによる社会的・経済的効果が地域住民に還元された点について述べる。農村女性はルーラルツーリズムにおけるネットワークの形成・組み込みを経て、生業である農業に再度活力を与えたと言える。農村女性は観光客への土産品として農産物加工品を生産し直接販売するという役割を得て、農産物加工品生産直売ネットワークを形成した。このネットワークは農村組織の支援も得ながら、農業における観光客という新たな市場を発見し、農業にこれまで以上に活力を与えたと言える。南チロルの県としてのアグリツーリズモ規定では、観光業の発展が農業を衰退させてしまわないような配慮がなされていたが、農村女性の活動はむしろ観光業を通して農業を活性化させたとも言える。農村女性の活動がルーラルツーリズムを超えて農業の活性化に貢献し

たという点もまた、当初の予想を超えた結果であり、本研究の成果の 1 つと考えている。

最後に、地域住民の主体性と外部との繋がり、および社会的・経済的効果の地域への還元という両方の点で述べられる内容について、2 点述べることができる。第 1 に、農村女性はルーラルツーリズムの発展に大きく貢献したことである。とくに、アグリツーリズモ運営に関わった農村女性は、ネットワークの形成・組み込みを経て、実質的な経営者の役割を高めていった。経営者としての役割は、県内・集落内の双方に生まれたアグリツーリズモ運営者同士のネットワークや、アグリツーリズモ運営のための教育ネットワーク、運営者同士が新たに形成した趣味のネットワークや、家庭内ネットワークの再編などで証明された。南チロルのアグリツーリズモでは実質的な経営者の 8 割以上が農村女性であり、アグリツーリズモ運営農家の観光収入の存在感の高さからも、県内の農業経済における農村女性の存在感は非常に高く、ルーラルツーリズムの発展にも大きな貢献をしたと言える。農村女性がアグリツーリズモの実質的経営者として存在感を高めたのは、過去の農家での生活の経験を活かして地域資源を十分に活用することができたためであり、農村女性には実質的経営者としての潜在力があったことが証明されたと言える。第 2 に、農村女性のルーラルツーリズムを通した活動を支える多様なネットワークは、南チロルの自治意識の高さという社会・文化的背景が埋め込みの要になっているという点である。アグリツーリズモ運営に関わる農村女性は生活が多忙になったり、運営を通した新たな問題を抱えたり、家庭においては経済的な圧力を感じたりするようになるなど、これまでにない重圧を感じる者も現れている。しかしながら、それでもアグリツーリズモ運営にこれまで以上に積極的に関ろうとする姿勢の根本には、南チロルの農業を観光で下支えし、南チロルとしての自治と伝統文化を維持していきたいという、地域への強い誇りが存在すると考えられる。

このように、南チロルのルーラルツーリズムでは、農村女性の活動により規模別にネットワークの形成・組み込みがあり、ネットワークにより地域資源の活用や人材の潜在性の引き出しといった内生性が生まれた、そして農業と観光

業における経済的・労働的補完性が生まれた。また、農村女性においては活動を通してエンパワーメントを拡大させた。さらに、ネットワークの埋め込みにおいては、強い自治意識という社会・文化的背景が存在した。このように南チロルにおいては、農村女性の活動により、ルーラルツーリズムにおけるネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメント・埋め込みが示され、これらが総じてルーラルツーリズムを持続させることとなり、まさに農村女性の活動により統合型ルーラルツーリズムが成就するに至ったと考えられる。

2 統合型ルーラルツーリズム理論の問題点と再構築の方向性

本研究では Barcus（2013）における統合型ルーラルツーリズムの特徴を研究の枠組みに使用し、南チロルのルーラルツーリズムを分析してきたが、その過程で見えてきた理論的問題点と、理論の再構築の方向性について指摘しておきたい。本研究で農村女性を中心的な行為者として位置付けた際に指摘した通り、統合型ルーラルツーリズム理論の弱さは行為者設定の幅の広さが、最終的に統合型ルーラルツーリズムが何により形成されたのか、最終的な帰結点を見えづらくしてしまっている点にあった。従って本研究が示した通り、中心となる行為者を定め、そこから周囲の行為者を見るという視点で分析をすることが重要であると指摘できる。

また、ルーラルツーリズムの行為者には本研究のように農村女性を中心的行為者に定めることが有効であると言える。本研究でも内生性の説明に多くを割いたことからわかるように、農村女性は家庭内の生活経験や地域の文化や習慣との強い繋がりから、地域資源の活用能力が極めて高く、ルーラルツーリズムの担い手としての人材の潜在性が高いと考えられる。従って、他地域のルーラルツーリズム研究においても、農村女性を中心的行為者において分析を試みることが有効であると考えられる。

図 6-1 は南チロルの農村女性の活動を通して見た統合型ルーラルツーリズムの特徴を示している。

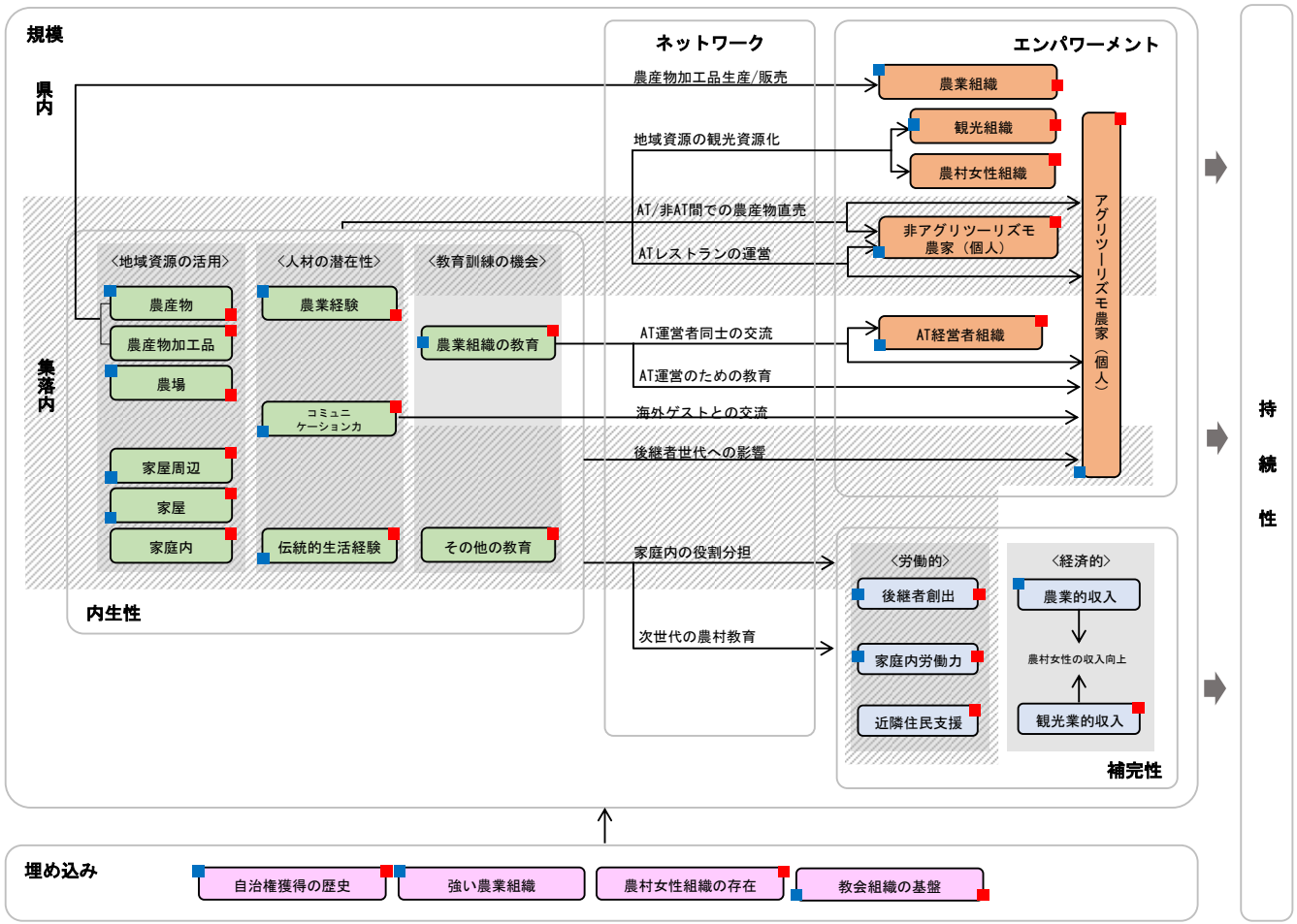

図 6-1 南チロルの農村女性の活動に見る統合型ルーラルツーリズムの特徴

■：男性の関与　■：女性の関与　（注）位置の上・中・下は関与の高さの高・中・低を示す

農村女性は、家屋やその周辺などの地域資源の活用、コミュニケーション力や伝統的生活経験、教育や職業訓練への積極的態度から多様な規模別のネットワークを形成し内生性を示してきたが、いずれもそれまで女性が家内中心の生活を送っていたからこそ示される内容であると言える。また内生性は、農村女性のエンパワーメントや補完性に大きく影響していると言える。農村女性がアグリツーリズモを介して農産物や農産物加工品の販売拡大に貢献したことは、農業組織や女性農村組織のエンパワーメントに影響し、農村女性個人も組織への参加を強めることで個人のエンパワーメントに影響した。このように内生性とエンパワーメントは強い繋がりがあると考えられる。同時に、農業収入を観光業収入で経済的に補完し、不足労働力を家庭内や地域住民から補完するなど労働的な補完性も生まれ、農村女性の内生性はエンパワーメントのみでなく補完性とも繋がりを持つ。さらに、農村女性の内生性、エンパワーメント、補完性を成立させるものが埋め込みであり、自治権獲得の歴史、強い農業組織、農村女性組織の存在といった社会・文化的背景なのである。こうして、ネットワーク、規模、内生性、エンパワーメント、補完性、埋め込みの 6 つの要素が説明できたことで、持続性を説明することができると考える。このように、農村女性を中心に統合型ルーラルツーリズムを見た場合、内生性とエンパワーメントは重要な特徴であり、それを社会・文化的背景から説明するのが埋め込みという特徴であり、この 3 つの要素は非常に重要な位置付けになると言えるのである。

農村女性を中心に据える場合の統合型ルーラルツーリズムの特徴の扱いにおいては、Barcus（2013）とは異なる考え方が必要になる。南チロルのルーラルツーリズムにおいては、農村女性の内生性が極めて高く強調される分析となった。また、農村女性は南チロルではルーラルツーリズムの担い手の中核的人材でもあり、関わりの強さからエンパワーメントには大きな影響があった。また自治権獲得という歴史と農村社会の保守性があった南チロルにおいては、その社会・文化的背景の影響も大きかったと考えられる。このように、農村女性を中心にルーラルツーリズムを考える場合、内生性、エンパワーメント、埋め込みが重要な特徴として位置付けられる。また、Barcus（2013）において、統合型ル

ーラルツーリズムの特徴のうち、持続性は総合的な概念であり、その他の特徴が示された結果として述べることができるとしていた。南チロルの農村女性においては、持続性のみでなく埋め込みもそのように考えることができる。つまり、ネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメントを示した結果、総合的に埋め込みを示すことができ、さらにその結果として持続性を示すことができると考えられる。このように、本研究では、統合型ルーラルツーリズムの特徴は、分析の対象によって示される特徴に強弱が生まれることを明確にすることができた。

最後に、本研究では南チロルの多くの農家や農村組織等に協力いただき複数の調査を実施することができたが、特にインタビューで協力的だった農家や組織というのは、アグリツーリズモ経営が成功している農家やルーラルツーリズムの推進を積極的に行っている組織であり、ルーラルツーリズムの推進に消極的な立場の農家や組織からは、積極的な調査の協力が得られていないという点があった。したがって、調査の分析結果が、ルーラルツーリズムに総じて肯定的になりがちだったと言う点は否定できない。本研究における今後の課題として、ルーラルツーリズムの推進や発展に否定的な人々や組織の意見も拾い上げ、より広い視野でルーラルツーリズムを分析していくことが重要であると考えている。

参考文献

秋津元輝・藤井和佐・澁谷美紀・大石和男・柏尾珠紀（2007）：農村ジェンダー―女性と地域への新しいまなざし．昭和堂．

石川美澄・山村高淑（2012）：北海道のコミュニティ・ベースド・ツーリズムの振興が果たす小規模宿泊施設の役割に関する実証的研究―農山漁村の民宿と都市部のゲストハウスの比較分析．平成 24 年度北海道開発協会開発調査総合研究所助成研究論文集，229–248.

市川康夫（2017）：欧米圏の農業の多面的機能をめぐる議論と研究の展開―ポスト生産主義の限界とパラダイムの構築に向けて. 人文地理, 69(1), 101–119.

宇田川妙子（1989）：イタリアの町社会における家族の社会・文化的意義―経験的概念としての familia と民族的概念としての familia. 民俗学研究，53(5), 349-373.

宇田川妙子（1997）：イタリアの「家族の絆」．市政，46(9)，24-27.

宇田川妙子（1999）：イタリアの家族論と家族概念．日伊文化研究，37，11-22.

宇田川妙子（2015）：城壁内からみるイタリア―ジェンダーを問い直す．臨川書店．

大江靖雄（2003）：農業の多面的機能と農村ツーリズム―経営展開過程の視点から．千葉大学園芸学部学術報告，57，67–77.

大澤　元（2003）：避暑地南チロル．長野県看護大学紀要，5，75–84.

大澤麻里子（2015）：南チロルのドロミテ・ラディン語の母語継承―イタリア語とドイツ語の狭間で．麗澤学際ジャーナル，23，95–114.

大友由紀子（2016）：女性のキャリア形成からみる農場経営参画を可能にする要因の解明. 科学研究費助成事業研究成果報告書（課題番号 24402031），2-6.

大友由紀子・中道仁美（2016）：欧州南部ドイツ語圏における女性農業者を対象とした職業教育・訓練制度の比較研究．十文字学園女子大学紀要，47，105–118.

大友由紀子・堤　マサエ（2012）：女性農業者のキャリア形成と世代移行―水沢地方農業担い手女性塾メンバーへのフォーカス・グループ・インタビューより．山梨国際研究，7，1–14.

大橋昭一（2010）：観光の思想と理論．文眞堂.

香川　眞　編（2007）：観光学大事典．木楽舎.

金光　淳（2018）：社会ネットワーク論. 京都マネジメント・レビュー, 32，138-142.

神谷浩夫・岡本耕平・荒井良雄・川口太郎（1990）：長野県下諏訪町における既婚女性の就業に関する時間地理学的分析．地理学評論，63，766–783.

神谷浩夫・中澤高志（2005）：女性のライフコースにみられる地域差とその要因―金沢市と横浜市の進学高校卒業生の事例．地理学評論，78(9)，560–585.

菊地俊夫（2008）：地理学におけるルーラルツーリズム研究の展開と可能性―フードツーリズムのフレームワークを援用するために．地理空間，1(1)，32–52.

喜田　宏（2004）：鳥インフルエンザウィルス．ウィルス，54（1），93-96.

小池洋男（2017）：リンゴの高密植栽培―イタリア・南チロルの多収技術と実際．農山漁村文化協会.

五艘みどり（2016a）：アグリツーリズモによる持続的農村の形成―イタリア南チロル地方ボルザーノを事例に．地域活性学会研究大会論文集，8，400–403.

五艘みどり（2016b）：統合型農村観光としてのアグリツーリズモの役割．日本観光研究学会全国大会学術論文集，31，113–116.

五艘みどり（2017）：持続的農村形成に向けたルーラルツーリズムの研究動向．立教観光学研究紀要，19，27–37.

五艘みどり（2018）：南チロルのアグリツーリズモ経営における農村女性の関わり．日本地理学会春季大会プロシーディング．

堺　憲一（1988）：近代イタリア農業の史的展開．名古屋大学出版会．

澤野久美・田畑　保（2009）：ネットワークを利用した個人経営による農村女性起業の展開過程．明治大学農学部研究報告，59(2)，31–46.

敷田麻実・八反田元子（2013）：観光による農村と都市の創造的関係の構築に関する研究― Integrated Rural Tourism によるワインツーリズムの分析から．北海道開発協会助成研究論文集，2，145–170.

島村菜津（2013）：スローシティ―世界の均質化と闘うイタリアの小さな町．光文社．

陣内秀信（2010）：イタリアの街角からスローシティを歩く．弦書房．

鈴木桂樹（2010）：イタリアにおける国家フェミニズムの展開と限界．年報政治学，2，86–105.

セレーニ, E. (1959): イタリア農業の構造的改革―イタリア農村の古いものと新しいもの．中村丈夫・植原義信訳，三一書房．

祖田　修（2000）：農学原論．岩波書店．

高梨子文恵・小林国之・高橋祥世（2012）：北海道畑作地帯における後継者妻のグループ活動の変化に関する一考察．農村生活研究，55，5-12.

竹内啓一（1965）：イタリアにおける農村集落の諸類型．経済地理学年報，11，33–47.

田中里奈・橋本禅・星野敏・清水夏樹（2014）：農村地域住民の幸福度に影響する地域的要因の質的調査による探査．農村計画学会誌，33，299–304.

田中里奈・橋本禅・星野敏・清水夏樹・九鬼康彰（2013）：居住地域の特性が住民の主観的幸福度に与える影響．農村計画学会誌，32，167–172.

田林　明（2000）：持続的農村形成におけるコミュニティ活動の役割―富山県黒部川扇状地農村の事例．筑波大学人文地理学研究，24，29–54.

田林　明（2014）：農業・農村地理学におけるフィールドワークを重視した研究の方法－持続的農村・農業の維持形態・農村空間の商品化に関する研究を例として．人文地理学研究，34，33–71.

靏　理恵子（2003）：農家女性のエンパワーメントを促進する背景とその要因．村落社会研究，9(2)，49-60.

富川久美子（2005）：ドイツ・バイエルン州南部バート・ヒンデラングにおける農家民宿の経営分析．地理学評論，78(14)，976–986.

富川久美子（2007）：ドイツの農村政策と農家民宿．農林統計協会.

中澤高志（2013）：経済地理学における生態学的認識論と 2 つの「埋め込み」．経済地理学年報，59，468-488.

中山明子（2014）：農村コムーネとネオ・シニョリーア―13～14 世紀シエナの都市－農村関係の実態・その理解に向けて．大阪音楽大学研究紀要，52，55–73.

西川明子（2005）：欧州連合（ＥＵ）の農村振興政策―LEADER 事業．レファレンス 53(8)，53-65.

仁平章子（2014）：ヨーロッパ農業の男女共同参画視察報告―南チロル農村女性連盟の活動．四條畷学園短期大学紀要，47，20–25.

橋本　芳（2012）：中山間地域に居住する高齢者の主観的幸福感．農村生活研究，56(1)，38–45.

原　珠里・大内雅利（2012）：農村社会を組みかえる女性たち―ジェンダー関係の変革に向けて．農山漁村文化協会.

原　珠里・西山未真（2015）：女性農業経営主の就農経緯と経営の特徴に関する試論．農村研究，120，1–14.

平澤明彦（2005）：CAP 改革の施策と要因の変遷．農林金融，5，2-19.

ファビアーニ, G. (1985): 戦後イタリア農業の発展と危機. 富山和夫・堺憲一訳，農政調査委員会.

ポランニー，K.（2003）：経済の文明史．玉野井芳郎・平野健一郎編訳，筑摩書房.

前田　勇　編（1998）：現代観光学キーワード事典．学文社．

増谷英樹・古田善文（2011）：オーストリアの歴史．河出書房新社．

増田寛也（2014）：地方消滅．中公新書

松永安光・徳田光弘（2007）：地域づくりの新潮流―スローシティ・アグリツーリズモ・ネットワーク．彰国社．

水野真彦（2007）：経済地理学における社会ネットワーク論の意義と展開方向―知識に関する議論を中心に．地理学評論，80(8)，481-498.

溝尾良隆（2003）：観光学―基本と実践．古院書院．

山川和彦（2002）：南チロルにおける地名論争―言語権および地域特性からの考察．獨逸文學，108，34–44.

山川和彦・鈴木珠美（2010）：南チロルにおけるドイツ語系住民の集団的アイデンティティに関する一考察．麗澤大学紀要，91，171–198.

吉田国光（2015）：農地管理と村落社会―社会ネットワーク分析からのアプローチ．世界思想社．

渡辺　深（2015）：「埋め込み」概念と組織．組織科学，49（2），29-39.

渡辺めぐみ（2009）：農業労働とジェンダー ―生きがいの戦略．有信堂高文社．

Asciuto, A., Franco, C. P. and Schimmenti, E. (2012): Sustainable tourism in the rural areas of a Southern Italian region. *International Journal of Management Cases*, 14(4): 51–59.

ASTAT (2018): *ASTAT ONLINE*. https://astat.provincia.bz.it/it/rilevazioni-online.asp. Istituto provinciale di statistica Bozen Südtirol. (December 2018)

Autonome Provinz Bozen Südtirol (2010): *Landwirtschaftszählung*. Autonome Provinz Bozen Südtirol.

Autonome Provinz Bozen Südtirol (2004): *Programma di Sviluppo Rurale 2014-2020*. Autonome Provinz Bozen Südtirol.

Autonome Provinz Bozen Südtirol (2017): *Statistisches Jahrbuch für Südtirol*. Autonome Provinz Bozen Südtirol.

Autonome Provinz Bozen Südtirol (2018): *Geobrowser*. http://gis2.provinz.bz.it/geobrowser/?project=geobrowser_pro&view=landbrowser_atlas-b&locale=it. Autonome Provinz Bozen Südtirol. (December, 2018)

Banfield, E. C. (1958): *The Moral of a Backward Society.* Free Press.

Barcus, H. (2013): Sustainable development or integrated rural tourism? Considering the overlap in rural development strategies. *Journal of Rural and Community Development*, 8(3): 127–143.

Betta, P. and Amenta, C. (2012): Environmental quality and entrepreneurial activity in rural tourism in Italy. *Journal of Management and Sustainability*, 3(1): 33–44.

Borzaga, C., Depedri, S. and Bodini, R. (2010): Co-operatives: The Italian Experience. *Euricse*, 6(10): 1-12.

Bramwell, B. and Lane, B. (2000): *Tourism collaboration and partnerships : Politics, practice and sustainability*. Channel View Publications.

Bramwell, B. and Lane, B. (2014): *Tourism governance : Critical perspectives on governance and sustainability*. Routledge.

Brereton, F., Bullock, C., Clinch, J. P. and Scott, M. (2011): Rural change and individual well-being: The case of Ireland and rural quality of life. *European Urban and Regional Studies*, 18(2): 203–227.

Brida, J. G., Meleddub, M. and Pulinac, M. (2012): Understanding urban tourism attractiveness: The case of the archaeological Otzi Museum in Bolzano. *Journal of Travel Research*, 51(6): 730–741.

Brida, J. G., Osti, L. and Faccioli, M (2011): Residents' perception and attitudes towards tourism impacts: A case study of the small rural community of Folgaria. *Benchmarking: An International Journal*, 18(3): 359–385.

Briedenhann, J. and Wickens, E. (2004). Tourism routes as a tool for the economic development of rural areas: Vibrant hope or impossible dream? *Tourism Management*, 25(1): 71–79.

Butler, R. W. (1999): Sustainable tourism: A state of the art review. *Tourism Geographies*, 1(1): 7–25.

Business Location Südtirol (2015): *South Tyrol : Food technology*. Business Location Südtirol. Business Location Südtirol.

Business Location Südtirol (2019): *South Tyrol: The economy*. http://development.idm-suedtirol.com/ (February 2019)

Cánoves, G., Villarino, M., Priestley, G. K. and Blanco, A. (2004): Rural tourism in Spain: An analysis of recent evolution. *Geoforum,* 35: 755–769.

Cawley, M. and Gillmor, D. A. (2008): Integrated rural tourism: Concepts and Practice. *Annals of Tourism Research*, 35(2): 316–337.

Chuang, S. T. (2010): Rural Tourism: Perspectives from social exchange theory. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, 38(700): 1313–1322.

Ciervo, M. (2013): Agritourism in Italy and the local impact referring to Itria Valley: The organic firm "Raggio Verde" and its ecological agritourism project. *European Countryside*, 5(4): 322–338.

Clark, G. and Chabrel, M. (2007): Measuring Integrated Rural Tourism. *Tourism Geographies*, 9(4): 371–386.

Contini, C., Scarpellini, P. and Polidori, R. (2012): Agri tourism and rural development: the Low Valdelsa case, Italy. *Tourism Review*, 64(4): 27–36.

Counihan, C. M. (1988): Female identity: Food and power in contemporary Florence. *Anthropological Quaterly*, 61(2): 51-62.

Counihan, C. M. (2004): *Around the tuscan table: Food, family, and gender in twentieth century Florence*. Routledge.

DeMeyer, J. (2013): Apple-producing family farms in South Tyrol. *Solinsa Show Case Report*, project number 266306.

Donner, M., Horlings, L., Fort, F. and Vellema, S. (2016): *Place branding, embeddedness and endogenous rural development: Four European cases*. Macmillan Publishers Ltd.

Dorobantu, M. R. and Nistoreanu, P. (2012): Rural tourism and ecotourism: The main priorities in sustainable development orientations of rural local communities in Romania. *Economy Transdisciplinarity Cognition*, 15(1): 3–10.

Evans, R. H. and Rizzi, F. (1978): Local autonomies, regional governments and metropolitan areas in Italy. *Journal of Chemical Information and Modeling*, 40(1): 58–76.

Fleischer, A. and Felsenstein, D. (2000): Support for rural tourism. *Annals of Tourism Research*, 27(4): 1007–1024.

Fleischer, A. and Tchetchik, A. (2005): Does rural tourism benefit from agriculture? *Tourism Management*, 26(4): 493–501.

Forbord, M., Schermer, M. and Grießmair, K. (2012): Stability and variety ? Products, organization and institutionalization in farm tourism. *Tourism Management*, 33(4): 895–909.

Garau, C. (2015): Perspectives on cultural and sustainable rural tourism in a smart region: The case study of Marmilla in Sardinia. *Sustainability*, 7(6): 6412–6434.

Garrod, B., Wornell, R. and Youell, R. (2006): Re-conceptualising rural resources as countryside capital: The case of rural tourism. *Journal of Rural Studies*, 22(1): 117–128.

Gartner, W. C. (2004): Rural tourism development in the USA. *International Journal of Tourism Research*, 6: 151–164.

Go, F. M., Trunfio, M. and Della Lucia, M. (2013): Social capital and governance for sustainable rural development. *Studies in Agricultural Economics*, 115(2): 104–110.

Gorfer, A. and Faganello, F. (2008): *Gli eredi della solitudine : Viaggio nei masi di montagna del Tirolo del sud Copertina flessibile*. Cierre Edizioni.

Goso, M. (2018): The Changes of Farmer Women's Role through Managing Agriturismo in South Tyrol, Italy. *International Geographical Union Regional Conference 2018 in Quebec Proceeding*.

Goulding, R., Horan, E. and Tozzi, L. (2014): The importance of sustainable tourism in reversing the trend in the economic downturn and population decline of rural communities. *PASOS (Revista de Turismo y Patrimonio Cultural)*, 12: 549–563.

Grace, M. and Lennie, J. (1998): Constructing and reconstructing rural women in Australia: The politics of change, diversity and identity. *Sociologia Ruralis*, 38(3): 351-370.

Granovetter, M. (1985): Economic action and social structure: The problem of embeddedness. *American Journal of Sociology*, 91: 481-510.

Hall, D. and Richards, G. (2003): *Tourism and sustainable community development*. Routledge.

Hall, D. (2004): Rural tourism development in Southeastern Europe: Transition and the search for sustainability. *International Journal of Tourism Research*, 6: 165–176.

Haven-Tang, C. and Jones, E. (2012): Local leadership for rural tourism development: A case study of Adventa, Monmouthshire, UK. *Tourism Management Perspectives*, 4: 28–35.

Hughes, A. (1997): Rurality and 'culture and womanhood': Domestic identities and moral order in village life. Cloke, p. and Little, J. eds., *Contested Countryside Cultures*, Routledge.

IDM (2016): *Dati e Fatti Turistici: La Destinazionale Alto Adige nell'anno 2016*. IDM Südtirol Alto Adige.

Iezzi, D. F. and Deriu, F. (2014): Women active citizenship and wellbeing: The Italian case. *Quality and Quantity*, 48(2): 845–862.

Jenkins, A. B., Hiner, C. C., Devine, J. and Tiefenbacher, J. (2016): *An integrated rural tourism approach to Normandy's Cider Trail*. Texas State University.

Jenkins, T. and Oliver, T. (2001): Integrated tourism: A conceptual framework. *Working Paper 1. SPRITE Project*. University of Wales.

Joppe, M., Brooker, E. and Thomas, K. (2013): Drivers of innovation in rural tourism: The role of good governance and engaged entrepreneurs. *Journal of Rural and Community Development*, 9(4): 49–63.

Komppula, R. (2014): The role of individual entrepreneurs in the development of competitiveness for a rural tourism destination: A case study. *Tourism Management*, 40: 361–371.

Lagravinese, R. (2013): Rural tourism and ancient traditions: Evidence from Italian regions. *Local Economy*, 28(6): 614–626.

Lane, B. (1994): Sustainable rural tourism strategies: A tool for development and conservation. *Journal of Sustainable Tourism*, 2(1–2): 102–111.

Lane, B., Kasthenholtz, E., Lima, J. and Majewsjki, J. (2013): *Industrial Heritage and Agri/Rural Tourism in Europe*. European Union.

Lo, M.C., Ramayah, T. and Hui Hui, H.L. (2014): Rural communities perceptions and attitudes towards environment tourism development. *Journal of Sustainable Development*, 7(4): 84–94.

Macdonald, R. and Joliffe, L. (2003): Cultural rural tourism: Evidence from Canada. *Annals of Tourism Research*, 30(2):307-322.

Maleki, M. R., Moradi, E. and Parsa, S. (2014): Rural tourism as a way to rural development. *International Journal of Academic Research*, 6(4): 79–84.

Manca, F. and Pozzolo, P. (2017). Una proposta metodologica per un indice della qualità della vita nei comuni rurali piemontesi. *Agriregionieuropa*, 29: 101-108.

Mcareavey, R. and Mcdonagh, J. (2011): Sustainable rural tourism: Lessons for rural development. *Sociologia Ruralis*, 51(2): 175–194.

Miller, G. (2001): The development of indicators for sustainable tourism: Results of a Delphi survey of tourism researchers. *Tourism Management*, 22(4): 351–362.

Miller, G. and Twining-ward, L. (2005): *Monitoring for a sustainable tourism transition: The challenge of developing and using indicators*. CABI Publishing.

Nilsson, P. A. (2002): Staying on farms: An ideological background. *Annals of Tourism Research*, 29(1): 7–24.

OECD (1994): Tourism strategies and rural development. *Zemedelska Ekonomika*, 42(1): 1–94.

Ohe, Y. (2000): On farm tourism activity and attitudes of the operators: A Hiroshima-Umbria comparative case study. *Tourism Economics*, 18(3): 577-595

Okazaki, E. (2008): A community-based tourism model: Its conception and use. *Journal of Sustainable Tourism*, 16(5): 511-529.

Oldrup, H. (1999): Women working off the farm: Reconstructing gender identity in Danish agriculture. *Sociologia Ruralis*, 39(3): 109-122.

Oppermann, M. (1996): Rural tourism in Southern Germany. *Annals of Tourism Research*, 23(1): 86–102.

Page, S. and Getz, D. (1997): *The Business of Rural Tourism*. International Thomson Publishing.

Park, D. and Yoon, Y. (2011): Developing sustainable rural tourism evaluation indicators. *International Journal of Tourism Research*, 13(1): 401–415.

Patterson, T. M., Niccolucci, V. and Bastianoni, S. (2007): Beyond "more is better": Ecological footprint accounting for tourism and consumption in Val di Merse, Italy. *Ecological Economics*, *62*(3–4): 747–756.

Pechlaner, H., Herntrei, M., Pichler, S. and Volgger, M. (2012): From destination management towards governance of regional innovation systems: The case of South Tyrol, Italy. *Tourism Review*, 67(2): 22–33.

Pesonen, J. and Komppula, R. (2010): Rural wellbeing tourism: Motivations and expectations. *Journal of Hospitality and Tourism Management*, 17(1): 150–157.

Pini, B. (2003): Feminist methodology and rural research: Reflections on a study of an Australian agricultural organisation. *Sociologia Ruralis*, 43(4): 418–433.

Rivera, M., Croes, R. and Lee, S. H. (2016): Tourism development and happiness: A residents' perspective. *Journal of Destination Marketing and Management*, 5(1): 5–15.

Roter Hahn (2016a): *Bäuerliches Handwerk*. Roter Hahn.

Roter Hahn (2016b): *Qualitäsprodukte vom Bauern*. Roter Hahn.

Roter Hahn (2016c): *Unlaub auf dem Bauenhof*. Roter Hahn.

Saarinen, J. (2007): Contradictions of rural tourism initiatives in rural development contexts: Finnish rural tourism strategy case study. *Current Issues in Tourism*, 10(1): 96–105.

Saxena, G., Clark, G., Oliver, T. and Ilbery, B. (2007): Conceptualizing integrated rural tourism. *Tourism Geographies*, 9(4): 37–41.

Saxena, G. and Ilbery, B. (2008): Integrated rural tourism : A border case study. *Annals of Tourism Research*, 35(1): 233–254.

Scaglione, A. and Mendola, D. (2017): Measuring the perceived value of rural tourism : A field survey in the western Sicilian agritourism sector. *Quality and Quantity*, 51(2): 745–763.

Scuttari, A., Lucia, M. D. and Martini, U. (2013): Integrated planning for sustainable tourism and mobility: A tourism traffic analysis in Italy's South Tyrol region. *Journal of Sustainable Tourism*, 21(4): 614–637.

Scuttari, A., Volgger, M. and Pechlaner, H. (2016): Transition management towards sustainable mobility in Alpine destinations: Realities and realpolitik in Italy's South Tyrol region. *Journal of Sustainable Tourism*, 24(3): 463–483.

Sharpley, R. (2002): Rural tourism and the challenge of tourism diversification: The case of Cyprus. *Tourism Management*, 23(3): 233–244.

Sharpley, R. and Jepson, D. (2011): Rural tourism: A spiritual experience? *Annals of Tourism Research*, 38(1): 52–71.

Sharpley, R. and Vass, A. (2006): Tourism, farming and diversification: An attitudinal study. *Tourism Management*, 27(5): 1040–1052.

Südtiroler Bauernbund (2018): *Ein.Blick*. https://www.sbb.it (November 2018). Südtiroler Bauernbund.

Südtiroler Bäuerinnenorganisation (2014): *Heint zu Tog Bäuerin sein*. Südtiroler Bäuerinnenorganisation.

Südtiroler Bäuerinnenorganisation (2016): *Aus unserer Hand*. Südtiroler Bäuerinnenorganisation.

Südtiroler Bäuerinnenorganisation (2017a): *Soziale Landwirtschaft in Südtirol*. Südtiroler Bäuerinnenorganisation.

Südtiroler Bäuerinnenorganisation (2017b): *Vielfalt entdecken ; Informationen und Reiseangebote der Südtiroler Bäuerinnenorganisation*. Südtiroler Bäuerinnenorganisation.

Thuot, L., Vaugeois, N. and Maher, P. (2010): Fostering innovation in sustainable tourism. *Journal of Rural and Community Development*, 5(2-1)：76-89.

Tommasini, D. (2013a): *Geografia, paesaggio, identita e agriturismo in Alto Adige Südtirol*. FrancoAngeli.

Tommasini, D. (2013b): Rural tourism in South Tyrol (Dolomites, Italy): Community cohesion, local development and farmer's identity. *Proceedings of the Community Tourism Conference*, 134-140.

Tourimusverein Jenesien (2016): *Jenesien an der Bozner Sunnseit'n mit Unterkunftsverzeichinis 2016. Tourimusverein Jenesien.* Tourimusverein Jenesien.

UdoV, A. and Perpar, A. (2007): Role of rural tourism for development of rural areas. *Journal of Central European Agriculture*, 8(2): 223–227.

UNWTO (2004): *Indicators of sustainable development for tourism destinations :a guidebook*. World Tourism Organization.

Vogel, S., Mauler, O., Karl, H. W. and Larcher, M. L. (2007): Perceptions of mountain farming in South Tyrol: Cultural differences in a border region. *IGU- Central Europe Conference 2007 Proceeding*, 209–220.

Wearing, S. and Mcdonald, M. (2010): The development of community-based tourism: Re-thinking the relationship between tour operators and development agents as intermediaries in rural and isolated area communities. *Journal of Sustainable Tourism,* 10(3): 191-206.

Wilbur, A. (2012): *Seeding alternatives: Back-to-the-land migration and alternative agro- food networks in Northern Italy*. Glasgow Thesis Service.

Wilbur, A. (2014): Cultivating back-to-the-landers: Networks of knowledge in rural Northern Italy. *Sociologia Ruralis*, 54(2): 167–185.

Wilson, P. (2009): *Woman in twentieth century Italy: Gender and history*. Palgrave.

Wilson, S., Fesenmaier, D.R., Fesenmaier, J. and Van Es, J.C. (2001): Factors for Success in Rural Tourism Development. *Journal of Travel Research*, 40: 132–138.

索　引

あ

アイデンティティ 9, 25, 29, 32, 37, 61, 74, 134, 161, 173

アグリツーリズモ 4, 5, 6, 8, 9, 10, 14, 15, 31, 38, 41, 42, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 86, 87, 88, 89, 90, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 138, 140, 141, 142, 143, 144, 146, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 167, 168, 170, 171, 172

アグリツーリズモ基本講習 6, 93, 94, 95, 142, 145

埋め込み 8, 10, 11, 23, 24, 25, 27, 34, 36, 38, 39, 43, 135, 138, 156, 157, 160, 161, 162, 165, 167, 172, 173

エンパワーメント ...5, 6, 8, 10, 11, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 29, 34, 36, 37, 38, 39, 43, 87, 96, 101, 102, 110, 113, 117, 124, 132, 134, 138, 143, 146, 147, 156, 157, 158, 160, 161, 162, 165, 167, 172

か

規模　4, 8, 14, 16, 17, 18, 19, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 34, 36, 37, 38, 39, 43, 45, 49, 61, 64, 65, 66, 68, 71, 79, 100, 111, 138, 141, 143, 146, 152, 154, 155, 156, 161, 162, 164, 167, 168, 169

CAP 政策 18, 62

コーポラティブ 33, 57, 83, 84, 85, 88, 108, 119, 136, 152

コムーネ 4, 16, 37, 45, 46, 49, 79, 134, 172

さ

サン・ジェネジオ... 6, 8, 18, 41, 79, 80, 81, 82, 83, 91, 92, 95, 107, 109, 110, 112, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 126, 127, 129, 134, 135, 136, 138, 139, 140, 141, 142, 144, 187

ジェンダー 28, 29, 30, 31, 33, 72, 169, 172, 173

持続性 8, 11, 24, 25, 26, 27, 34, 38, 39, 43, 138, 160, 161, 162, 167, 168, 187

自治県 9, 14, 16, 17, 37, 42, 43, 45, 47, 51, 52, 63, 67, 68, 71, 146

SPRITE.....22, 177

セットアサイド 19

た

第 730 号法 9, 67, 127, 148

デカップリング政策 18, 62

統合型ルーラルツーリズム 5, 6, 8, 10, 12, 13, 15, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 42, 43, 124, 138, 156, 160, 161, 162, 165, 166, 167

統合性 15, 21, 22, 23

な

内生性 5, 6, 8, 10, 11, 24, 25, 26, 27, 34, 37, 38, 39, 43, 87, 89, 92, 96, 98, 109, 110, 117, 124, 138, 143, 146, 147, 156, 157, 158, 160, 161, 162, 164, 165, 167

内発的観光開発 8, 13

ネットワーク 5, 6, 8, 9, 10, 11, 13, 15, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 34, 35, 36, 38, 39, 42, 43, 76, 84, 86, 87, 89, 92, 93, 94, 96, 98, 100, 101, 102, 106, 107, 109, 110, 111, 113, 116, 117, 126, 130, 132, 133, 134, 135, 136, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 167, 168, 170, 171, 172, 173

農家民宿 9, 14, 18, 19, 20, 31, 61, 62, 68, 73, 146, 172

農産物加工品 .. 9, 37, 65, 86, 87, 88, 89, 90, 95, 140, 142, 143, 148, 149, 158, 159, 160,

161, 163, 167

農場の学校 90, 97, 142, 150

農村で休暇を 9, 61

は

ファームツーリズム 20

補完性 5, 6, 8, 10, 23, 24, 25, 27, 34, 37, 38, 39, 43, 89, 92, 98, 106, 109, 110, 113, 126, 130, 137, 138, 147, 156, 157, 159, 161, 162, 165, 167, 168

ま

南チロル ...4, 5, 6, 7, 8, 10, 14, 15, 16, 17, 18, 28, 29, 30, 32, 33, 34, 36, 41, 42, 43, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 79, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 90, 91, 92, 93, 96, 97, 102, 103, 104, 105, 107, 108, 111, 115, 117, 123, 124, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 138, 142, 145, 146, 148, 150, 152, 155, 156, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 187

ら

LEADER 事業 19, 31, 172

ルーター・ハン ...9, 65, 66, 76, 77, 80, 83, 86, 88, 89, 96, 104, 109, 117, 119, 120, 122, 127, 129, 148, 150, 158, 187

謝　辞

本研究は、多くの方からのご指導とご助言により完成させることができました。指導教授である杜国慶先生には、研究の方法、分析の各段階、論理展開の全てにおいて、細部に至って懇切丁寧にご指導いただきました。私のような要領の悪い学生にも根気強く、時に厳しく指導してくださり、また、進捗の悪い時には穏やかに励ましてくださいました。そのような先生のお姿から、研究者の基本的な技術や知識のみでなく、学生への指導の姿勢を学ばせていただいたと考えており、大変感謝しております。また、副指導教授の佐藤大祐先生には、毎週、杜先生と一緒に研究会に時間を取ってくださり、その度に論理展開における核心的なご助言を賜りました。博士論文の執筆においては、自分が何を書きたいのか方向性を見失うこともありましたが、先生のご助言で深い海の底から抜け出せたことが何度もありました。そして、溝尾良隆先生には博士論文審査員をお引き受けいただき、豊富なご経験に基づいてルーラルツーリズムと農村女性の関係についてご助言を賜りました。溝尾先生は学部から前期課程の長きにおける恩師であり、前期課程から 10 年近いブランクを経て後期課程に入学を考えて相談した時には、背中を押してくださいました。イタリアのルーラルツーリズムを研究対象にしたのも、ご助言によるもので、今回研究を完成させることができ、大変嬉しく感じております。さらに、豊田三佳には在外研究に出られるまでの 1 年半、研究の方法についてご助言賜りました。海外調査の難しさや、調査の設計方法についてご指導いただき、感謝しております。なお、最終段階である論文校正においては、研究室の先輩である澁谷和樹先生にご協力いただき、感謝しております。

また、南チロルの現地調査においては、ルーター・ハンのディレクターの Kienzl 氏、研究員の Knollseisen 氏、サン・ジェネジオ村の農家の Platter 氏に支援をいただきました。保守的な農村を対象とした調査では、彼らの協力なしには調査を進められませんでした。見ず知らずの日本人研究者に手を差し伸べ

てくれた寛大さに感謝しています。また、現地調査においては、科学研究費補助金の支援を得ました（イタリア農村部の観光振興による地域の持続性向上プロセスの研究・課題番号 15H06622、農村の観光産業化における住民幸福度の変化に関する日伊比較研究・課題番号 17K02128）。年間に約 3 回、南チロルで現地調査を行うことができたのは、この科学研究費補助金のおかげでした。

大学院の後期課程に入学した 2016 年 4 月は、東京から帝京大学宇都宮キャンパスに通勤し、7 歳と 3 歳になる娘の子育てもあり、仕事と育児の両立だけでも忙しい時期でした。それでも大学院に入学し研究を進めることができたのは、夫・裕資の全面的な協力によるものです。また、義父・直樹と義母・登茂栄は、毎週我が家まで来て家事と育児を手伝ってくれ、娘の帆夏と彩果は週末研究で不在になる母に対し、「ママ頑張って」と送り出してくれました。そして、母・智枝子は私の進む道すべてを応援してくれました。こうして研究環境を整えてくれた家族に、心から感謝しています。

ここに、研究を完成させるまでにご指導とご支援くださったすべての方に、改めて深く感謝を申し上げます。今後は、博士論文の経験を糧に、ますます研究に精進するのみでなく、お世話になった先生方や家族に恩返しできる研究者になることができるよう努力して参りたいと考えております。

2019 年 7 月 7 日

五艘みどり